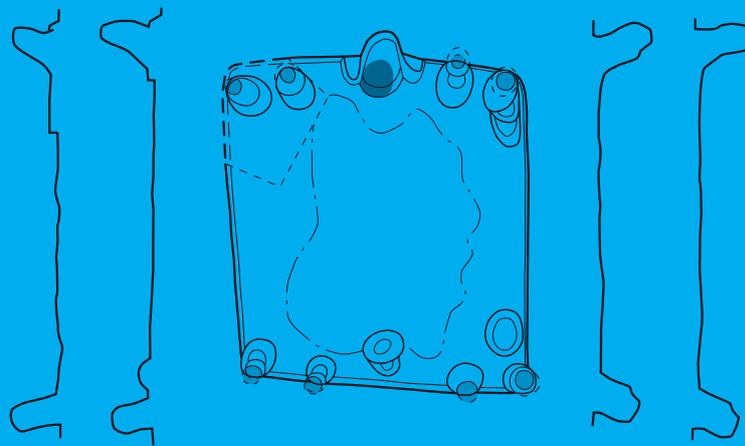


小原遺跡

(第19地点第2次)

都市計画道路7・6・1号東前原線外2路線道路改良及び流域
関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2017

水戸市教育委員会

小原遺跡

(第19地点第2次)

都市計画道路7・6・1号東前原線外2路線道路改良及び流域
関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

水戸市教育委員会

ごあいさつ

水戸市域の東側にある小原遺跡は、那須岳を水源とする那珂川右岸の台地上に位置しています。本遺跡の周辺には、文献に残る最古の貝塚である国指定史跡「大串貝塚」や、6世紀後半に築造された首長墓とみられる北屋敷古墳群、奈良・平安時代に交通の要衝として機能した平津駅家の関連集落と考えられている梶内遺跡など、多くの重要遺跡が残されており、古くから政治・文化の中心地域のひとつとして繁栄してきたと考えられています。

近年、小原遺跡が位置する東前町周辺は、東前第二土地区画整理事業の推進に伴い宅地化が急速に進んでおり、遺跡の様相も大きく様変わりしてきております。埋蔵文化財は、その性格上、開発などにより一度壊されてしまうと、二度と原状に復すことができないため、現代を生きる私たちひとりひとりが大切に保存しながら後世へと伝えていかなければならない貴重な国民共有の財産です。本市教育委員会といたしましては、その意義や重要性を踏まえ、開発事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護・保存に努めているところです。

この度の小原遺跡内における発掘調査では、周辺において広がりが確認されている奈良・平安時代の集落跡の一部が確認されました。中でも注目されるのが、カマドの両脇と対辺、四隅に斜め方向に穿たれた8つの柱穴を持つ特殊な竪穴建物跡で、中央付近に垂直方向に穿たれる4つの柱穴を持つ一般的な竪穴建物とは異なっていました。このような遺構は市内でもまだ発見例が少なく、古代の竪穴建物の構造を復元していくうえで大変貴重な成果を得ることができました。

ここに刊行する本書が、豊かな地域史の一端を復元することで貴重な文化財に対する保護・活用の意識の高揚や郷土愛の育成へと繋がることを願い、学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

末尾ながら、今回の調査実施にあたり、多大なる御理解と御協力を賜りました近隣住民の皆様方、並びに種々の御指導・御助言を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます、ごあいさつといたします。

平成29年3月

水戸市教育委員会
教育長 本 多 清 峰

例 言

- 1 本書は、水戸市東前町地内における都市計画道路7・6・1号東前原線外2路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴い実施された、小原遺跡第19地点の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、株式会社地域文化財研究所の調査支援を受け、水戸市教育委員会が主体となって行った。
- 3 遺跡の所在地及び面積、調査期間、担当者など調査体制は下記のとおりである。

所 在 地 茨城県水戸市東前町 1073 ほか

面 積 1,491 m²

調 査 期 間 平成 28 年 11 月 10 日 ～ 平成 29 年 1 月 10 日

調査担当者 米川暢敬（水戸市教育委員会事務局 教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター主幹）

調 査 支 援 斎藤 洋（株式会社地域文化財研究所）

調査参加者 [発掘調査] 野村浩史・高安幸且・石島 昇・市毛祐一・高岡真士・岡部五男生・
齊藤宏光・川又誠二・大貫浩一・北村 昶・飯塚 弘・飯田 昭・
小坂部克己・大山年明・高安丈夫・八巻省三・渡辺恵子・栗原芳子・
中島順子・石崎洋子・石崎寿子・海後晴美・江橋和子・榎澤由紀江
[整理調査] 野村浩史・川村理華・木村春代・藤井陽子・増田香理・小林真千子・
槇 勝雄・田中成光・古里兼吉

事 務 局 本多清峰（水戸市教育委員会教育長）

七字裕二（水戸市教育委員会事務局教育部長）

白石嘉亮（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課長）

長谷川仁（同 歴史文化財課埋蔵文化財センター所長）

米川暢敬（同 歴史文化財課埋蔵文化財センター主幹）

太田有里乃（同 歴史文化財課埋蔵文化財センター主事）

新垣清貴（同 歴史文化財課埋蔵文化財センター文化財主事）

丸山優香里（同 歴史文化財課埋蔵文化財センター埋蔵文化財専門員）

昆 志穂（同 歴史文化財課埋蔵文化財センター埋蔵文化財専門員）

下山はる奈（同 歴史文化財課埋蔵文化財センター埋蔵文化財専門員）

- 4 本書は、米川・斎藤が分担して執筆し、米川の助言・指導に基づいて斎藤・小川将之・野村浩史が編集した。文責は文末に記した。
- 5 調査記録類及び出土品は、一括して水戸市埋蔵文化財センターにて保管・管理している。
- 6 調査においては下記の方々にご指導・ご協力を賜った。（順不同・敬称略）

茨城県教育庁文化課 東前地区開発事務所

凡 例

- 1 本書で使用した遺構の略号は以下のとおりである。
SI：竪穴建物跡 SB：掘立柱建物跡 SF：道路状遺構 SK：土坑 SX：陥し穴状遺構・溝状遺構 Pit：ピット K：攪乱
- 2 測量は国家標準直角座標IX系（日本測地系）に基づいた。遺構実測図中の方位は座標北を示し、土層図及び断面図に記した数値は標高を示す。
- 3 遺構の形態・規模は基本的に現存している状態で判断した。計測は壁上端で行い、深さは検出面の最も高い位置から遺構内の最も低い位置までを測った。遺構内施設（柱穴等）の深さは床・底面を基準とした。
- 4 遺構平面図及び断面図の縮尺は各図に縮尺を明示した。
- 5 遺構の土層及び遺物の色調表現は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著日本色研事業株式会社）に準拠した。土層説明の中で、粒・ブロック等の含有量は、1%以下を「極微量」、1～2%を「微量」、2～5%を「少量」、5～10%を「中量」、10%以上を「多量」とした。同書の「粒状構造」「面積割合」を参照している。
- 6 出土遺物の縮尺は、土器類・石器類・鉄製品が1/3を基本としているが、大型の土器は1/4、小型の石器は2/3の縮尺を用いた。
- 7 遺物観察表の標記は、()内を復元値、〈 〉内を残存値として表す。遺物の計測値は規模を「cm」、重量を「g」で表した。
- 8 出土遺物一覧表の中で接合したものは1点とし、同一個体が明らかであっても接合しないものはそれぞれを別個に1点とした。
- 9 表紙に使用した図は、SI18の平面図並びにエレベーション図である。
- 10 挿図中で使用した線種類等は以下のとおりである。

遺構想定線 - - - 床面硬化範囲 — — — 攪乱・木根 - - - - -

カマド被熱・焼土範囲 …  カマド構築土（粘土）範囲 … 

黒色処理範囲 …  須恵器（断面）… 

遺物 … ●

※これ以外の表記は挿図中に記載した。

目 次

本文目次

ごあいさつ

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯 1

第2節 調査の方法と経過 1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境 2

第2節 歴史的環境 2

第3節 小原遺跡における既往の調査 6

第3章 調査の成果

第1節 基本層序 9

第2節 検出された遺構と遺物の概要 9

第3節 縄文時代 10

第4節 奈良・平安時代 12

第5節 近世以降 38

第6節 時代不明 38

第7節 遺構外出土遺物 39

第4章 総括

第1節 土地利用の変遷 47

第2節 SI18 の構造について 48

写真図版

抄録

挿図目次

第1図 遺跡の位置及び周辺の遺跡位置図.. 4

第2図 小原遺跡における既往の調査地点.. 7

第3図 小原遺跡第19地点全体図..... 8

第4図 基本層序..... 9

第5図 SX02..... 10

第6図 SX03..... 11

第7図 SX04..... 11

第8図 SI01..... 12

第9図 SI01 カマド及び出土遺物..... 13

第10図 SI02 及び出土遺物..... 14

第11図 SI03 及び出土遺物..... 15

第12図 SI04 及び出土遺物..... 16

第13図 SI05..... 17

第14図 SI05 出土遺物..... 18

第15図 SI07..... 19

第16図 SI07 出土遺物..... 20

第17図 SI08..... 20

第18図 SI08 カマド及び出土遺物..... 21

第19図 SI09..... 22

第20図 SI09 出土遺物..... 23

第21図 SI10..... 23

第22図 SI10 出土遺物..... 24

第23図	SI11	25	第34図	SI19 及び出土遺物	34
第24図	SI11 出土遺物	26	第35図	SB01	35
第25図	SI12	26	第36図	SK10 出土遺物	35
第26図	SI12 出土遺物	27	第37図	SK01 ~ 25	36
第27図	SI14	27	第38図	Pit01 ~ 07	37
第28図	SI15 及び出土遺物	28	第39図	SF01	38
第29図	SI16	29	第40図	SX01	39
第30図	SI16 出土遺物	30	第41図	遺構外出土遺物	39
第31図	SI17	31	第42図	古代の時期別遺構変遷図	46
第32図	SI18	32	第43図	小原遺跡における竪穴建物	48
第33図	SI18 出土遺物	33	第44図	SI18 柱構造復元図	49

表目次

第1表	周辺の主な遺跡一覧	5	第4表	ピット一覧表	37
第2表	小原遺跡における既往の調査一覧	7	第5表	出土遺物観察表	40
第3表	土坑一覧表	37	第6表	出土遺物一覧表	45

写真図版目次

図版 1	A区全景 (1) A区全景 (2)	図版 9	SI17 全景 SI18 全景 SI18 柱穴近景(1) SI18 柱穴近景 (2) SI18 柱穴近景 (3) SI18 柱穴近景 (4)
図版 2	B区全景 (1) B区全景 (2)	図版 10	SB01 全景 SB01-P1 土層断面 SB01-P2 土層断面 SB01-P3 土層断面 SK01・04 全景 SK02 全景 SK03 全景 SK05 全景
図版 3	C区全景 (1) C区全景 (2)	図版 11	SK06 全景 SK07 全景 SK08 全景 SK09 全景 SK11 全景 SK12 全景 SK13 全景 SK14 全景
図版 4	D区全景 (1) D区全景 (2)	図版 12	SK15 全景 SK17 全景 SK18 全景 SK19 全景 SK20 全景 SK23・24・25 全景 SX01 全景 SX01 土層断面
図版 5	SX02 全景 SX03 全景 SX04 全景 SX04 土層断面 SI01 全景 SI01 カマド近景 SI02 全景 SI03 全景	図版 13	SI01・02・03・04・05 出土遺物
図版 6	SI03 鉄製品出土状況 SI04 全景 SI04 土層断面 SI05 全景 SI05 カマド近景 SI05 土層断面 SI05 土製品出土状況 SI07 全景	図版 14	SI07・08・09 出土遺物
図版 7	SI07 土層断面 SI08 全景 SI08 カマド土層断面 SI09 全景 SI09 土師器(墨書)出土状況 SI09 鉄製品出土状況 SI10 全景・土層断面 SI10 須恵器出土状況	図版 15	SI10・11・12 出土遺物
図版 8	SI11 全景 SI11-P3 全景 SI12 全景 SI14 全景 SI15 全景 SI15 土層断面 SI16 全景 SI16 土層断面	図版 16	SI15・16・18(1) 出土遺物
		図版 17	SI18(2)・19, SK10, 遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯

平成28年4月13日付けで、土地区画整理事業に伴い、水戸市長（都市計画部市街地整備課東前地区開発事務所扱、以下「事業者」という）から、水戸市教育委員会（以下「市教委」という）教育長あて、「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」が提出された。

市教委はこの照会文書に対し、開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地「小原遺跡」に該当していること、試掘調査の実施が必要であること、文化財保護法第94条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を茨城県教育委員会教育長（以下「県教委」という）あて提出する必要がある旨回答した（平成28年4月26日付け教理第422号）。その後、平成28年8月16日及び9月2日に開発対象地内で試掘調査を実施したところ、遺構・遺物が確認されたことから本地点を小原遺跡第19地点として整理した。

本地点は区画整理事業に伴う道路部分になるため、本件は「茨城県埋蔵文化財発掘調査等取扱い基準」原則Ⅲ「恒久的な構造物の設置により相当期間にわたり埋蔵文化財と人との関係が絶たれ、当該埋蔵文化財が破損したに等しい状態となる場合」に該当すると判断された。そのことから市教委は、現状保存に向け事業者と協議を重ねたが、工事による影響は不可避であり、埋蔵文化財の現状保存は極めて困難であるとの結論に達した。市教委は事業者から提出のあった「埋蔵文化財発掘の通知」に、記録保存を目的とした本発掘調査を実施すべき旨の意見書を付して県教委教育長あて進達した。この通知に対し、県教委教育長から平成28年10月18日付け文第1784号にて、工事着手前に発掘調査を実施すること、また、調査の結果、重要な遺構が確認された場合にはその保存について別途協議を要する旨の指示・勧告があった。

これを受けて、市教委は工事対象地のうち埋蔵文化財が確認された面積1,491㎡を調査対象とし、平成28年11月10日～平成29年1月19日の期間に株式会社地域文化財研究所の支援を受けて記録保存を目的とした本発掘調査を実施することとなった。（米川）

第2節 調査の方法と経過

発掘調査範囲は水戸市教育委員会が行った試掘調査の成果に基づいて設定した。

本調査に向けた表土除去作業は同教育委員会が指定する遺構確認面まで慎重に進めた。その後、遺構確認を目的とした精査を行い、今回の本調査対象となる各遺構を確定させた。遺構測量に関しては公共座標に従い10m×10mのグリッドを設置し、その他任意の地点にも3ヵ所の水準点を設けて遺構と遺物の記録保存に努めた。グリッドには東西方向に算用数字、南北方向にアルファベットを付している。遺構の実測については1/20の縮尺を基本として断面、平面図を作成し、その他、実測の対象物に合わせて最適な縮尺を選択しながら記録を進めた。写真撮影は35mmのモノクロ、カラーリバーサルフィルムを用いて行い、その補助としてデジタルカメラを用いた。さらに必要に応じて中判カメラによる撮影を実施している。

以下は発掘調査日誌から抜粋した調査の経過概略である。

平成28年11月10日、小原遺跡第19地点の発掘調査を開始する。任意に設定した調査区Dより着手した。これに合わせて表土除去作業はD→B→A→Cの順で行った（区割りは全体図を参照）。11月

第1章 調査に至る経緯と調査経過

17日、D区の掘削調査を開始する。11月18日、測量員による基準点の移動ほか、グリッド杭、水準点の設置を行う。11月21日、A・B・D区の遺構配置図面の作成、発掘調査に着手する。11月28日、C区の発掘調査に着手する。11月30日、A・B・D区の遺構実測作業を進める。12月7日、A・B・D区の掘り方調査に着手する。12月12日、C区の掘削調査が完了する。12月16日、D区の掘削調査が完了する。あわせてC・D区について教育委員会より調査の調査終了確認を受ける。12月22日、A・B区の掘削調査が完了し、教育委員会より発掘調査の終了確認を受ける。1月10日、施設、機材を搬出し、現地調査を終了する。

整理調査は、発掘調査によって得られた出土品及び記録を対象として行った。出土品は遺物収納箱6箱分で、作業は遺物水洗い・注記、遺物接合・復元、遺物実測、トレース、図面・写真の整理及び台帳の作成、遺構図面の修正、報告書編集へと進めた。掲載遺物は112点である。

出土した遺物はすべて水洗いし、注記は可能な限り行った。注記番号は凡例で示した略号を用い、遺跡名・遺構・出土位置・出土年月日の順に記載した。遺物の接合にはセメダインCを用いた。遺物はすべて分類し、種別や個体・破片別に集計し、出土遺物一覧表（第6表）に記載した。実測は原寸で行い、トレース後デジタルカメラで撮影した。遺物番号は報告書で使用した番号で統一し、報告書使用と未使用に分け内容を明記して収納した。

遺構図面の修正は第2原図を作成して行った。遺構写真は撮影内容・方向・日付などを記載しアルバムに収納した。

(斎藤)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

水戸市は、関東平野の北東部、茨城県のほぼ中央に位置する。市域の北部には、西から東へ流れる那珂川とその支流により形成される沖積低地が広がり、これに沿うように東茨城台地が太平洋に向かって突き出している。その下流域右岸の大半が水戸市域となる那珂川は、栃木県的那須連山を水源として、八溝山地の西縁を南へ流れた後、烏山の南から方向を東へ変えて八溝山地を横断し、今度は御前山を背にして南東へ方向を変えて那珂台地と東茨城台地との間を太平洋へと流れ出る。この那珂川が存在により、栃木県域に広がる那須野原や喜連川丘陵などの内陸部と太平洋沿岸部とが水上交通によって結ばれることから、歴史的に水戸市域は交通の要衝地となることが多かった。

小原遺跡は、東茨城台地の北東部をなす水戸台地の東側縁辺、標高約19mのところの位置しており、東西約500m、南北約1kmの範囲に展開する。この一帯は明治18(1885)年には広範囲にわたり松林が広がっていたが、近年では土地区画整理事業に伴い、大規模な土地改変が行われ、宅地化が急速に進んでいる。

第2節 歴史的環境

小原遺跡が立地する東茨城台地、特に東端部には、縄文から近世に至るまで、数多くの遺跡が密集している(第1図)。ここでは小原遺跡の周辺に分布する遺跡群とそれらを取り巻く歴史的環境を概観する。

小原遺跡周辺における人々の営みの歴史は旧石器時代にまで遡る。当該期の資料は、石川川を挟んだ対岸に位置する森戸古墳群からの出土例が知られているのみである。森戸古墳群では、第12号

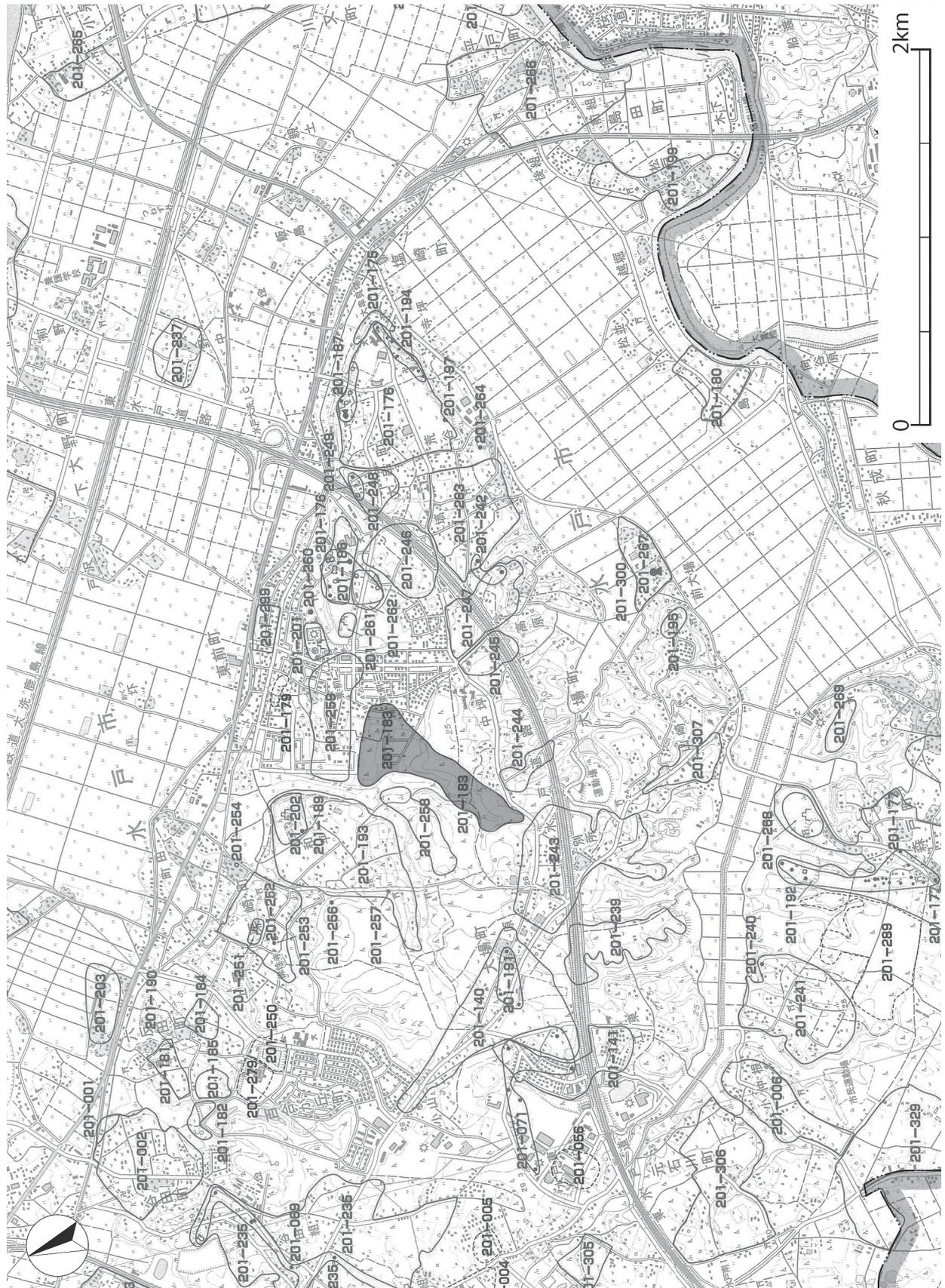
墳（大六天古墳）の発掘調査において、チャートやメノウから構成される石器群の出土が報告されている。それら石器群の大部分は墳丘盛土・周溝覆土内からの出土であるが、剥片であるものの、1点が周溝底面のローム中から出土している（伊東 1976）。これらの資料のほか、明確に遺跡としてくられた範囲内での採集ではないが、水戸市百合が丘、下入野町地内などにおいて、ガラス製黒色デイスイトや硬質頁岩製の種子柴型尖頭器が採集されている（川口 2005, 2008）。

縄文時代の遺跡としては、第一に挙げるべきは大串貝塚であろう。大串貝塚は『常陸國風土記』那賀郡条に記された巨人伝説とともに著名な前期貝塚であり、貝塚としては、文献に記載された世界最古のものである。一部が国指定となっているが、その名に恥じぬ豊富な出土資料は、質・量ともに茨城県下における当該期の貝塚を凌駕している（川崎・吹野 1986, 井上・金子 1996）。また、下畑遺跡では、加曾利E式、大木8b式期の竪穴建物跡をはじめとする遺構群が確認されており（井上 1985）、複式炉を有する住居跡が発見されるなど、中期から後期にかけての人々の営みを窺うことができる。

弥生時代については、小原遺跡周辺における状況も水戸市全域における傾向に変わらず、生活の痕跡は他時期のそれに比べてやや低調な傾向にある。しかしながら、後期に至っては、丘陵沿いの台地上や縁辺部に立地する東前原遺跡、高原遺跡、雁沢遺跡などで遺物の採集や出土が報告されており、これらの調査成果の蓄積により、徐々にではあるが、水戸市域における弥生時代の土地利用の様相が像を結びつつある。

古墳時代を迎えると、大串古墳群、北屋敷古墳群、高原古墳群、森戸古墳群などを筆頭に、古墳が活発に築造されるようになる。これらの古墳のうち、北屋敷古墳群第2号墳では発掘調査が実施されており、円筒埴輪、武人をはじめとする人物埴輪、馬形埴輪など形象埴輪が多く出土した（井上 1995）。このうち、ほぼ全身が出土した武人埴輪は水戸市指定文化財となっている。集落の分布としては、中期の集落に係る資料に乏しく、周辺では管見に触れないが、前期の集落としては大串遺跡（井上 1994）、後期の集落としては梶内遺跡（櫻村 1995）などの調査事例がある。当該台地上においては、前期・後期ともに活発な土地利用がみてとれる反面、中期における土地利用が緩慢であると言わざるを得ない。このことは集落展開の動態について、中期において相応の変動があったことを示唆するものである。

奈良・平安時代となり、律令制下の中央政権体制が構築されていくなか、水戸市域においても地方末端支配を目的とした郡衙及び郡寺の造営が、渡里町に所在する台渡里官衙遺跡群において行われ、律令体制の中へと組み込まれていくこととなる。水戸市は全域が常陸国那賀郡域内にあり、当該遺跡周辺は同郡芳賀里（郷）に比定される（中山 1979）。当該時期の遺跡として、先ず注目すべきは大串遺跡の存在である。大串遺跡第7地点における発掘調査では、断面V字状を呈する大型の溝によって区画された内部に、整然と並ぶ総地業の礎石建物跡3棟が確認されている。また、束柱をもち、壺地業を有する桁行6間×梁行3間の大型の掘立柱建物跡なども発見され、一般集落とは大きく異なる様相を示している。大型の掘立柱建物柱抜き穴からは多量の炭化材と共に炭化米が、区画溝からは炭化した穎稲や穀稲が出土しており、これらの建物が正倉としての性格を有し、火災により焼失していたことが明らかになっている。また、「厨」銘墨書土器も出土するなど、官衙的色彩の強さが目立つ遺構・遺物群から、本遺跡は那賀郡内に設置された正倉別院であったであろうことが指摘されている（小川・大淵ほか 2008）。



第1図 遺跡の位置及び周辺の遺跡位置図 (1:30,000)

第1表 周辺の主な遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
201-006	下畑遺跡	集落跡	縄文土器(中・後), 石器(打製石斧・石鏃・石錘・凹石・磨石・石棒・石剣), 土製品(土器片鏃), 土師器(古後)	
201-175	大串貝塚	貝塚	縄文土器(前・後), 石製品, 貝刃, 骨角製品(釣針・刺突具)	国史跡
201-176	大串遺跡	古墳/集落跡/ 官衙	縄文土器(早・前・後), 石器(有舌尖頭器・石鏃・礫器・磨製石斧・敲石・磨石), 骨角製品(釣針・刺突具), 貝刃, 自然遺物(貝・獣骨・魚骨), 土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平), 土製品(土玉・土鏃・紡錘車), 石製品(管玉・砥石・炉石・軽石), 金属製品(鎌・刀子)	S62, S63, H6, H8, H14, H17, H19 調査
201-183	小原遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平)	本遺跡
201-185	薄内遺跡	集落跡	剥片(先土器), 縄文土器(早・前・中・後), 弥生土器(前・中・後) 石器(石鏃未成品・石鏃・剥片・磨石・敲石・台石), 土師器(古・奈), 土製品(紡錘車・鏃), 金属製品(鏃・不明製品), 陶器, 磁器	
201-186	金山塚古墳群	古墳群	円筒埴輪, 金属製品(鉄鏃・刀子)	前方後円0(1), 円3(5), S26年調査
201-187	大串古墳群	古墳群	五獣鏡・銅環・直刀・鉄鏃・壺鏡・兵庫鎖・素和鏡板付轡	前方後円墳1, 円1(5)
201-192	森戸古墳群	古墳群	台形様石器?・剥片(先土器), 底部穿孔壺, 円筒埴輪, 形象埴輪, 石製品(勾玉)	前方後円1, 方0(1), 円15(17)
201-193	上平遺跡	集落跡	土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平), 墨書土器	
201-194	長福寺古墳群	古墳群		円7
201-195	涸沼台古墳群	古墳群		円7?
201-201	椿山館跡	城館跡		
201-242	高原古墳群	古墳群	弥生土器(後), 須恵器(奈・平), 瓦	円2, H3・H6・H17 調査
201-202	和平館跡	城館跡		
201-235	町付遺跡	集落跡	縄文土器(早), 弥生土器(後・終), 石器(磨製石斧・勾玉), 土製品(紡錘車), 土師器(古前・中・奈・平), 須恵器(奈・平), 陶器, 磁器, 土師質土器	
201-244	諏訪前遺跡	集落跡	土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平)	
201-245	沢幡遺跡	集落跡	土師器(奈・平), 須恵器(奈・平), 墨書土器, 円面硯, 鉄製品(紡錘車・鏃・鎌)	
201-246	梶内遺跡	集落跡	土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平), 墨書土器, 円面硯, 金属製品(紡錘車・煙管・銭貨), 陶器	
201-247	高原遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(奈・平), 須恵器(奈・平), 土師質土器, 金属製品(煙管)	
201-248	北屋敷遺跡	集落跡	土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平), 瓦, 陶器	
201-249	北屋敷古墳群	古墳群	縄文土器(早・前・中), 弥生土器(後), 土師器(前・中), 石製品(石鏃・炉石), 土製品(土玉・紡錘車), 埴輪(円筒・形象), 須恵器(奈・平)	円1(2)
201-258	打越遺跡	集落跡	土師器(奈・平), 須恵器(奈・平)	
201-259	東前原遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平)	
201-262	大串原館跡	城館跡		
201-263	宮前遺跡	集落跡	土師器(奈・平), 須恵器(奈・平)	
201-267	大場天神山古墳	古墳	弥生土器(後), 三角縁神獸鏡, 鉄剣, 太刀	前方後円?1
201-289	元石川大谷原遺跡	集落跡	剥片(先土器), 縄文土器(後), 土師器(古後), 須恵器(奈・平), 墨書土器, 灰釉陶器, 土製品(土鏃), 鉄製品(鉸具・刀子・鏃・錠?), 銭貨	

このほか、梶内遺跡は、7世紀から10世紀まで、途中希薄になる時期は存在するものの、比較的長く継続する集落跡として注視すべき遺跡である。当該遺跡では、「舎人」「長」や里(郷)名を記したとみられる「芳」銘墨書土器、9点もの円面硯を出土しており、官衙関連遺跡としての性格を匂わせる(櫻村 1995)。以上のような遺跡群の集中する様は、『常陸國風土記』那賀郡条の「平津驛家西

第2章 遺跡の位置と環境

「一二里有岡名曰大櫛」の記事（秋本 1958）とあわせ、東前原遺跡とその周辺地域が常陸国那賀郡芳賀里（郷）の中樞ともいえる地域であったことを物語っている。

武士が実権を握る中世に旧常澄村域と重なる恒富郷を根拠としていたのは、常陸平氏大掾氏の一流である石川氏であった（常澄村史編さん委員会編 1989）。小原遺跡周辺の当該時期の遺跡としては、椿山館跡、和平館跡、大串原館跡が挙げられる。いずれの城館跡も土塁の残存が報告されているが、調査事例が少なく、その詳細については不明な点が多い（水戸市教育委員会 1999）。

近世において、当該地域の台地上は水戸城下の外縁部にあたり、必ずしも前代のような求心力を有する地域であるとは言い難い。しかしながら、当該時期に帰属する溝跡や土坑などは各所で散見され、その土地利用の痕跡を窺うことはできる。なかでも、『新編常陸国誌』などに立原伊豆守の居所と記されている伊豆屋敷跡では、発掘調査の結果、3条の土塁と1条の溝跡が確認されている（井上 1998）。

以上のように、小原遺跡が立地する台地上には、縄文時代から近世に至るまで、豊富な遺跡が所在している。古代には、大串遺跡や梶内遺跡などの官衙関連遺跡が展開をみせ、古代常陸国那賀郡の中樞であった台渡里官衙遺跡群との色濃い関連性は疑うべくもない。現在、小原遺跡周辺における調査の蓄積には目覚ましいものがある。これらの調査成果の丹念な検討から、当該地域の歴史像が結ばれていくことが期される。

第3節 小原遺跡における既往の調査

当該調査の報告書刊行時において、小原遺跡における発掘調査は、計18地点において行われている（第2図・第2表）。これらのうち、遺構・遺物が確認されたのは、第3～10、13～14、16～18地点で、記録保存を目的とした本発掘調査に至ったのは第3・4・8・16～18地点の計6地点である。

第3地点からは、7世紀後半、8世紀、9世紀にかけての竪穴建物跡群のほか草堂とみられる2×2間の掘立柱建物跡が検出されており、平安時代の竪穴建物跡からは「宮」銘の墨書土器が出土している（太田・染井・土生 2015）。

第4地点からは、6世紀、7世紀後半、8世紀、9世紀にかけての竪穴建物跡群が一部重複する状態で検出されており、本地点に先行する集落跡や同時期の集落跡が広く展開している状況がうかがえる。また、9世紀代に帰属する一部の竪穴建物跡からは、第3地点で出土したものと同一「宮」のほか、「□厨」と釈読できる墨書土器も出土している。

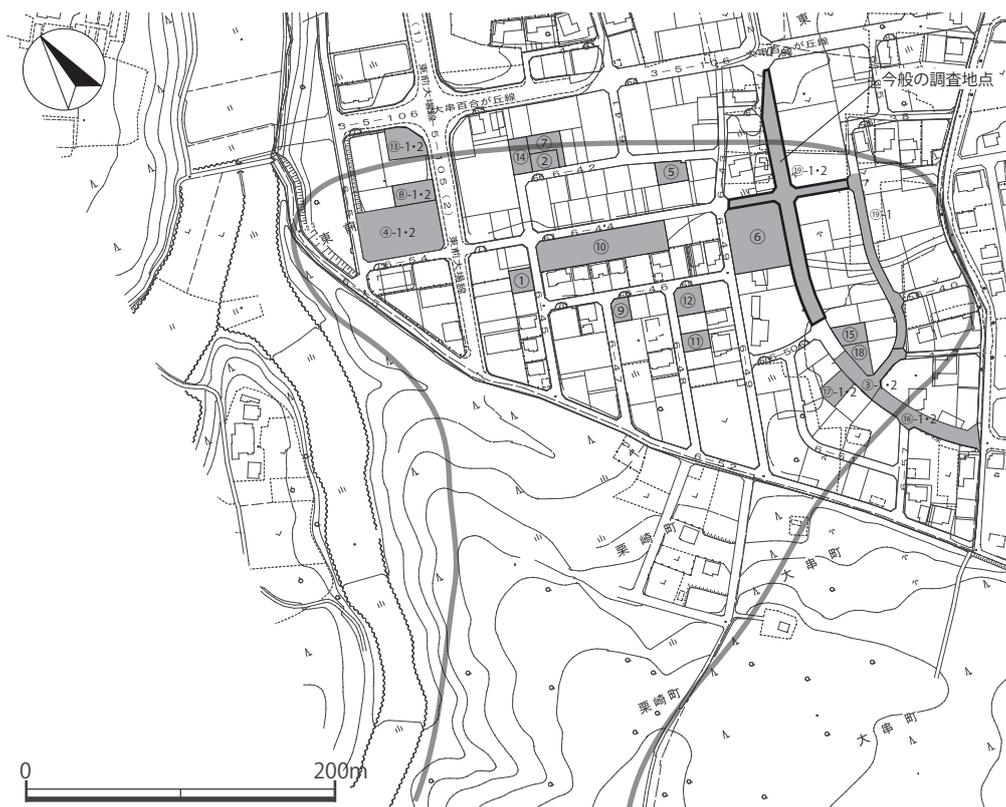
第8地点（第2次）からは、6世紀と奈良・平安時代の竪穴建物跡やピット、土坑などが検出されるとともに、土師器・須恵器・土製支脚等が出土している。

第16地点からは、縄文時代前期の土器や石器のほか、奈良・平安時代の竪穴建物跡と近世の溝跡が検出されている（米川・齋藤 2016）。

第17地点（第2次）からは、奈良・平安時代の竪穴建物跡や、掘立柱建物跡、ピットなどが検出されるとともに、灰釉陶器や鉄製の鎌等が出土している。

第18地点からは、奈良・平安時代の竪穴建物2棟が重複する形で検出され、鉄製の紡錘車も出土している。

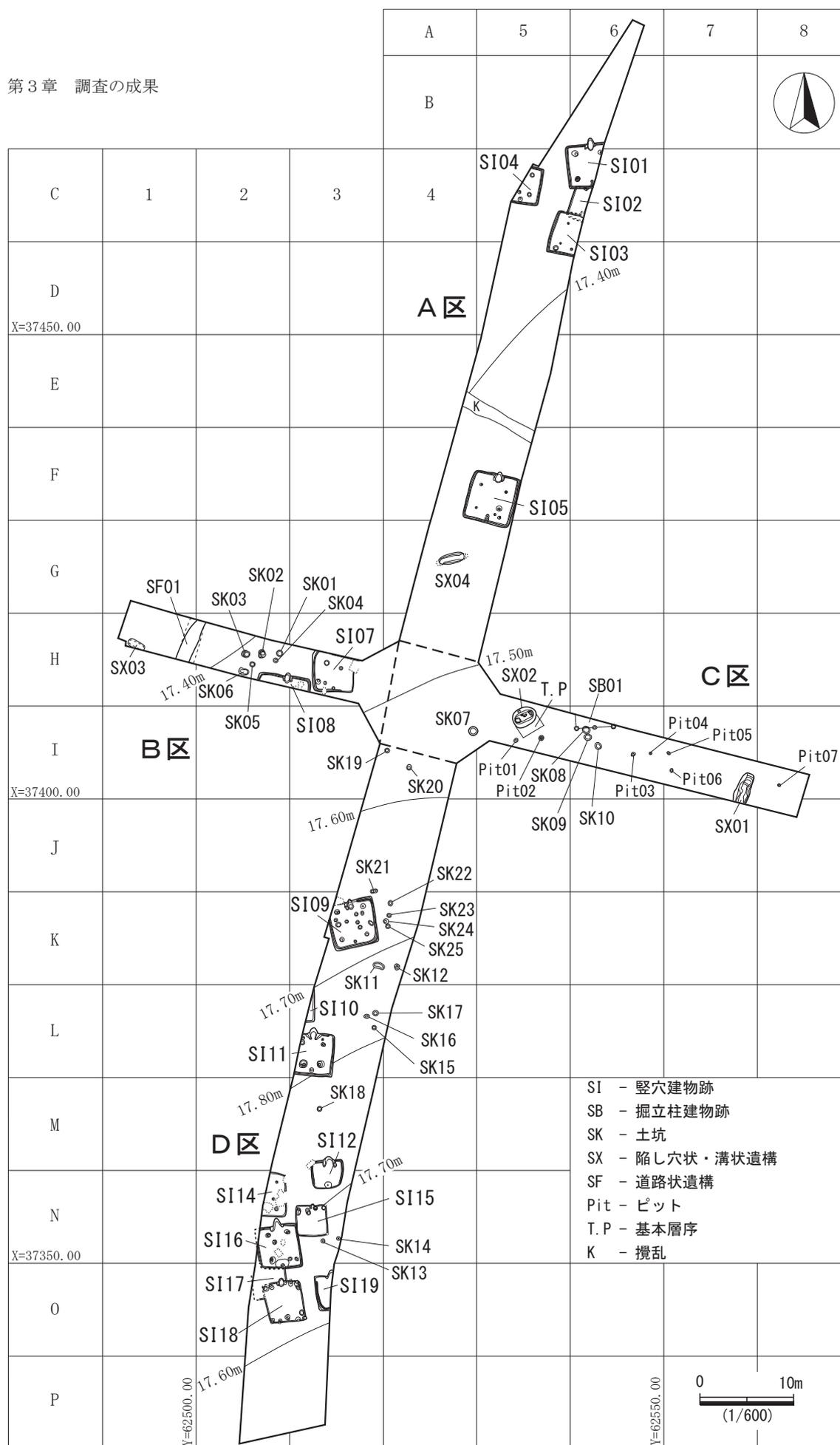
以上の成果から、小原遺跡においては、古墳時代、奈良・平安時代の集落が展開しており、周辺に展開する那賀郡衙正倉別院と平津駅家の複合遺跡とみられる大串遺跡（第7地点）や官衙周辺集落とみられる梶内遺跡との関連性が想起される。（米川）



第2図 小原遺跡における既往の調査地点 (1:5,000)

第2表 小原遺跡における既往の調査一覧

地点名	調査箇所	年度	種別	調査原因	遺構	遺物
第1地点	東前町 1049-4	H24	試	個人住宅建築	—	—
第2地点	東前町 1150-3	H26	試	個人住宅建築	—	—
第3地点	東前町 1056~1065	H26	試/本	土地区画整理事業	○	○
第4地点	東前第二土地区画整理事業 73 街区 2・3・6	H26	試/本	個人住宅建築	○	○
第5地点	東前第二土地区画整理事業 66 街区 20	H26	試	個人住宅建築	—	—
第6地点	東前第二土地区画整理事業 62 街区 3・4・5	H27	試	共同住宅建築	○	○
第7地点	東前町 1150-2・4	H27	試	個人住宅建築	○	○
第8地点	東前第二土地区画整理事業 73 街区 1・5	H28	試/本	個人住宅建築	○	○
第9地点	東前第二土地区画整理事業 69 街区 1	H27	試	土地鑑定	—	○
第10地点	東前第二土地区画整理事業 67 街区 1・2	H27	試	老人ホーム建築	○	○
第11地点	東前第二土地区画整理事業 68 街区 17	H27	試	個人住宅建築	—	—
第12地点	東前町字原 1042, 1055	H27	試	賃貸住宅建築	—	—
第13地点	東前第二土地区画整理事業 73 街区 7	H27	試	個人住宅建築	○	○
第14地点	東前町 1150-1	H27	試	個人住宅建築	—	○
第15地点	東前第二土地区画整理事業保留地 56 街区 9	H27	試	個人住宅建築	—	—
第16地点	東前町 1064 の一部, 1065 の一部, 1029-8	H28	試/本	土地区画整理事業	○	○
第17地点	東前町 1060, 1062-1	H28	試/本	個人住宅建築	○	○
第18地点	東前町 1062-1	H28	試/本	個人住宅建築	○	○



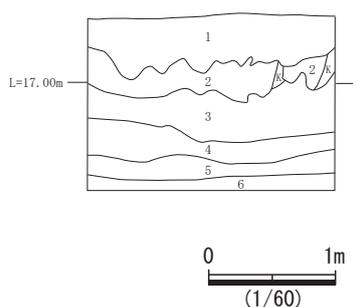
第3図 小原遺跡第19地点全体図

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

基本層序の観察は15グリッドに設定したテストピットにおいて行った。

1層は木根の影響を受けたソフトローム層であり、2～4層はハードロームとなり硬く締まる。3・4層は黒色・赤色酸化粒を全体的に含む。5層は所謂赤城山鹿沼パミス（軽石）層（Ag-KP）で、6層はこの赤城山鹿沼パミス（軽石）層に白色の細砂が混入する。



土層説明

1. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 ソフトローム。粘性有。
2. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 ハードローム。締まり強。
3. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 ハードローム。黒色・赤色酸化粒を全体的に少量含む。
4. 10YR 4/4 褐色土 ハードローム。黒色・赤色酸化粒を全体的に中量含む。
5. 10YR 8/6 黄橙色土 赤城山鹿沼パミス（軽石）層。締まり強、粘性有。
6. 10YR 8/6 黄橙色土 赤城山鹿沼パミス（軽石）層。締まり強。白色の細砂が混じる。

第4図 基本層序

第2節 検出された遺構と遺物の概要

今回の発掘調査によって検出された遺構は、縄文時代のものと考えられる陥し穴状遺構が3基、奈良・平安時代の竪穴建物跡が17軒（遺構検出時に番号を付したSI06とSI13については、出土遺物もなく、建物跡と判断できなかったため欠番とした）、掘立柱建物跡が1棟、土坑が25基、ピット7基、近世以降の所産と考えられる道路状遺構が1条、時期・性格不明の溝状遺構が1条である。調査範囲は耕作地と低木の山林であったために後世の攪乱が顕著であり、遺構の遺存状況は良好とは言いがたい。調査区は、耕作物の都合によりA・B・C・Dの4区に分割している。遺構の検出状況は、各区共に調査範囲全体に遺構の分布がみられるが、各時代毎の傾向はうかがわれない。しかしA区北側とD区南側については、奈良・平安時代に帰属する竪穴建物跡の分布密度が若干高めである。またD区より検出されたSI18は、支柱穴の配置と掘削状況が特徴的であるため、遺構の事実記載のほかにも総括でも若干の考察を試みている。当該遺跡の地形は、一見平坦に見えるものの、北西方向に緩やかに下っている。

各遺構より出土した遺物は、時代別に縄文時代、奈良・平安時代に比定されるもので、この中でも特筆される遺物として、奈良・平安時代では鉄製品〔鎌、刀子、釘（SI01・02・03・05・09・11・遺構外）〕と墨書土器（SI09-1）がある。

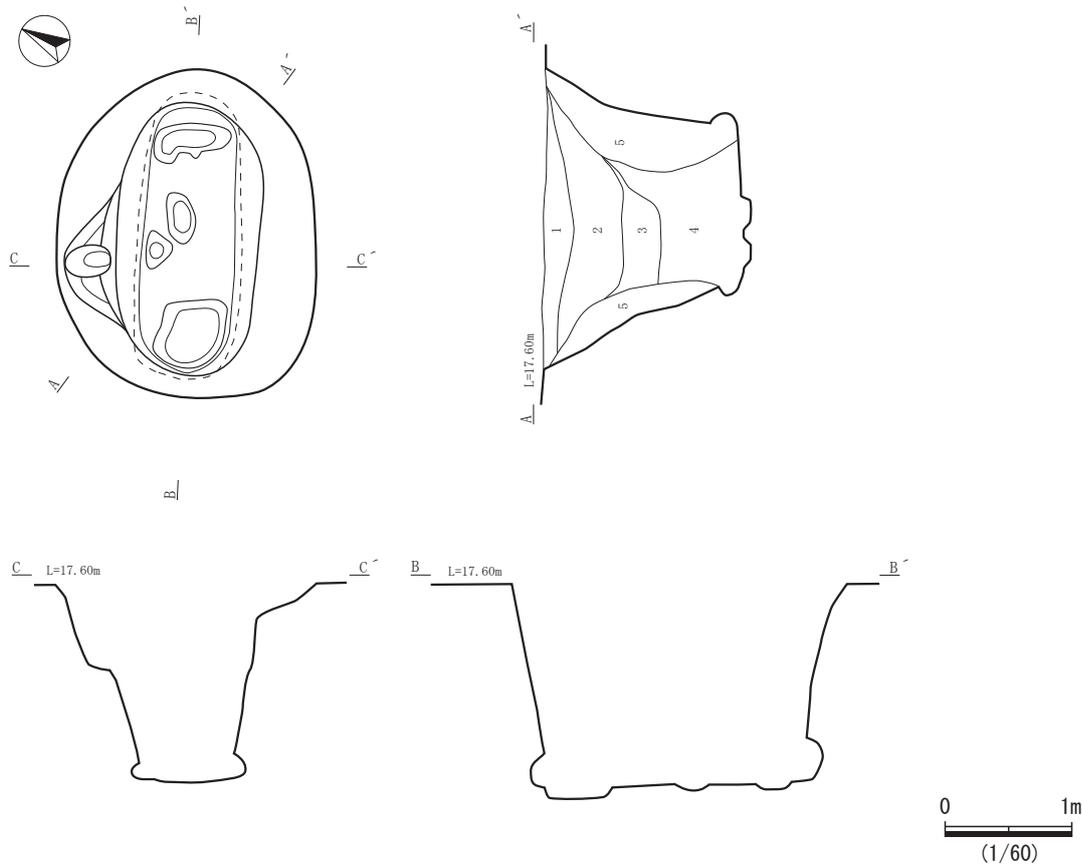
次節以降では、各時代・遺構形状別に発掘調査の成果を報告する。

第3節 縄文時代

陥し穴状遺構

SX02 (第5図, 図版5)

【位置】I 5 グリッドに位置する。【平面・断面形】平面はやや歪な楕円形をなし、東西方向の断面形は逆台形、南北方向は狭い箱形を呈し、遺構のほぼ中段には「足場」とも考えられるテラス状の平場が認められる。【規模】長軸 2.65m, 短軸 2.05m, 深さは 1.55m を測る。【主軸方向】長軸方向は N - 60° - E を示す。【覆土】5層からなる自然堆積である。【遺物】出土していない。【時期・性格】覆土及び形状から縄文時代の陥し穴状遺構と考えられる。



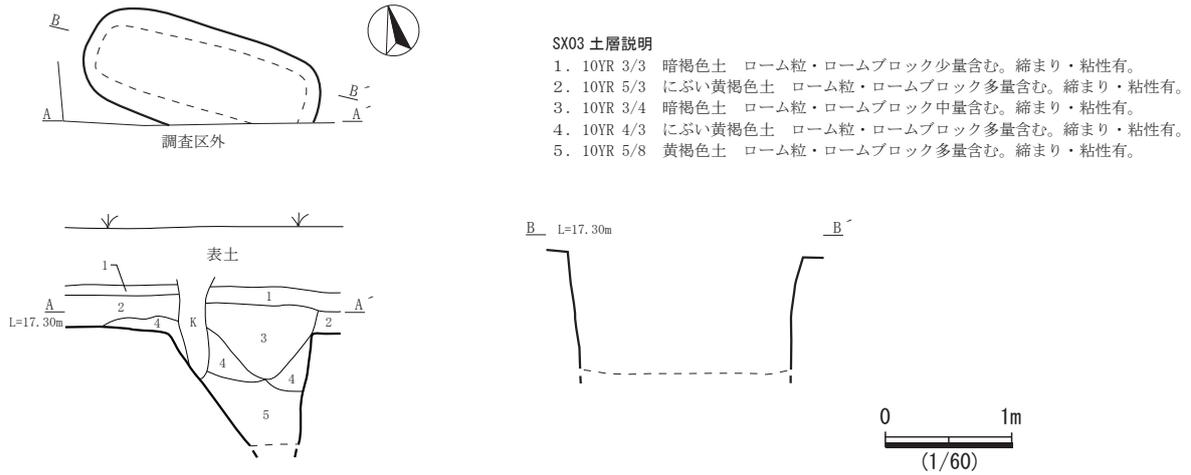
SX02 土層説明

1. 7.5YR 6/4 にぶい橙色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
2. 7.5YR 4/3 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり強, 粘性有。
3. 7.5YR 4/4 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
4. 10YR 5/6 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
5. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。縮まり・粘性有。

第5図 SX02

SX03 (第6図, 図版5)

【位置】H 1 グリッドに位置する。【平面・断面形】南側の一部が調査区外となるが、長楕円形をなし、東西方向の断面形は箱形を呈すと思われる。【規模】長軸 1.85m, 短軸 0.80m, 深さは 1.00m 以上を測る。本遺構は湧水の影響によりこの深度にて掘削を中止した。【主軸方向】長軸方向は N - 60° - W を示す。【覆土】4層からなる自然堆積である。【遺物】出土していない。【時期・性格】覆土及び形状から縄文時代の陥し穴状遺構と考えられる。



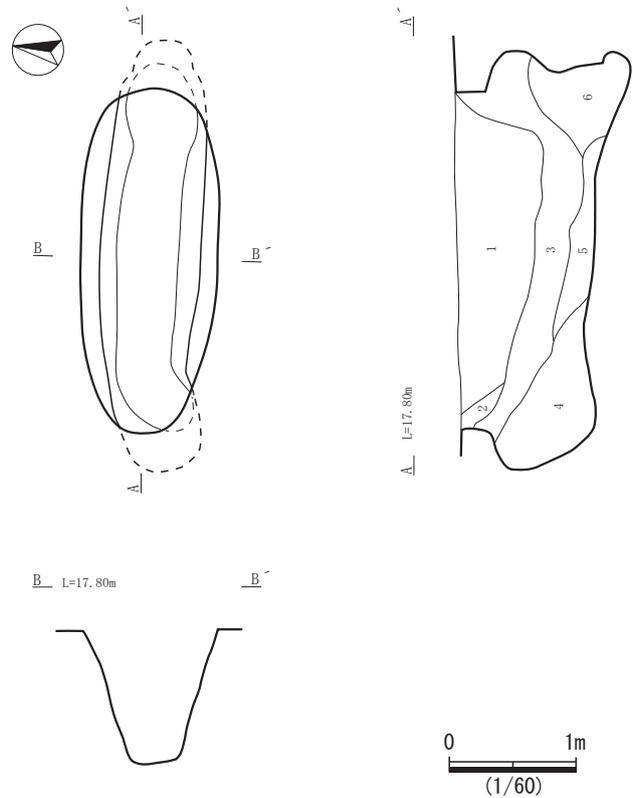
SX03 土層説明

1. 10YR 3/3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量含む。縮まり・粘性有。
2. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
3. 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。縮まり・粘性有。
4. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
5. 10YR 5/8 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。

第6図 SX03

SX04 (第7図, 図版5)

【位置】G 4グリッドに位置する。【平面・断面形】平面は長楕円形をなし、東西方向の断面形は下部がオーバーハングして膨らむ不整な袋状を呈し、南北方向では狭い逆台形状となる。【規模】長軸2.78m, 短軸1.10m, 深さは1.40mを測る。【主軸方向】長軸方向はN - 85° - Eを示す。【覆土】6層からなる自然堆積である。【遺物】出土していない。【時期・性格】覆土及び形状から縄文時代の陥し穴状遺構と考えられる。



SX04 土層説明

1. 7.5YR 3/3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。縮まり強, 粘性有。
2. 7.5YR 4/4 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
3. 10YR 6/8 明黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり強, 粘性有。
4. 10YR 3/2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。縮まり・粘性有。
5. 10YR 6/6 明黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む, 黒褐色土が混入。縮まり弱, 粘性有。
6. 10YR 6/8 明黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。

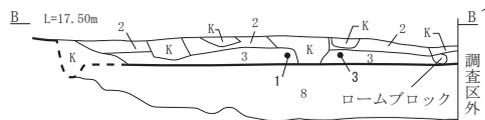
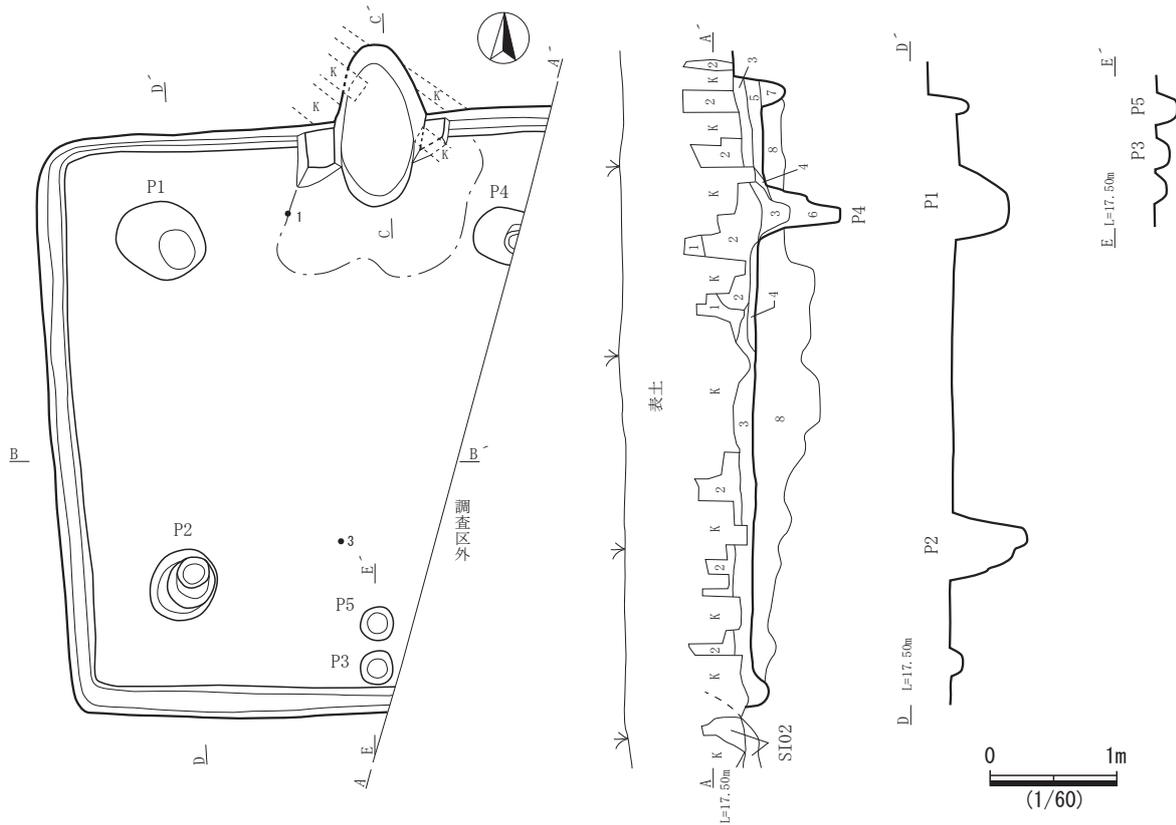
第7図 SX04

第4節 奈良・平安時代

竪穴住居跡

SI01 (第8・9図, 第5・6表, 図版5・13)

【位置】 B 5・6, C 5・6 グリッドに位置し, 東側の一部は調査区外となる。本遺構は耕作用トレンチャーによる攪乱のために遺存状況は悪い。【平面形】 一部が調査区外となり全容を確認できないが方形と考えられる。【規模】 南北軸 4.65m, 東西軸 4.00m 以上, 深さは 20 cm を測る。【主軸方向】 N - 5° - W を示す。【覆土】 7層からなる自然堆積である。しかしトレンチャーによる攪乱の影響を大きく受けていることから, 埋没過程を復元することは難しい。【床面・壁】 床面は平坦で全体的に硬化面を持ち, カマド付近ではより顕著な硬化が認められた。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 幅 15 ~ 25cm, 深さ 10 ~ 25cm の壁溝が全周する。床下には顕著な掘り方を持つ。【柱穴・ピット】 5基検出した。P1・P2・P4 は主柱穴, P3・P5 は出入口施設に伴うと考えられる。【カマド】 北壁に付設される。煙道部は屋外に 29cm 掘り込み, 燃焼部幅は 32cm, 右袖部が 42cm, 左袖部が 28cm 残存する。カマド周辺には広範囲に構築材の白色粘土が散乱している。【遺物】 土師器 (甕) 15 点, 須恵器 (坏・蓋・甑) 4 点, 鉄製品 (釘) 1 点, 石製品 (砥石) 1 点が出土した。【時期】 出土遺物から 8 世紀前葉と考えられる。【重複関係】 遺構の南側が SI02 と重複する。新旧関係は本遺構が古い。



SI01 土層説明

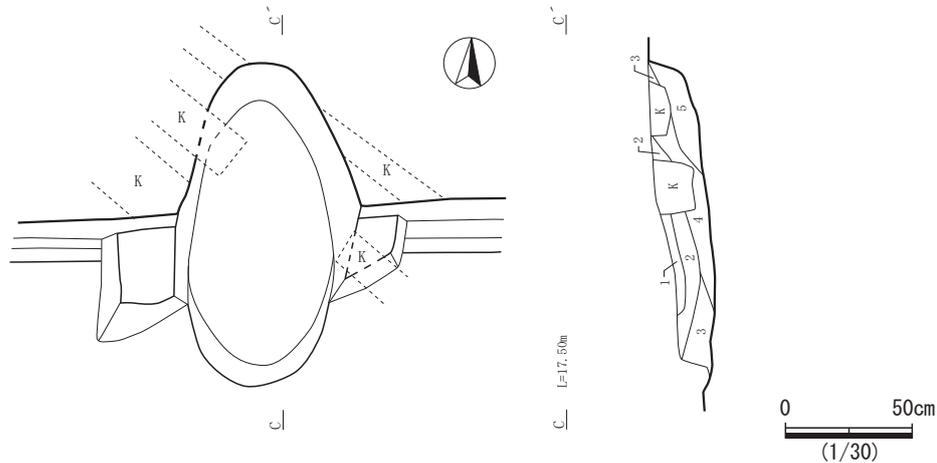
1. 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量含む。締まり・粘性有。
2. 10YR 3/3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量含む。粘土混入。締まり・粘性有。
3. 10YR 5/2 灰黄褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック少量含む。締まり・粘性有。
4. 10YR 8/1 灰白色土 粘土層。締まり・粘性有。
5. 10YR 3/1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量含む。締まり・粘性有。
6. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。締まり・粘性有。
7. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。締まり・粘性有。
8. 10YR 6/6 明黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。締まり・粘性有。(掘り方)

第8図 SI01

SI01 ピット計測値

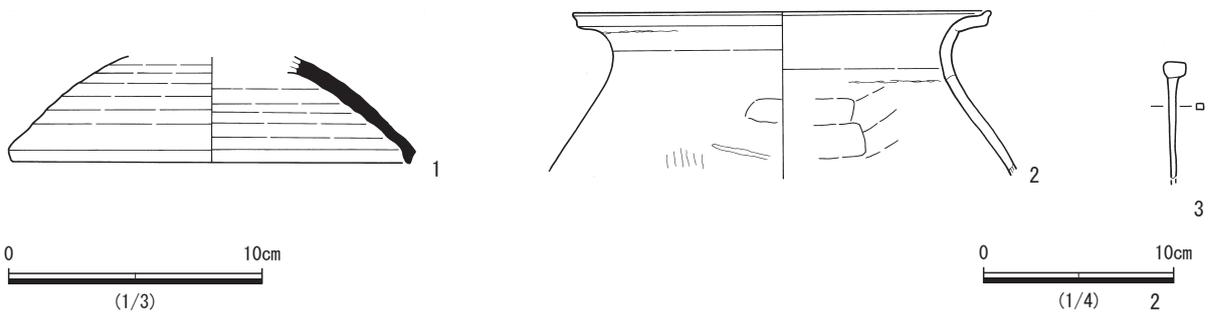
No.	1	2	3	4	5
長軸	70	58	26	42	26
短軸	58	54	25	〈35〉	25
深さ	50	58	12	66	16

単位 = cm



SI01 カマド 土層説明

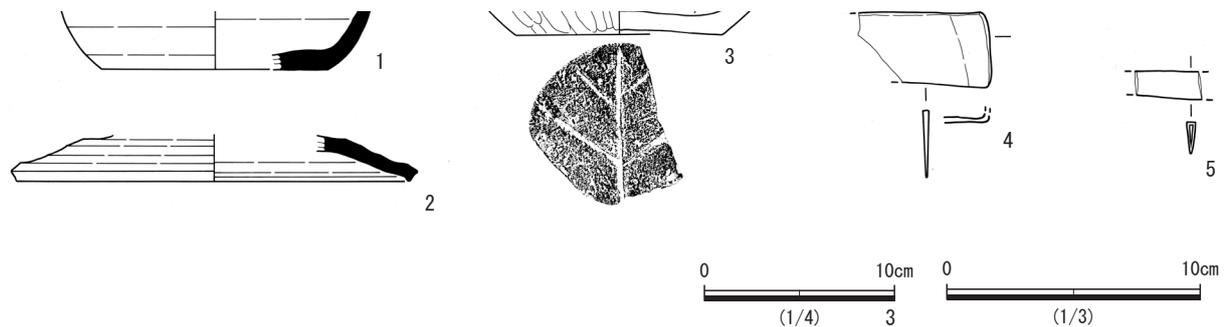
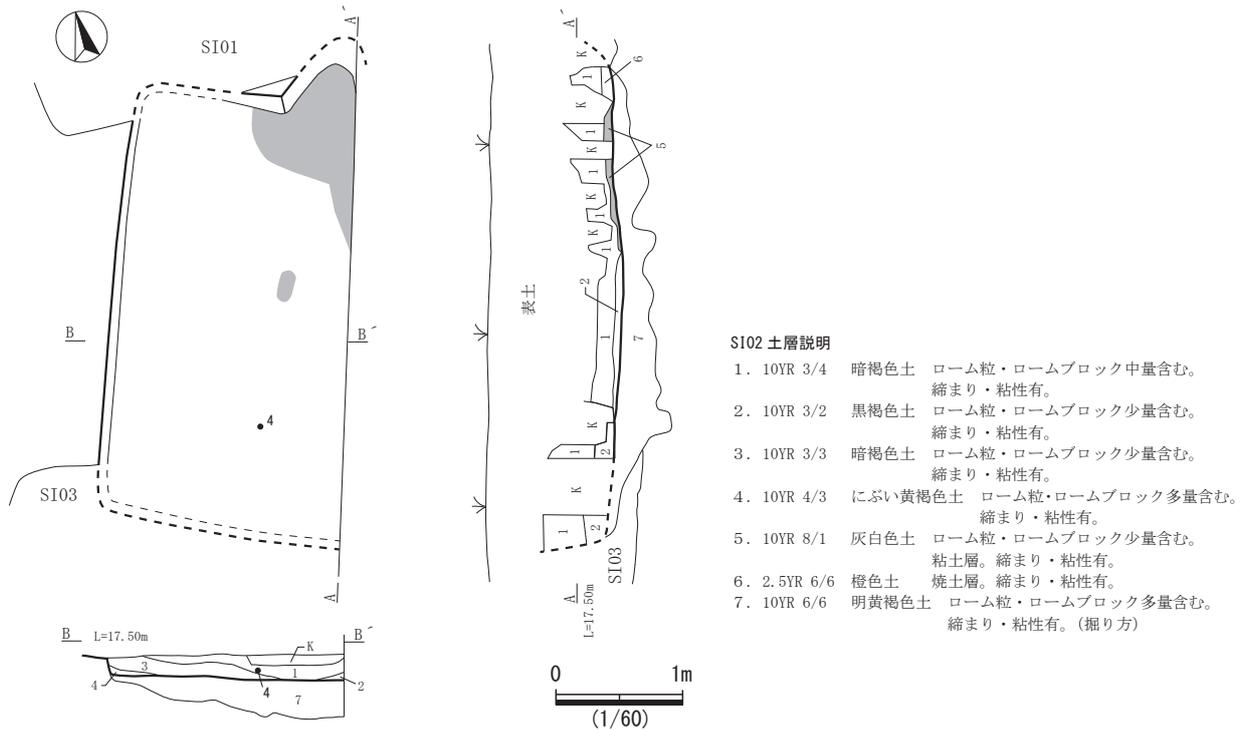
1. 7.5YR 6/4 にぶい橙色土 ローム粒・ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 粘土多量含む。縮まり・粘性有。
2. 10YR 6/6 明黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量, 焼土ブロック・粘土中量含む。縮まり・粘性有。
3. 10YR 5/6 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック中量, 焼土ブロック多量含む。縮まり・粘性有。
4. 5YR 4/4 にぶい赤褐色土 ローム粒・ロームブロック中量, 焼土ブロック多量含む。縮まり・粘性有。
5. 10YR 5/2 灰黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量, 焼土ブロック少量含む。縮まり・粘性有。



第9図 SI01 カマド及び出土遺物

SI02 (第10図, 第5・6表, 図版5・13)

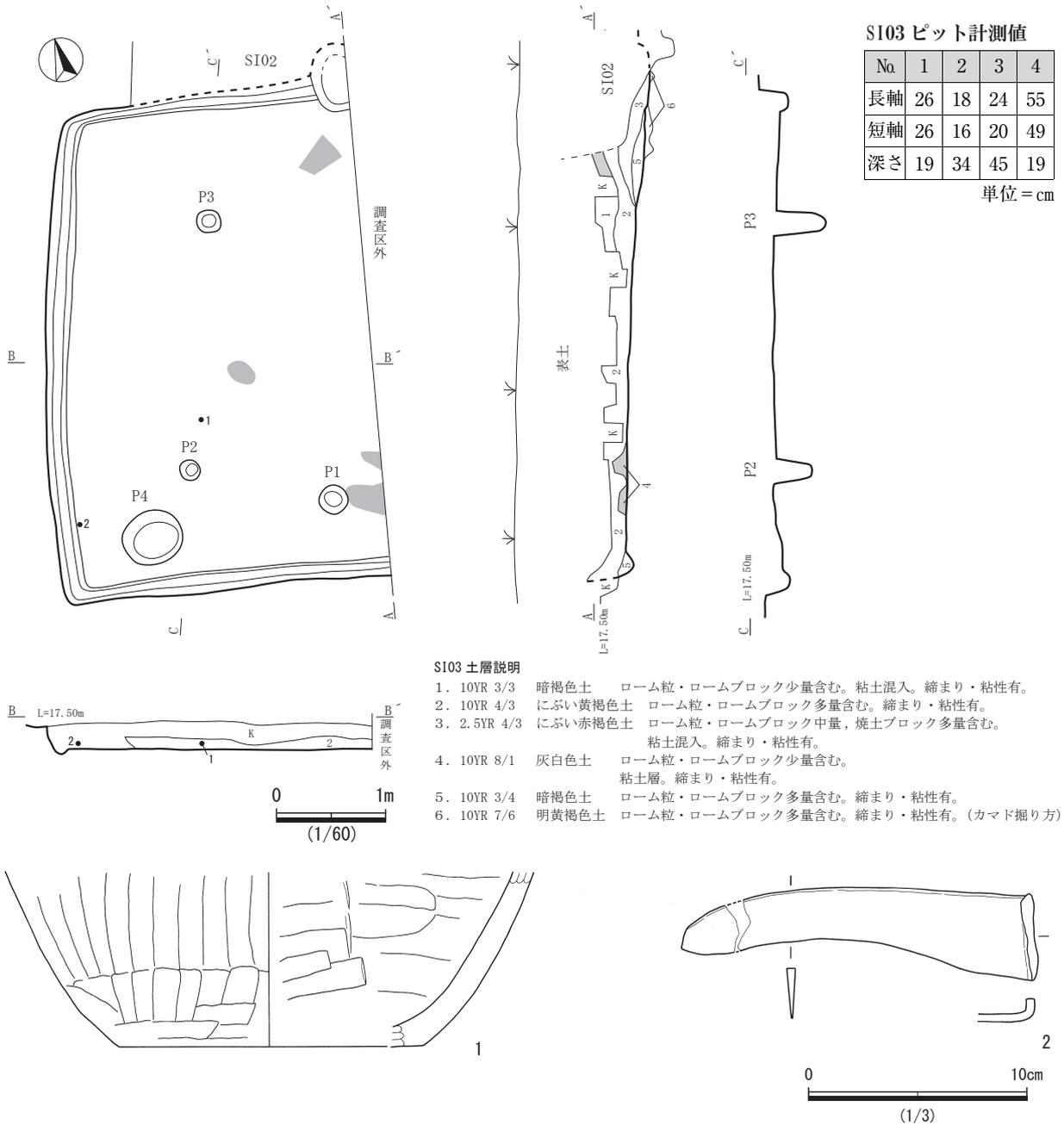
【位置】C 5・6 グリッドに位置し, 東側の一部は調査区外となる。本遺構は耕作用トレンチャーによる攪乱のために遺存状況は悪い。【平面形】大部分が調査区外となり全容を確認できないが方形と考えられる。【規模】南北軸 3.50m, 東西軸 1.90m 以上, 深さは 15 cm を測る。【主軸方向】N - 20° - E を示す。【覆土】6 層からなる自然堆積である。しかしトレンチャーによる攪乱の影響を大きく受けていることから, 埋没過程を復元することは難しい。【床面・壁】床面はほぼ平坦で全体的に硬化面を持ち, 壁面は垂直に立ち上がる。床下には顕著な掘り方を持つ。【柱穴・ピット】検出されていない。【カマド】遺構北壁に付設されるが攪乱により遺存状況が悪く, 構築材と思われる白色粘土が散乱する。【遺物】土師器 (甕) 11 点, 須恵器 (坏・蓋) 2 点, 鉄製品 (刀子・鎌) 2 点が出土した。【時期】出土遺物から 8 世紀末～9 世紀前葉と考えられる。【重複関係】SI01 と SI03 と重複し, 本遺構が新しい。



第10図 SI02 及び出土遺物

SI03 (第11図, 第5・6表, 図版5・6・13)

【位置】C 5・6, D 5・6グリッドに位置し, 東側の一部は調査区外となる。本遺構は耕作用トレンチャーによる攪乱のために遺存状況は悪い。【平面形】一部が調査区外となり全容を確認できないが方形と考えられる。【規模】南北軸 4.55m, 東西軸 3.00m 以上, 深さは 20 cm を測る。【主軸方向】N - 25° - E を示す。【覆土】5 層からなる自然堆積である。トレンチャーによる攪乱の影響を大きく受けていることから, 埋没過程を復元することは難しい。【床面・壁】床面は平坦で全体的に硬化面を持ち, 壁はほぼ垂直に立ち上がり, 幅 16 ~ 20cm, 深さ 10 ~ 13cm の壁溝が巡る。床下に掘り方は持たない。【柱穴・ピット】4 基検出した。P2・P3 は主柱穴, P1 は出入口施設に伴うと考えられ, P4 はその位置から貯蔵穴の可能性がある。【カマド】遺構北壁に付設されるが攪乱により遺存状況が悪い。【遺物】土師器 (坏・甕・鉢) 8 点, 須恵器 (坏・蓋) 4 点, 鉄製品 (鎌) 1 点が出土した。【時期】出土遺物から 8 世紀前葉と考えられる。【重複関係】遺構の北側が SI02 と重複する。新旧関係は本遺構が古い。

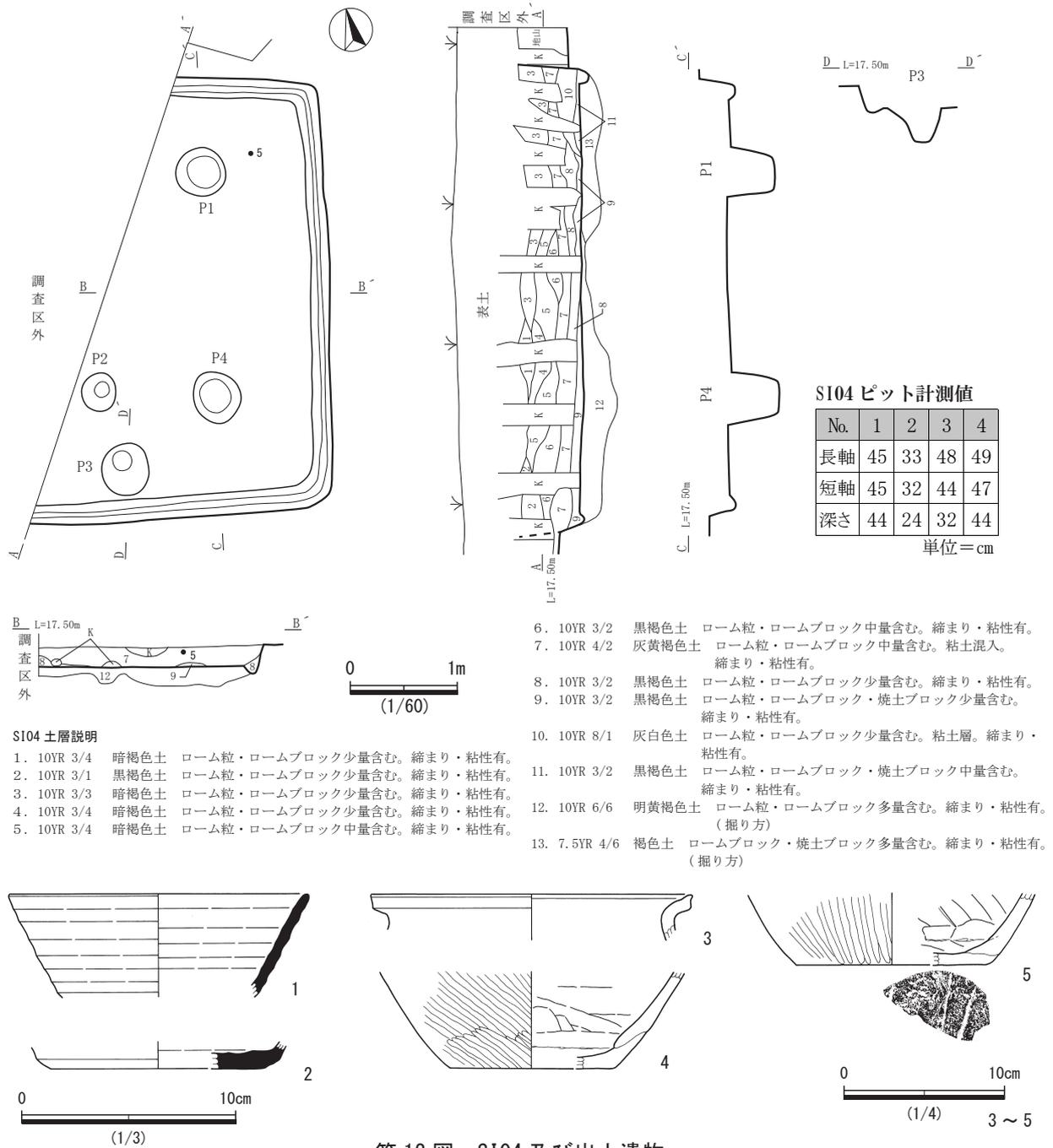


第 11 図 SI03 及び出土遺物

SI04 (第 12 図, 第 5・6 表, 図版 6・13)

【位置】C 5 グリッドに位置し、西側の一部は調査区外となる。本遺構は耕作用トレンチャーによる攪乱のために遺存状況は悪い。【平面形】一部が調査区外となり全容を確認できないが方形と考えられる。【規模】南北軸 4.10m, 東西軸 2.85m 以上, 深さは 18 cm を測る。【主軸方向】N - 11° - E を示す。【覆土】11 層からなる自然堆積である。【床面・壁】床面は平坦で全体的に硬化面を持ち、壁はほぼ垂直に立ち上がり、幅 16 ~ 20cm, 深さ 6 ~ 10cm の壁溝が巡る。床下には顕著な掘り方を持つ。【柱穴・ピット】4 基検出した。P1・P4 は主柱穴, P2・P3 は出入口施設に伴うと考えられる。【カマド】検出してないが、北壁中央に構築材と思われる白色粘土が検出された。【遺物】土師器 (甕・甔) 35 点, 須恵器 (坏・甕) 8 点が出土した。【時期】出土遺物から 8 世紀前葉と考えられる。

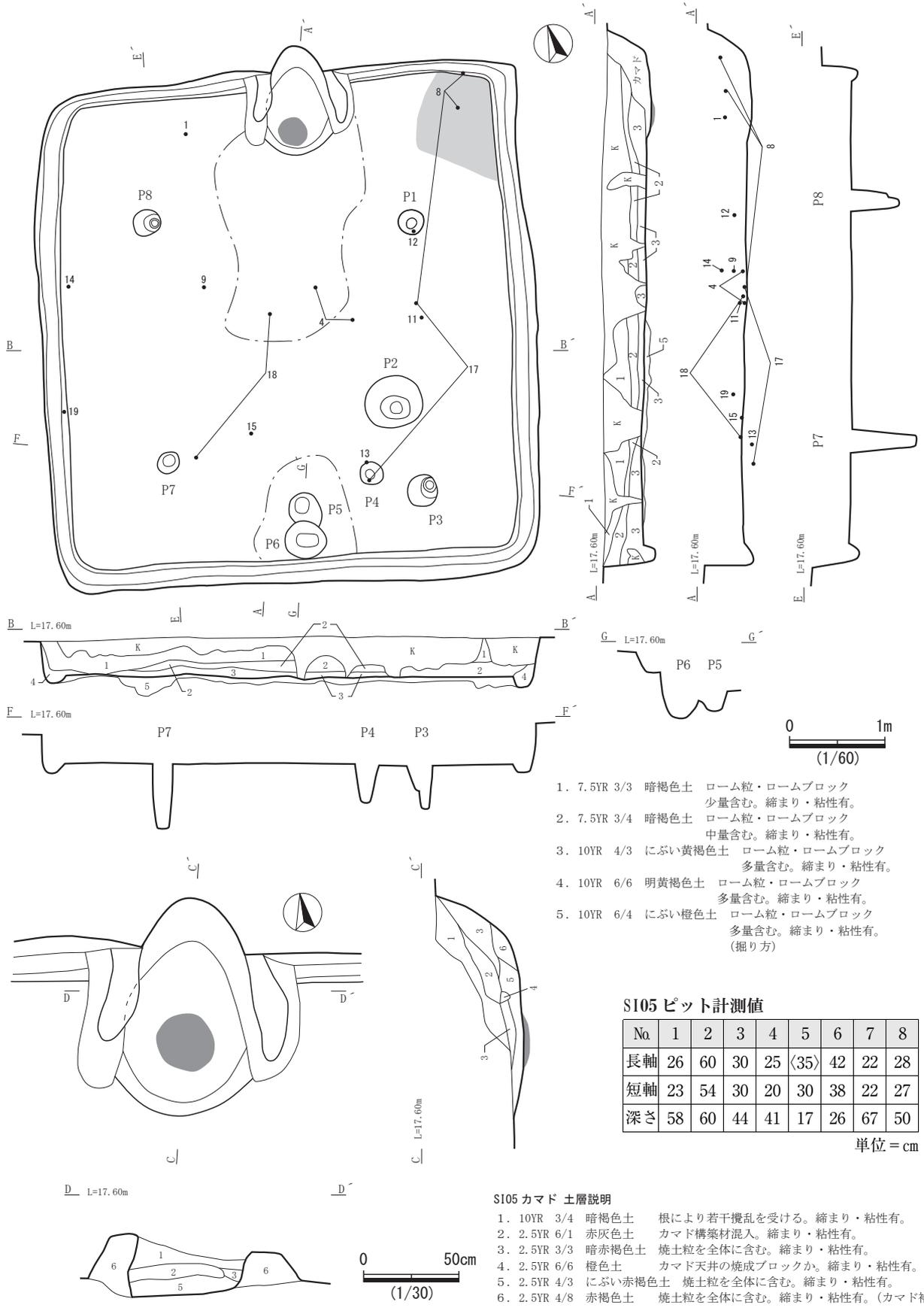
第3章 調査の成果



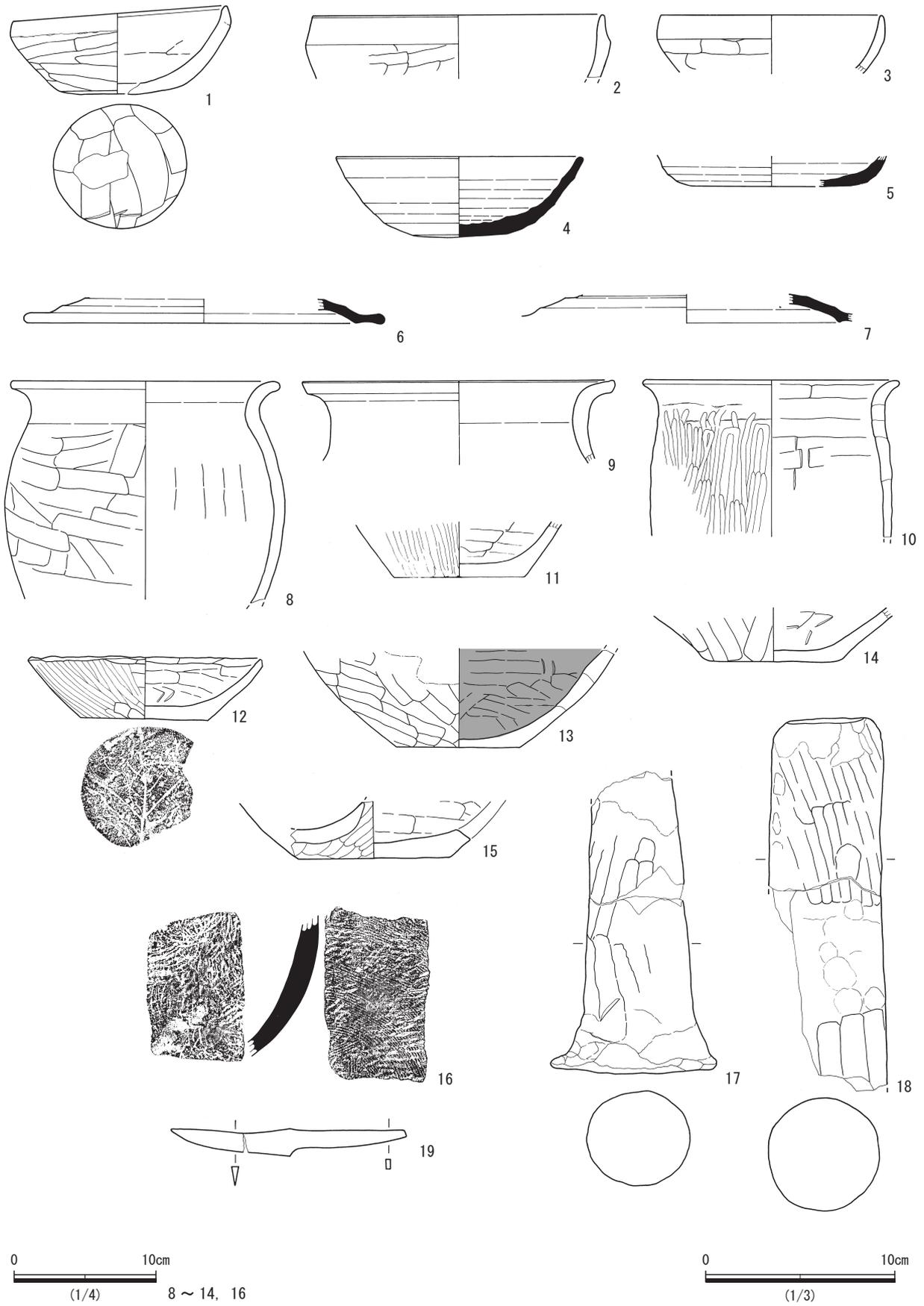
第12図 S104 及び出土遺物

S105 (第13・14図, 第5・6表, 図版6・13)

【位置】 F 4・5, G 5グリッドに位置する。【平面形】 方形を呈す。【規模】 南北軸5.50m, 東西軸5.25m以上, 深さは43cmを測る。【主軸方向】 N - 10° - Eを示す。【覆土】 4層からなる自然堆積である。【床面・壁】 床面は平坦で全体的に硬化面を持ち, カマド付近と出入口付近ではより顕著である。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 幅14~30cm, 深さ9~13cmの壁溝が巡る。床下には掘り方を持つ。【柱穴・ピット】 8基検出した。P1・P3・P7・P8は支柱穴, P5・P6は出入口施設に伴うと考えられる。【カマド】 北壁に付設される。煙道部は屋外に23cm掘り込み, 燃烧部幅は72cm, 右袖部が68cm, 左袖部が74cm残存する。火床面は強く被熱する。【遺物】 土師器(坏・甕・甑・鉢)154点, 須恵器(坏・蓋・甕)6点, 支脚2点, 鉄製品(刀子)1点が出土した。【時期】 出土遺物から8世紀前葉と考えられる。



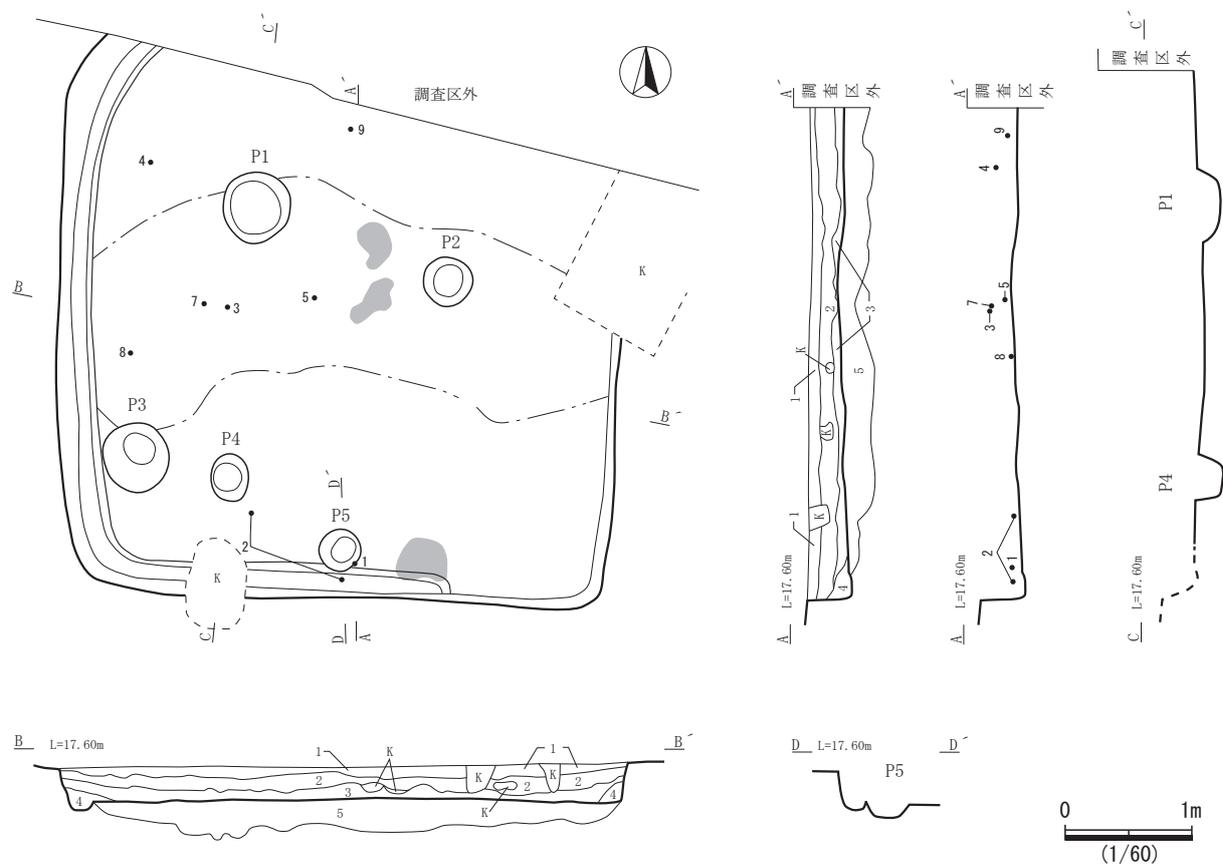
第13図 S105



第14図 SI05 出土遺物

SI07 (第15・16図, 第5・6表, 図版6・7・14)

【位置】H3グリッドに位置し、北側の一部は調査区外となる。【平面形】一部が調査区外となり全容を確認できないが方形と考えられる。【規模】南北軸4.45m, 東西軸4.20m以上, 深さは28cmを測る。【主軸方向】N-0°を示す。【覆土】4層からなる自然堆積である。【床面・壁】床面はほぼ平坦で全体的に硬化面を持ち、中央部ではより顕著な硬化が認められた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、幅18~30cm, 深さ10cmの壁溝が西壁と南壁に巡る。床下には顕著な掘り方を持つ。【柱穴・ピット】5基検出した。P1・P4は支柱穴, P5は出入口施設に伴うと考えられる。【カマド】床面に構築材の白色粘土や焼土が検出されたことから北壁に付設されていたと考えられる。【遺物】土師器(坏・甕・甑)157点, 須恵器(坏・盤・蓋・壺瓶類・高坏)57点が出土した。【時期】出土遺物から8世紀末~9世紀前葉と考えられる。



SI07 土層説明

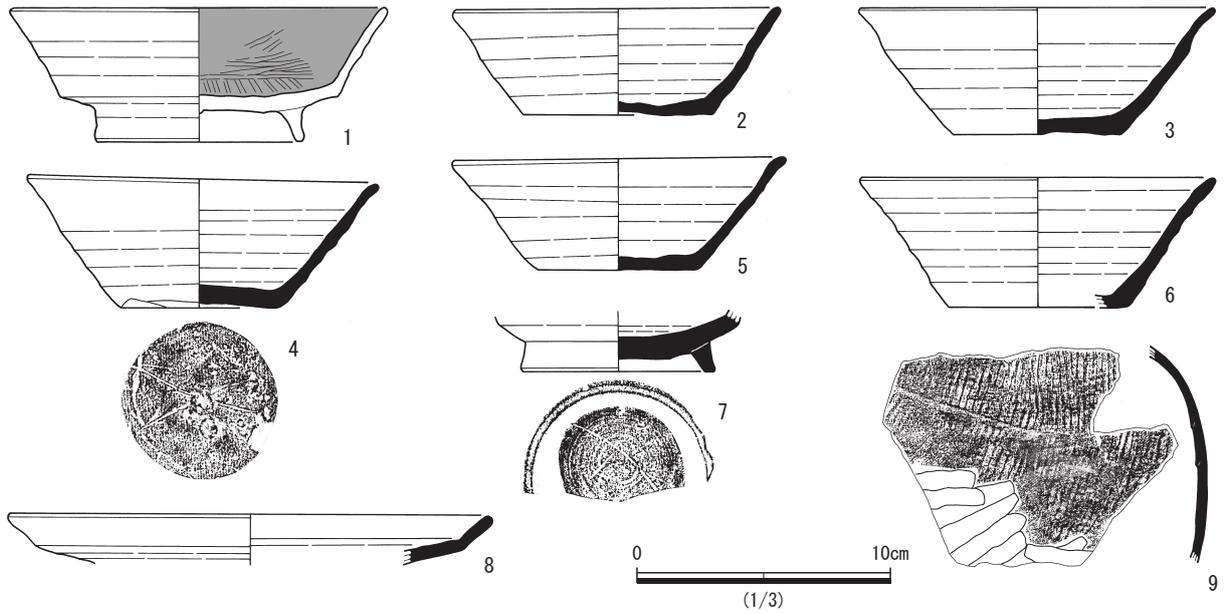
- 1. 7.5YR 3/3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒少量含む。締まり・粘性有。
- 2. 7.5YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒少量含む。締まり・粘性有。
- 3. 7.5YR 4/3 褐色土 ローム粒・ロームブロック少量, 焼土粒中量含む。締まり・粘性有。
- 4. 7.5YR 4/4 褐色土 ローム粒・ロームブロック少量含む。締まり・粘性有。
- 5. 7.5YR 4/6 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。締まり・粘性有。(掘り方)

SI07 ピット計測値

No.	1	2	3	4	5
長軸	52	40	55	47	33
短軸	50	38	50	30	33
深さ	22	20	20	22	11

単位 = cm

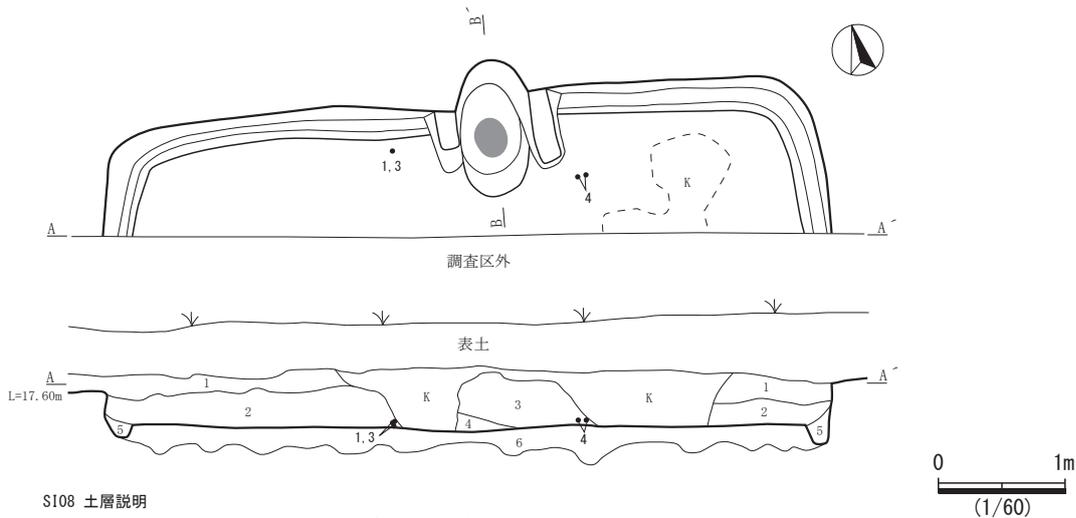
第15図 SI07



第16図 SI07 出土遺物

SI08 (第17・18図, 第5・6表, 図版7・14)

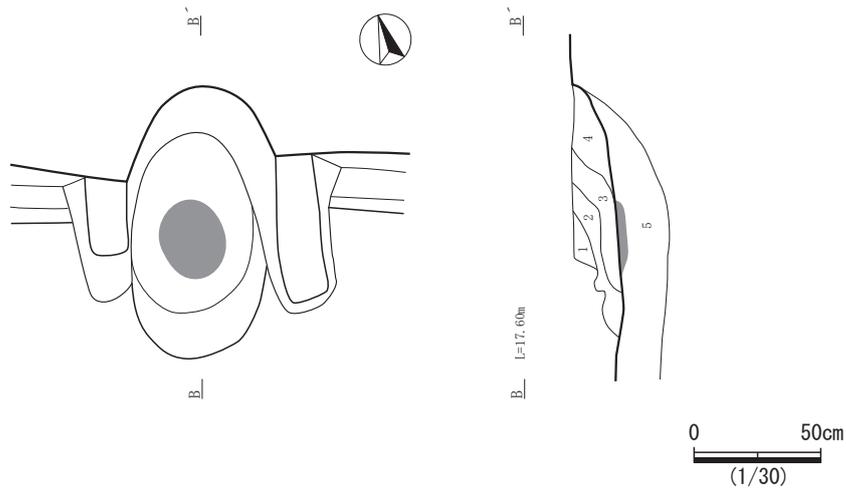
【位置】H 2・3 グリッドに位置し, 南側の一部は調査区外となる。【平面形】大部分が調査区外となり全容を確認できないが方形と考えられる。【規模】南北軸1.20m以上, 東西軸5.72m, 深さは45cmを測る。【主軸方向】N - 9° - Eを示す。【覆土】5層からなる自然堆積である。【床面・壁】床面はほぼ平坦で全体的に硬化面を持ち, 壁はほぼ垂直に立ち上がり, 幅22~26cm, 深さ10~12cmの壁溝が巡る。床下には顕著な掘り方を持つ。【柱穴・ピット】検出されていない。【カマド】北壁に付設される。煙道部は屋外に32cm掘り込み, 燃烧部幅は52cm, 右袖部が57cm残存する。火床面は強く被熱する。【遺物】土師器(坏・甕・鉢)49点, 石製品(砥石)1点が出土した。【時期】出土遺物から7世紀末~8世紀初頭と考えられる。



SI08 土層説明

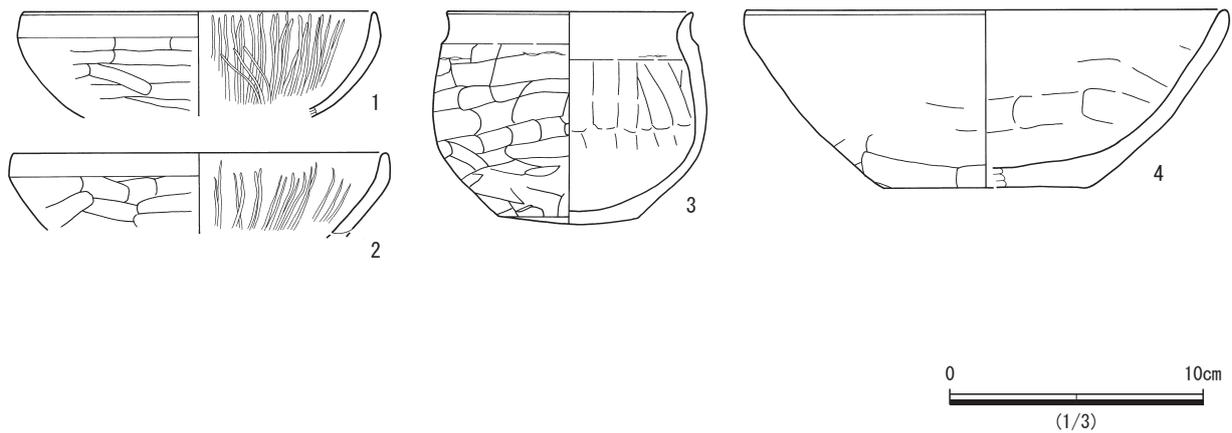
1. 10YR 3/3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。締まり・粘性有。
2. 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。締まり・粘性有。
3. 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量, 粘土粒少量含む。締まり・粘性有。
4. 10GY 8/1 明緑灰色土 ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック少量, 粘土多量含む。締まり・粘性有。
5. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。締まり・粘性有。
6. 10YR 5/6 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。締まり・粘性有。(掘り方)

第17図 SI08



SI08 カマド 土層説明

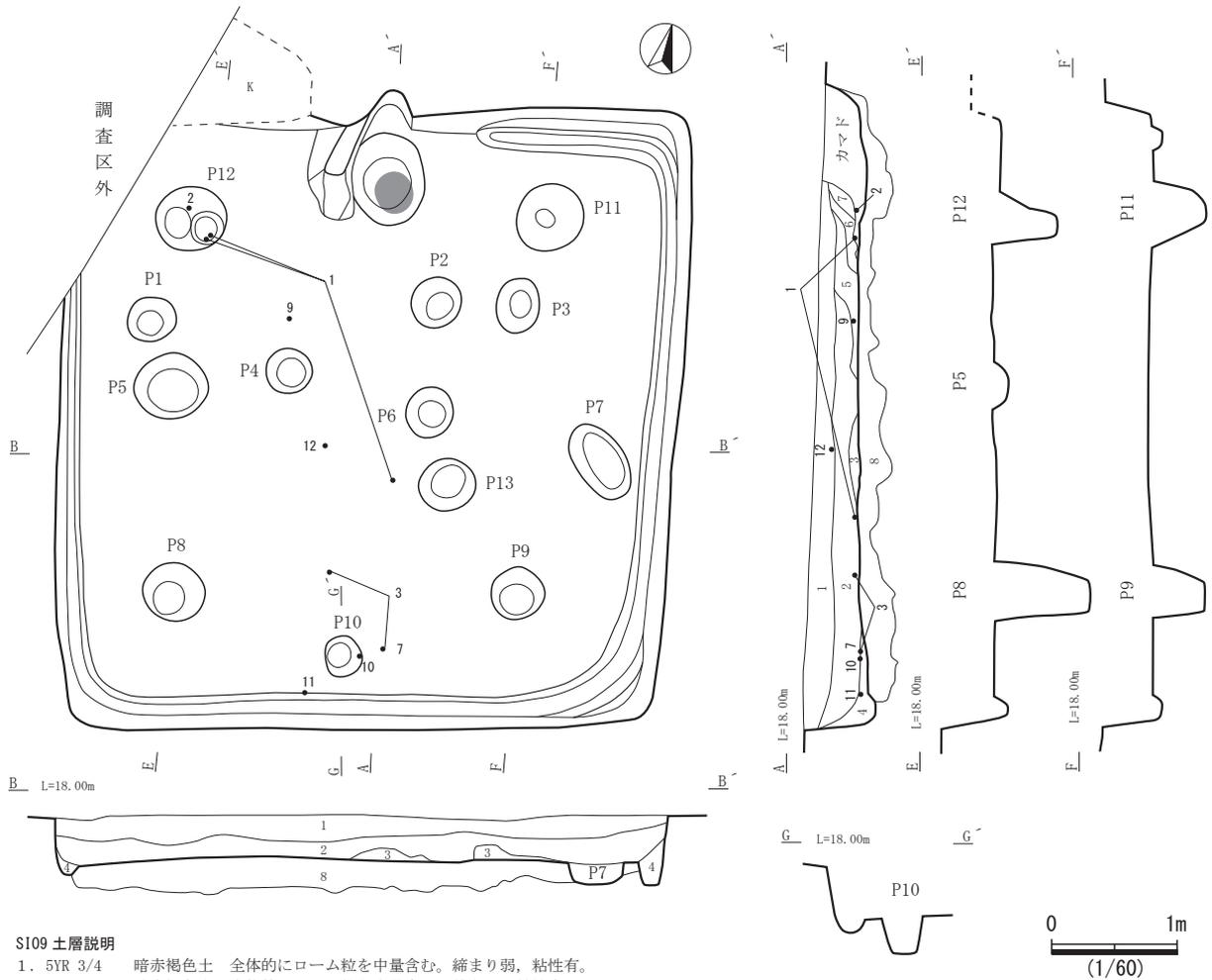
1. 10GY 7/1 明緑灰色土 焼土ブロック中量, 粘土多量含む。締まり・粘性有。
2. 10GY 8/1 明緑灰色土 焼土ブロック中量, 粘土多量含む。締まり・粘性有。
3. 10GY 6/1 緑灰色土 焼土ブロック・粘土中量含む。締まり・粘性有。
4. 5YR 6/1 褐灰色土 焼土ブロック多量, 粘土少量含む。締まり・粘性有。
5. 10YR 5/1 褐灰色土 焼土ブロック多量, 粘土少量含む。締まり・粘性有。(掘り方)



第 18 図 SI08 カマド及び出土遺物

SI09 (第 19・20 図, 第 5・6 表, 図版 7・14)

【位置】K 3 グリッドに位置し, 西側の角が僅かに調査区外となる。【平面形】方形を呈す。【規模】南北軸 5.00m, 東西軸 5.00m, 深さは 45 cm を測る。【主軸方向】N - 15° - W を示す。【覆土】4 層からなる自然堆積である。【床面・壁】床面はほぼ平坦で全体的に硬化面を持ち, 壁はほぼ垂直に立ち上がり, 幅 15 ~ 30cm, 深さ 5 ~ 16cm の壁溝が巡る。床下には顕著な掘り方を持つ。【柱穴・ピット】13 基検出した。P8・P9・P11・P12 は主柱穴, P10 は出入口施設に伴うと考えられ, その他については本遺構に伴うものか不明である。【カマド】北壁に付設される。煙道部は屋外に 20cm 掘り込み, 燃烧部幅は 54cm, 左袖部が 76cm 残存する。火床面はよく被熱する。【遺物】土師器 (坏・甕) 125 点, 須恵器 (坏・蓋・甕) 15 点, 土製品 (土玉・支脚) 3 点, 鉄製品 (鎌) 1 点が出土した。【時期】出土遺物から 8 世紀中葉~後葉と考えられる。



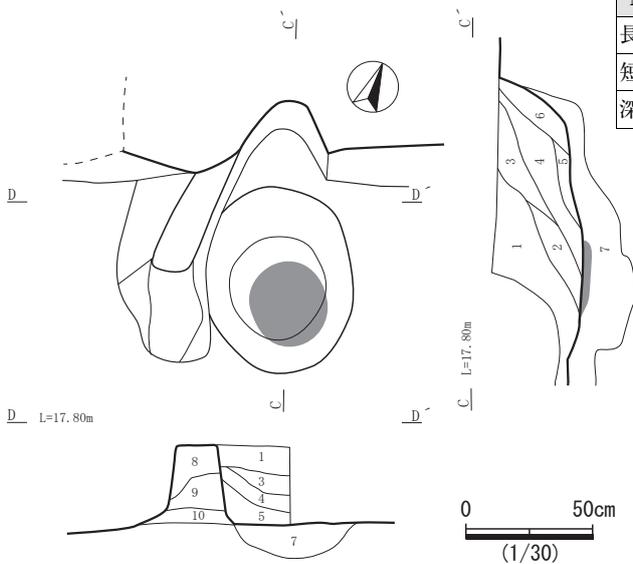
SI09 土層説明

- 1. 5YR 3/4 暗赤褐色土 全体的にローム粒を中量含む。締まり弱、粘性有。
- 2. 5YR 3/2 暗赤褐色土 全体的にローム粒を中量含む。締まり・粘性有。
- 3. 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロック、カマド構築材が混入。締まり弱、粘性有。
- 4. 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量に含む。締まり・粘性有。
- 5. 10YR 5/2 灰黄褐色土 カマド構築材多量に混入。カマド崩落土。締まり・粘性有。
- 6. 10YR 5/2 灰黄褐色土 カマド構築材多量、焼土粒少量混入。締まり・粘性有。
- 7. 10YR 5/2 灰黄褐色土 カマド構築材・焼土粒多量に混入。締まり・粘性有。
- 8. 7.5YR 5/2 灰褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック中量含む。締まり・粘性有。(掘り方)

SI09 ピット計測値

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
長軸	38	40	45	35	59	42	68	48	40	32	56	55	45
短軸	35	39	34	35	54	36	37	46	40	30	52	52	40
深さ	22	25	20	19	16	24	15	71	42	31	43	45	19

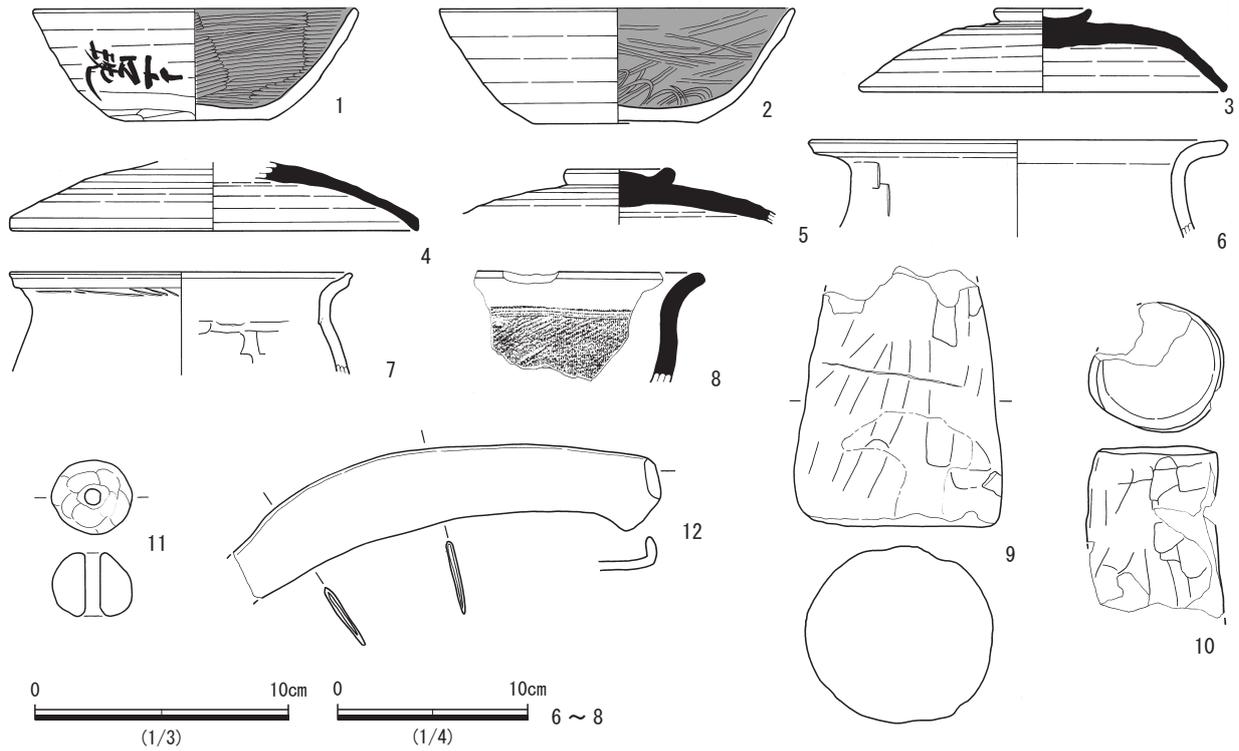
単位 = cm



SI09 カマド 土層説明

- 1. 10YR 5/2 灰黄褐色土 カマド構築材多量、焼土粒混入。締まり・粘性有。
- 2. 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを中量含む。締まり・粘性有。
- 3. 2.5Y 7/1 灰白色土 焼土ブロック中量含む。締まり・粘性有。
- 4. 2.5Y 7/2 灰黄色土 焼土ブロック多量含む。締まり・粘性有。
- 5. 10YR 5/2 灰黄褐色土 カマド構築材微量混入。締まり・粘性有。
- 6. 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量、焼土ブロック少量含む。締まり・粘性有。
- 7. 7.5YR 5/2 灰褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック中量含む。締まり・粘性有。(掘り方)
- 8. 10YR 6/3 にぶい黄橙色土 白色粘土混入。ローム粒・ロームブロック少量含む。締まり・粘性有。(カマド袖)
- 9. 2.5Y 6/4 にぶい黄色土 黄色粘土層。ローム粒・ロームブロック多量含む。締まり・粘性有。(カマド袖)
- 10. 10GY 6/1 緑灰色土 白色粘土混入。ローム粒・ロームブロック少量含む。締まり・粘性有。(カマド袖)

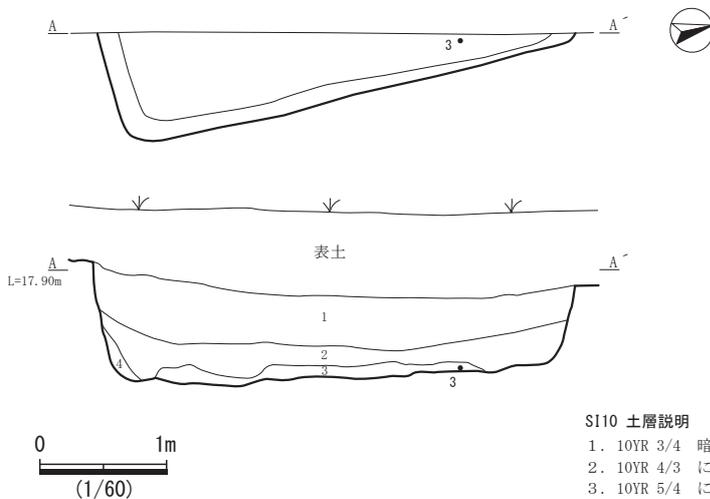
第19図 SI09



第20図 SI09 出土遺物

SI10 (第21・22図, 第5・6表, 図版7・15)

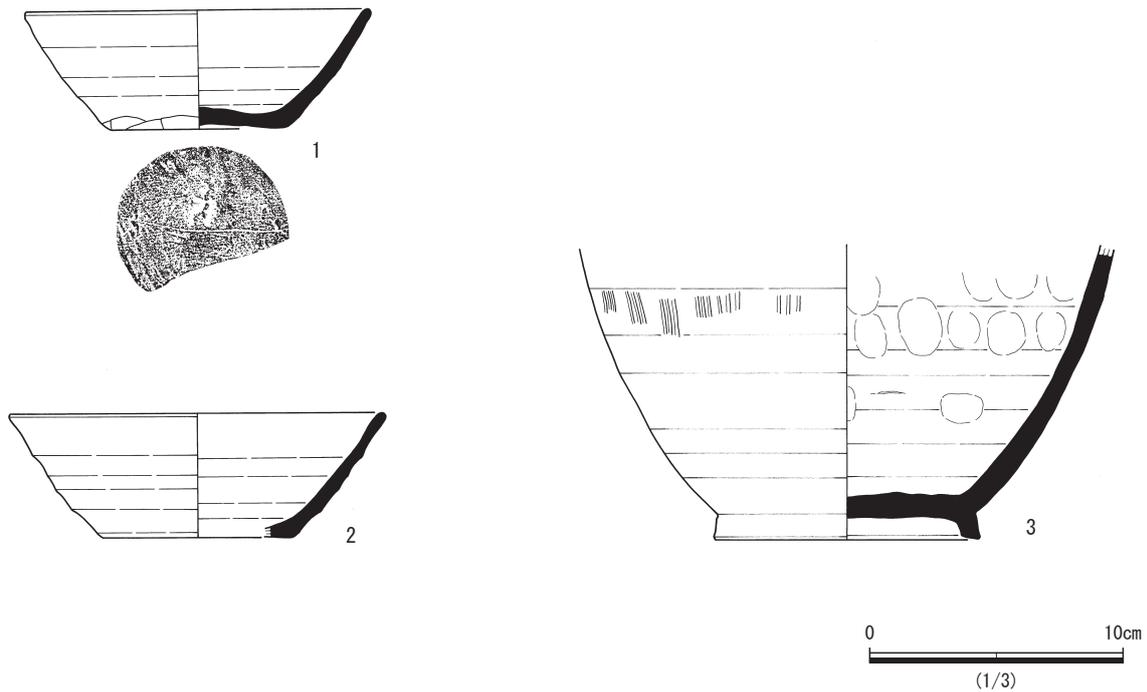
【位置】L3グリッドに位置し、東側の一部が残存する。【平面形】遺構のほとんどが調査区外となり全容を確認できないが方形と考えられる。【規模】南北軸3.50m以上、東西軸0.90m以上、深さは80cmを測る。【主軸方向】N-3°-Eを示す。【覆土】4層からなる自然堆積である。【床面・壁】床面はほぼ平坦で全体的に硬化面を持ち、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は認められず、地山に構築された床のため掘り方は持たない。【柱穴・ピット】検出されていない。【カマド】検出されていない。【遺物】土師器(坏・甕)49点、須恵器(坏・蓋・甕・壺瓶類)16点出土した。【時期】出土遺物から9世紀前葉～中葉と考えられる。



SI10 土層説明

1. 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量含む。縮まり・粘性有。
2. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。縮まり・粘性有。
3. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
4. 10YR 4/4 褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。縮まり・粘性有。

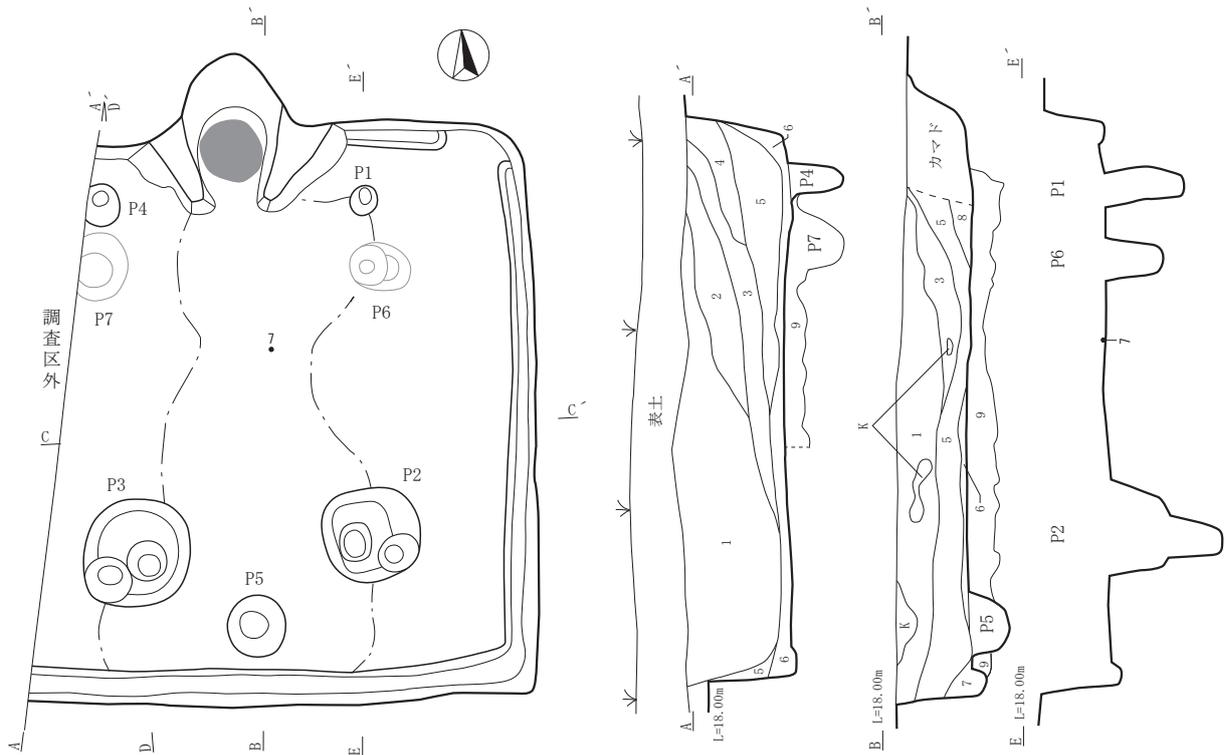
第21図 SI10



第22図 S110出土遺物

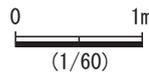
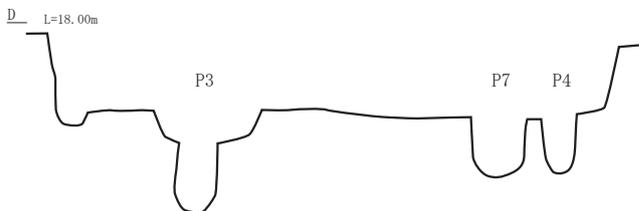
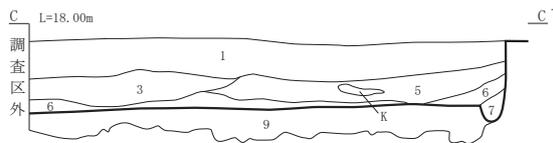
S111 (第23・24図, 第5・6表, 図版8・15)

【位置】L3グリッドに位置し、西側の一部は調査区外となる。【平面形】一部が調査区外となり全容を確認できないが方形と考えられる。【規模】南北軸4.60m, 東西軸4.00m以上, 深さは55cmを測る。【主軸方向】N-4°-Eを示す。【覆土】8層からなる自然堆積である。【床面・壁】床面は若干の起伏があるもののほぼ平坦で全体的に硬化面を持ち、カマドと出入口付近ではより顕著である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北東角を除き幅15~30cm, 深さ5~16cmの壁溝が巡る。床下には顕著な掘り方を持つ。【柱穴・ピット】7基検出した。P6・P7は貼り床の下からの検出であること, P2・P3はピット内において柱が内側に移動された痕跡があることから, 当初の支柱穴P6・P7・P2・P3から新たな支柱穴P1・P4・P2・P3に柱の据え換えがあったと推測される。P5は出入口施設に伴うと考えられる。【カマド】北壁中央に付設される。煙道部は屋外に60cm掘り込み, 燃烧部幅は30cm, 左右の袖部が70cm残存する。火床面はよく被熱する。【遺物】土師器(坏・甕・甑・鉢)266点, 須恵器(坏・盤・蓋・甕・壺瓶類)96点, 鉄製品(刀子)1点, 石製品(砥石)1点が出土した。【時期】出土遺物から9世紀中葉と考えられる。



SI11 土層説明

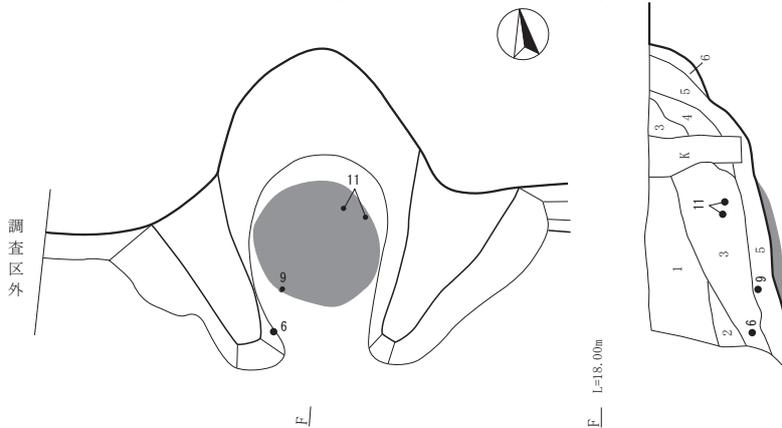
1. 10YR 3/2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。縮まり弱、粘性有。
2. 10YR 6/8 明黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
3. 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。縮まり・粘性有。
4. 10YR 3/3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量含む。縮まり強、粘性有。
5. 10YR 3/2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
6. 10YR 4/6 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
7. 10YR 4/4 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
8. 10YR 8/1 灰白色土 崩壊したカマド構築土。
9. 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。(掘り方)



SI11 ピット計測値

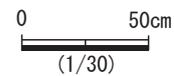
No.	1	2	3	4	5	6	7
長軸	25	76	86	32	49	50	50
短軸	20	73	83	25	45	37	<36>
深さ	60	86	76	44	28	45	45

単位 = cm

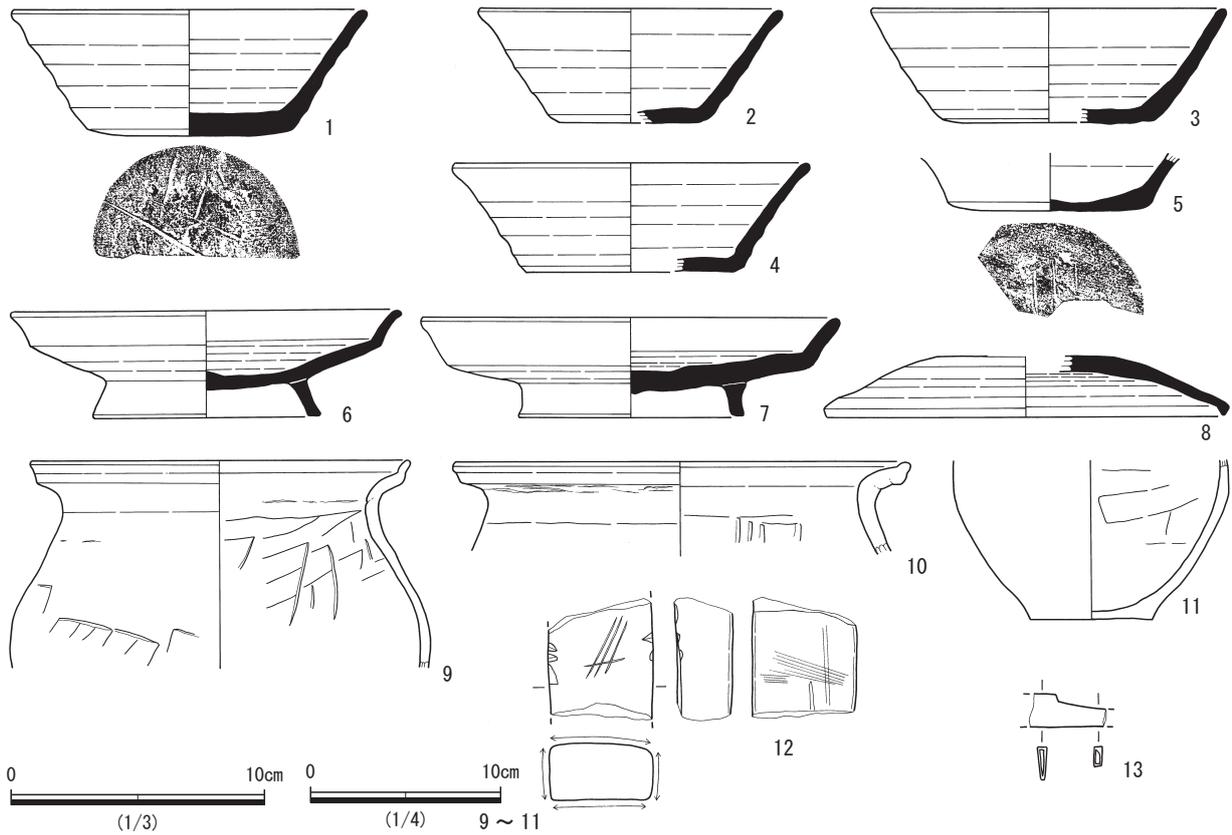


SI11 カマド 土層説明

1. 10YR 3/2 黒褐色土 ローム粒全体的に中量含む。縮まり・粘性有。
2. 10YR 5/2 灰黄褐色土 焼土粒少量含む。縮まり・粘性有。
3. 10YR 8/1 灰白色土 焼土ブロック中量含む。縮まり・粘性有。
4. 2.5YR 4/6 赤褐色土 焼土ブロック多量含む。縮まり強、粘性有。
5. 10YR 3/3 暗褐色土 焼土ブロック中量含む。縮まり・粘性有。
6. 10YR 3/4 暗褐色土 焼土ブロック少量含む。縮まり・粘性有。



第23図 SI11



第24図 SI11 出土遺物

SI12 (第25・26図, 第5・6表, 図版8・15)

【位置】M・N 3グリッドに位置する。【平面形】歪な方形を呈す。【規模】南北軸 3.00m, 東西軸 3.30m 以上, 深さは道路造成時に削平を受け 2cm と僅かである。【主軸方向】N - 0°を示す。【覆土】埋没過程を観察しうる覆土は

残存しない。【床面・壁】

床面はほぼ平坦で全体的

に硬化面を持ち, 壁の立ち

上がりは削平のため確認

できない。南壁を除き幅

15cm, 深さ 8cm の壁溝が

巡る。床下には顕著な掘

り方を持つ。【柱穴・ピット】

1 基検出した。出入口

施設に伴うと考えられる。

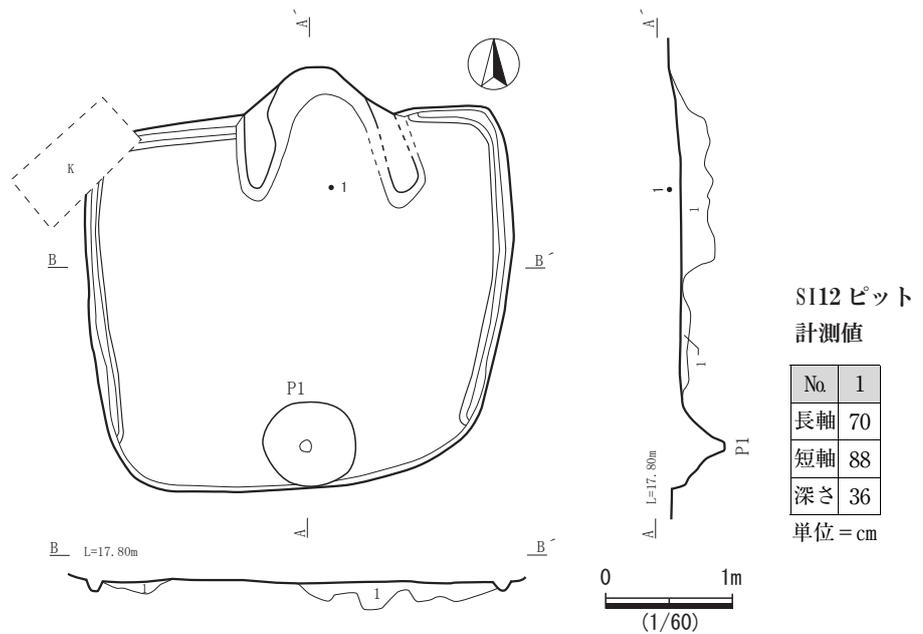
【カマド】北壁中央に付

設されるが攪乱のため

遺存状況は悪い。火床

面と焚き口直下に掘り

方を持つ。【遺物】土



SI12 ピット計測値

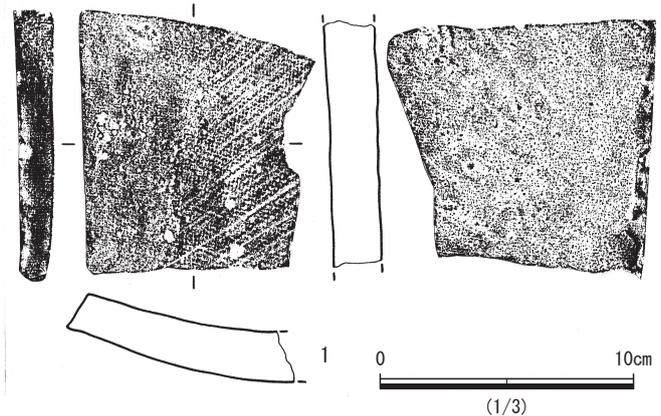
No.	1
長軸	70
短軸	88
深さ	36
単位 = cm	

SI12 掘り方 土層説明

1. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量含む。縮まり・粘性有。

第25図 SI12

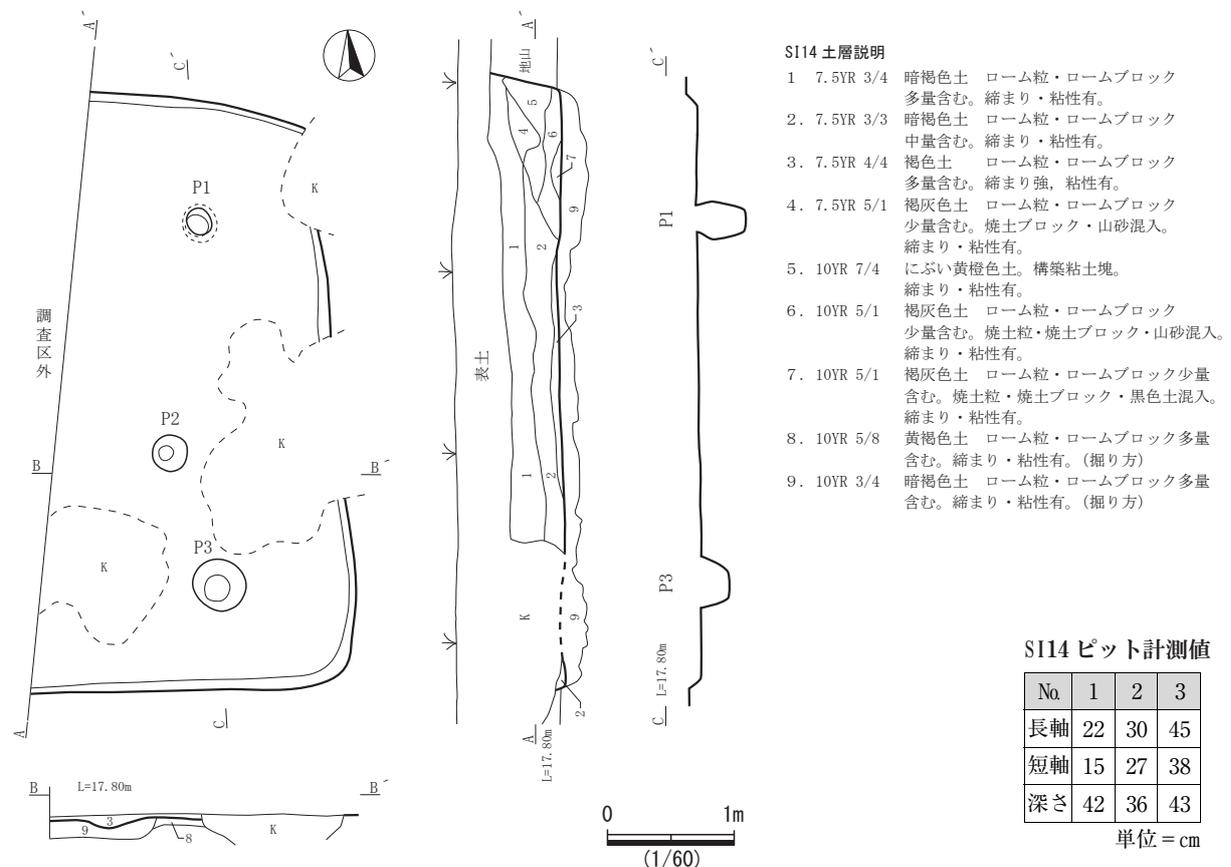
師器（甕）6点，平瓦1点が出土した。
【時期】 出土遺物から9世紀中葉～後葉と考えられる。



第26図 SI12出土遺物

SI14（第27図，第6表，図版8）

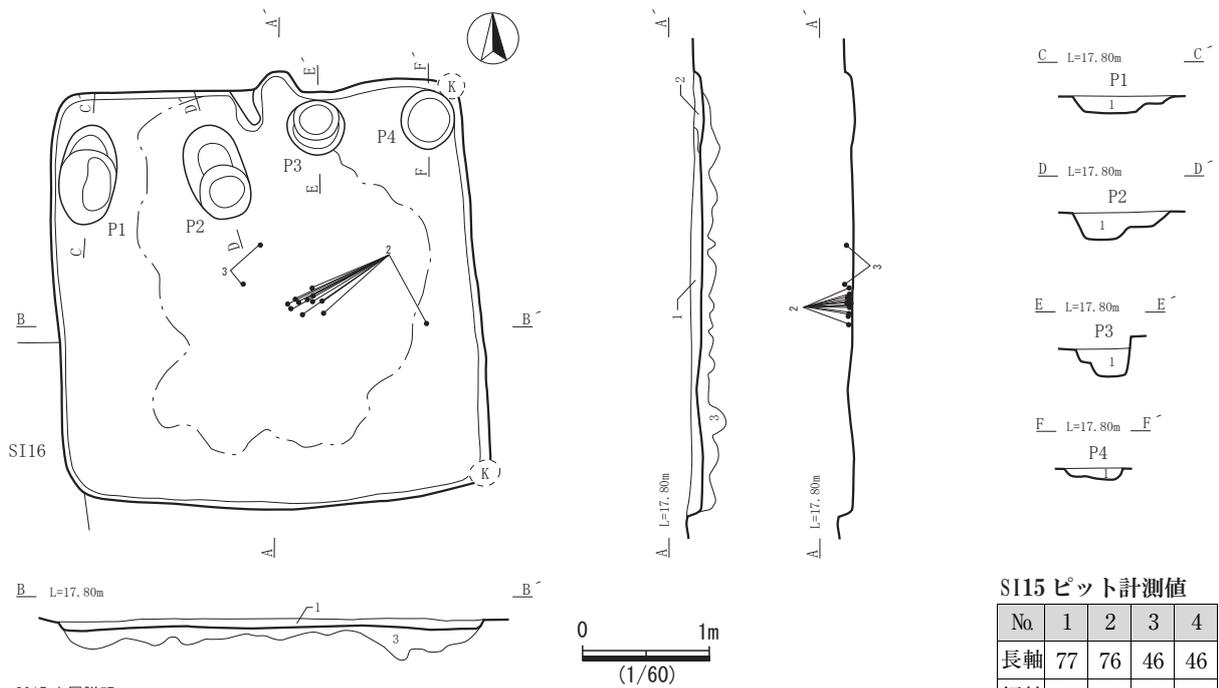
【位置】 N 2 グリッドに位置し，西側の一部は調査区外となる。**【平面形】** 一部が調査区外となり全容を確認できないが方形と考えられる。**【規模】** 南北軸 4.75m，東西軸 2.50m 以上，深さは 55 cm を測る。**【主軸方向】** N - 0° を示す。**【覆土】** 7 層からなる自然堆積である。**【床面・壁】** 床面は平坦で全体的に硬化面を持ち，壁はほぼ垂直に立ち上がる。床下には浅い掘り方を持つ。**【柱穴・ピット】** 3 基検出した。P1・P3 は主柱穴と考えられる。**【カマド】** 調査範囲内からは検出されていないが土層断面に白色粘土層が確認されるため，北壁に付設されていたと考えられる。**【遺物】** 土師器（甕・鉢）6 点，須恵器（坏・甕・鉢）3 点が出土した。**【時期】** 出土遺物から8世紀中葉～後葉と考えられる。



第27図 SI14

SI15 (第28図, 第5・6表, 図版8・16)

【位置】N3グリッドに位置する。【平面形】方形を呈す。【規模】南北軸3.32m, 東西軸3.30m, 深さは13cmを測る。【主軸方向】N-6°-Wを示す。【覆土】観察しうる覆土は2層のみで, この2層から遺構の埋没過程を復元することは難しい。【床面・壁】床面はほぼ平坦で全体的に硬化面を持ち, 特に遺構中心部はより硬く締まる。壁の立ち上がりは削平の影響によりほぼ消滅し, 壁溝は確認できなかった。床下には浅い掘り方を持つ。【柱穴・ピット】4基検出した。P1・P4は主柱穴の可能性はある。【カマド】北壁中央に袖と煙道の痕跡はみられるが攪乱により遺存状態は悪い。【遺物】土師器(甕)34点, 須恵器(坏・甕)3点が出土した。【時期】出土遺物から8世紀後葉と考えられる。【重複関係】遺構西側の一部がSI16と重複する。新旧関係は本遺構が古い。

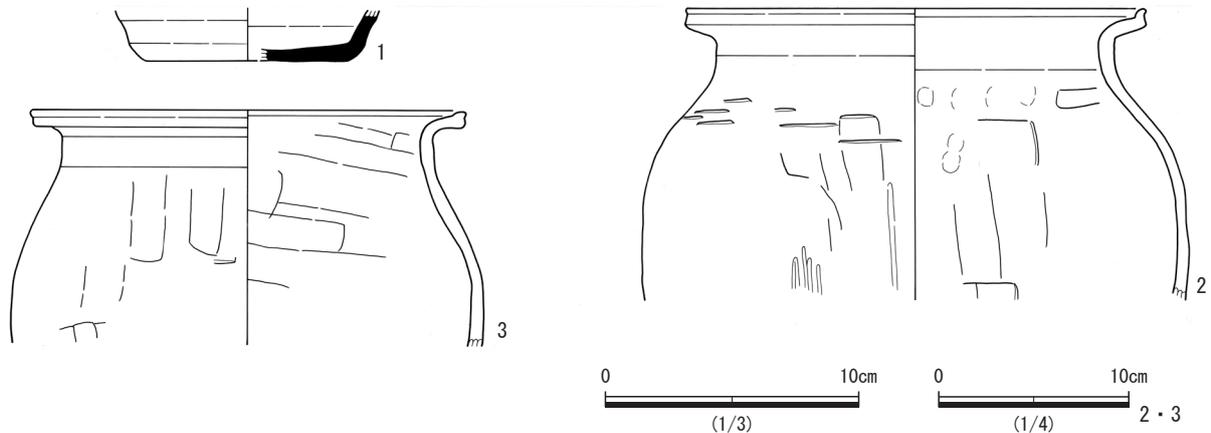


SI15 土層説明

- 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。締まり・粘性有。
- 7.5YR 4/6 褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒ブロック中量含む。締まり・粘性有。(カマド)
- 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。締まり・粘性有。(掘り方)

ピット

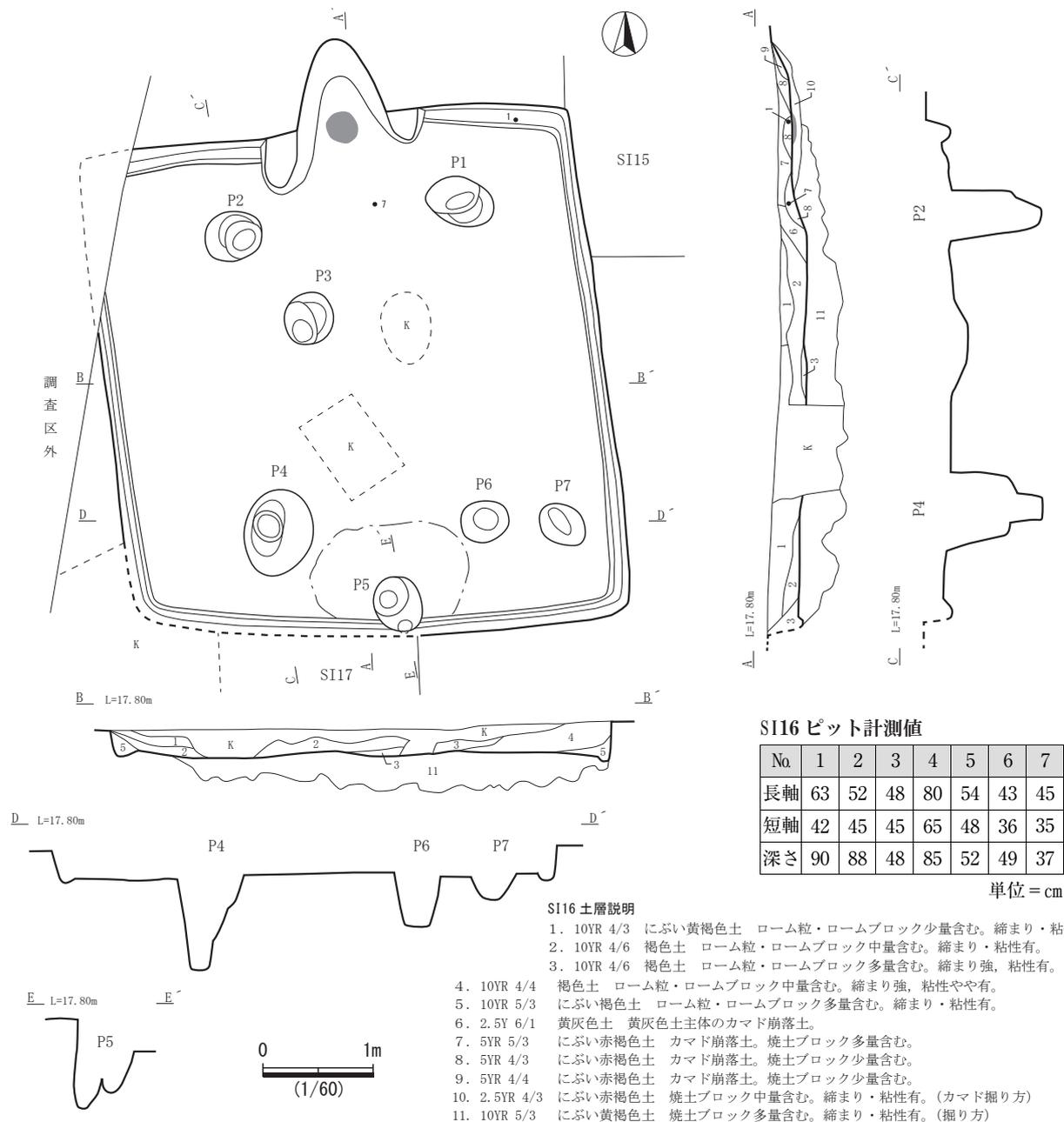
- 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。締まり・粘性有。



第28図 SI15 及び出土遺物

SI16 (第29・30図, 第5・6表, 図版8・16)

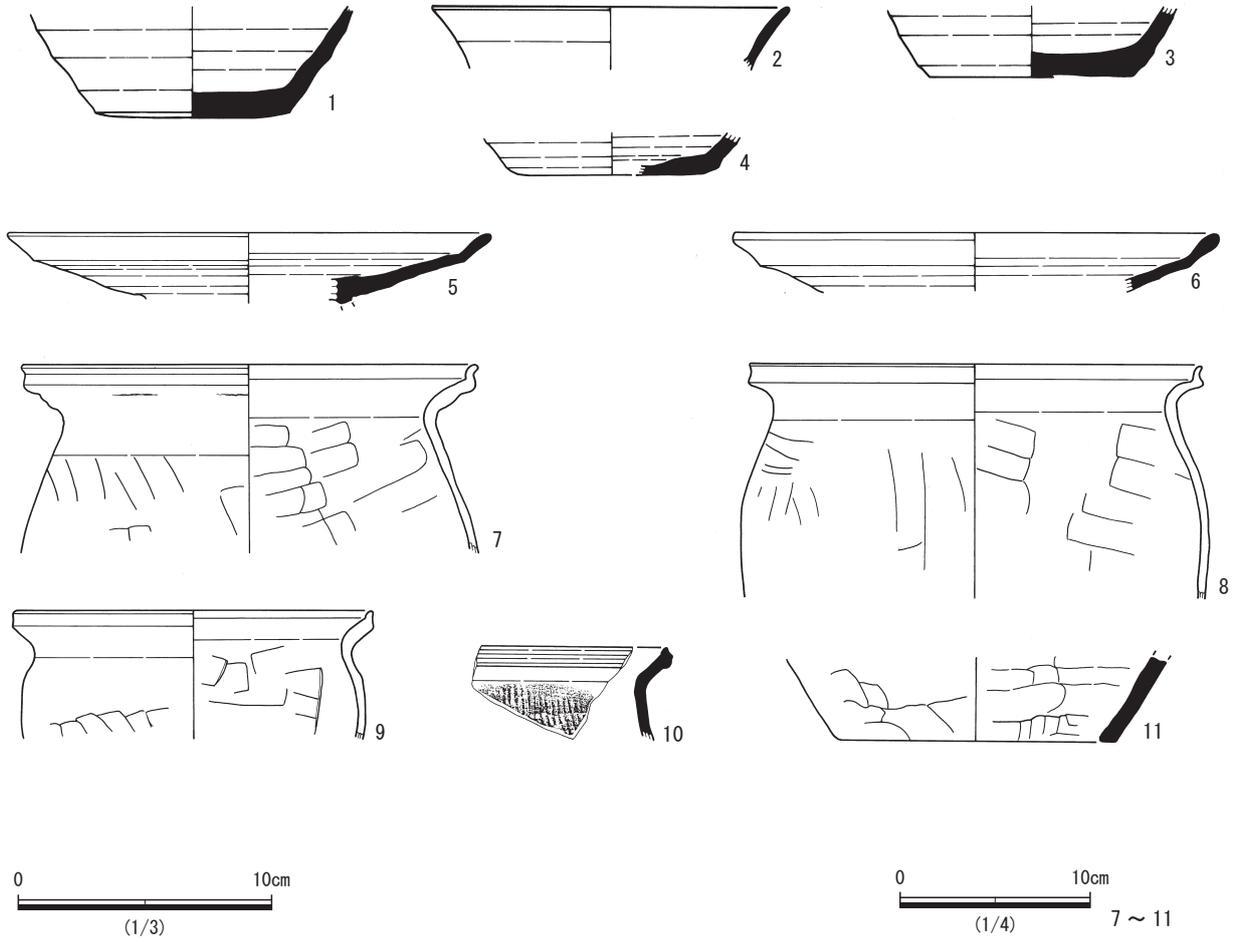
【位置】 N 2・3, O 2・3 グリッドに位置し, 北西側の角が僅かに調査区外となる。【平面形】 方形を呈す。【規模】 南北軸 4.82m, 東西軸 4.52m, 深さは 28 cmを測る。【主軸方向】 N - 5° - W を示す。【覆土】 9層からなる自然堆積である。【床面・壁】 床面は若干の起伏はあるもののほぼ平坦で, 全体的に硬化面を持ち, 出入口付近ではより強く締まる。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 幅 16 ~ 22cm, 深さ 5cm の壁溝が巡る。床下には顕著な掘り方を持つ。【柱穴・ピット】 7基検出した。P1・P2・P4・P6 は支柱穴, P5 は出入口施設に伴うと考えられ, その他については本遺構に伴うものか不明である。【カマド】 北壁中央に付設されるが攪乱により遺存状況は悪い。確認される煙道部は屋外に 75cm 掘り込み, 燃烧部幅は 72cm, 左袖部が 54cm, 右袖部が 30cm 残存する。【遺物】 土師器 (坏・甕・甑) 158 点,



第29図 SI16

第3章 調査の成果

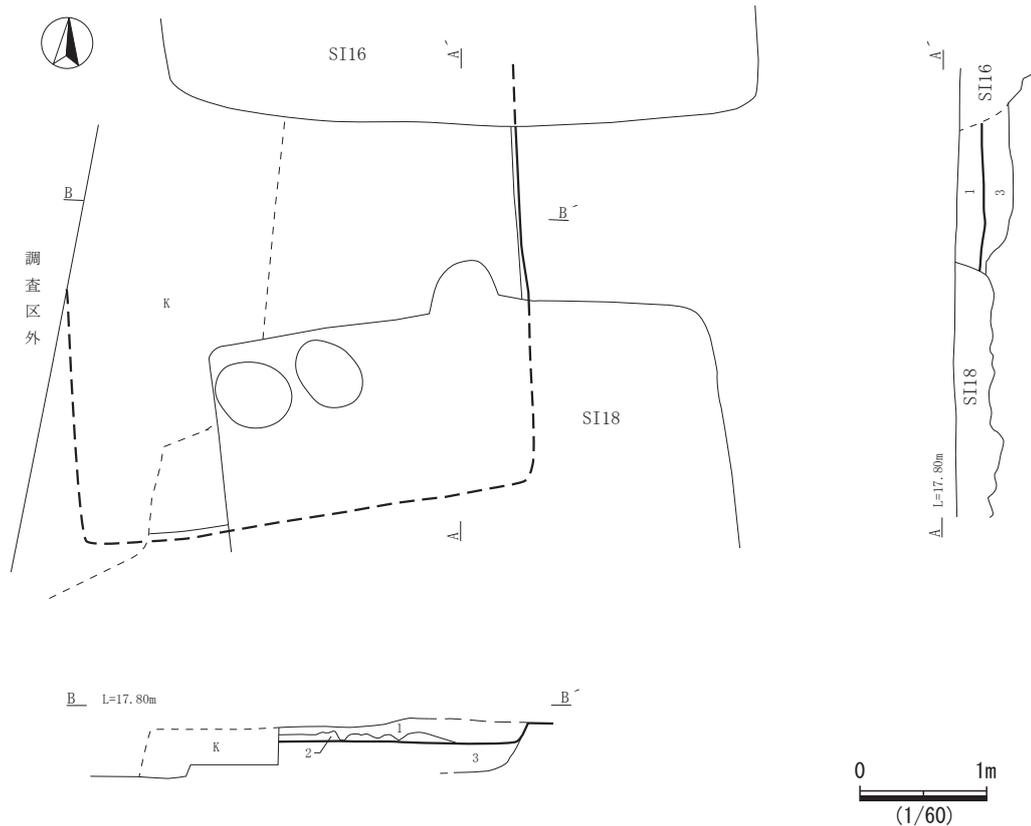
須恵器（坏・盤・蓋・甕・甑・鉢・鉢・壺瓶類）74点が出土した。【時期】出土遺物から8世紀末～9世紀前葉と考えられる。【重複関係】遺構の北東側はSI15と南西側はSI17と重複する。新旧関係は本遺構が新しい。



第30図 SI16出土遺物

SI17（第31図，第6表，図版9）

【位置】O2グリッドに位置する。【平面形】遺構の北側はSI16に切られ，西側は攪乱されているために全容を確認できないが，方形を呈すと考えられる。【規模】南北軸3.15m以上，東西軸3.60m以上，深さは20cmを測る。【主軸方向】N-8°-Wを示す。【覆土】観察しうる覆土は2層のみで，この2層から遺構の埋没過程を復元することは難しい。【床面・壁】床面はほぼ平坦で全体的に硬化面を持ち，壁は垂直に立ち上がる。床下には顕著な掘り方を持つ。【柱穴・ピット】検出されていない。【カマド】検出されていない。【遺物】土師器（坏・甕）12点，須恵器（坏・盤・甕）5点が出土した。【時期】出土遺物から8世紀中葉～後葉と考えられる。【重複関係】北側でSI16，南側でSI18と重複する。新旧関係は本遺構が古い。



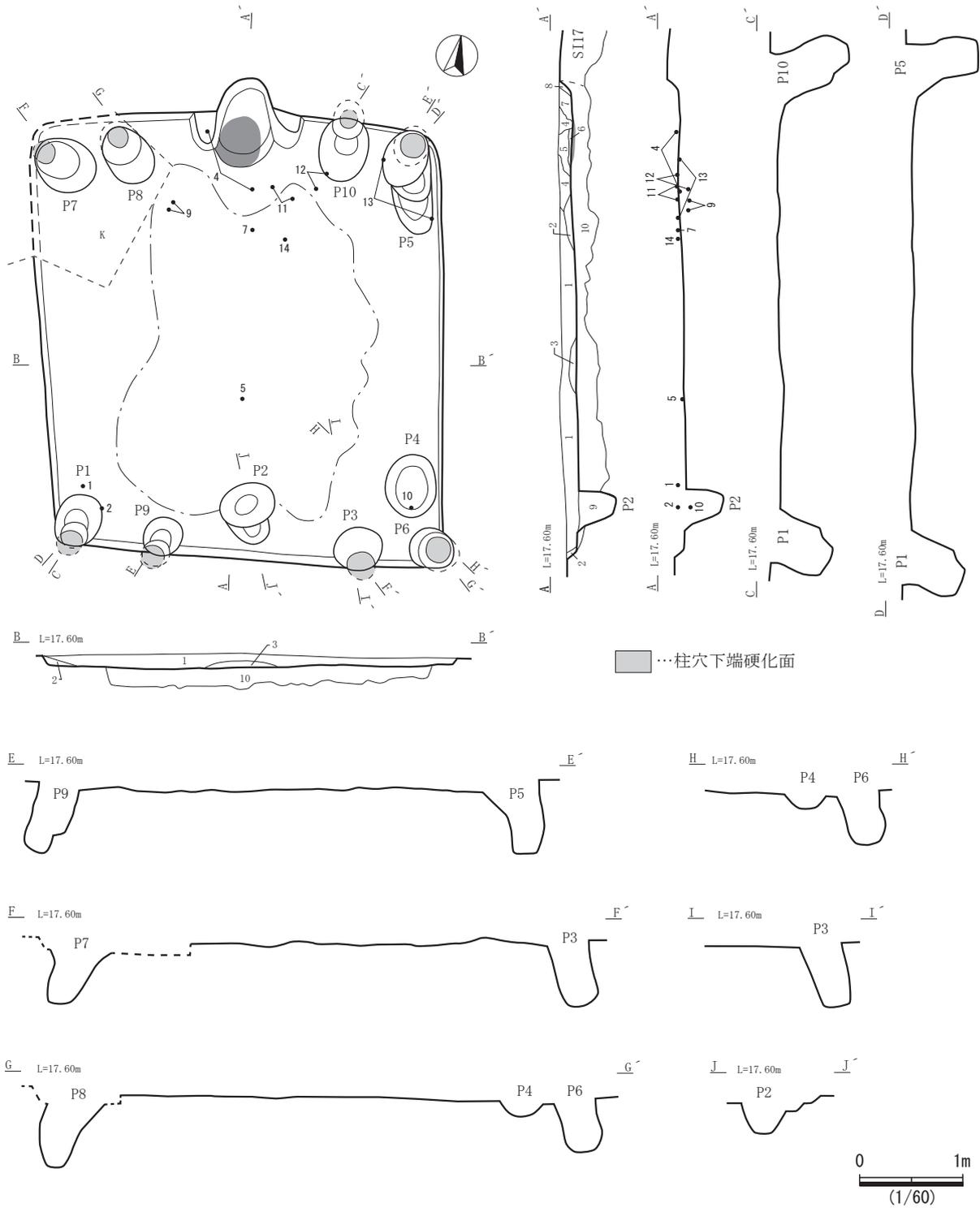
SI17 土層説明

1. 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量, 焼土少量含む。締まり・粘性有。
2. 10YR 4/6 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量, 焼土少量含む。締まり・粘性有。
3. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。締まり・粘性有。(掘り方)

第31図 SI17

SI18 (第32・33図, 第5・6表, 図版9・16・17)

【位置】O 2・3グリッドに位置する。【平面形態】方形を呈す。【規模】南北軸が4.30m, 東西軸は3.90m, 深さは15cm前後を測る。【覆土】暗褐色土が主体となる9層であるが, 遺構の埋没過程を復元することは難しい。【床面・壁】床面は若干の起伏はあるもののほぼ平坦で, 全体的に硬化面を持ち, 出入口付近からカマドの前面はより強く締まる。壁はやや外側に開きながら立ち上がり, 壁溝は認められない。床下には顕著な掘り方を持つ。【柱穴・ピット】10基を検出した。南壁に沿って穿たれたP1・P9・P6・P3, 北壁に沿って穿たれたP7・P8・P10・P5の8基はそれぞれ遺構内側から外側に向かって掘り込まれている。これらについての検討は総括にて行う。P2はその位置関係から出入口施設に伴うものと考えられる。P4については本遺構に伴うものか不明である。【カマド】北壁中央に付設される。煙道部は屋外に30cm掘り込み, 燃焼部幅は53cm, 左袖部が38cm, 右袖部が34cm残存する。火床面はよく被熱する。【遺物】土師器(坏・甕)171点, 須恵器(坏・盤・甕・甑・鉢)59点が出土した。【時期】出土遺物から8世紀末～9世紀前葉と考えられる。【重複関係】遺構の北西側はSI17と重複する。新旧関係は本遺構が新しい。



SI18 土層説明

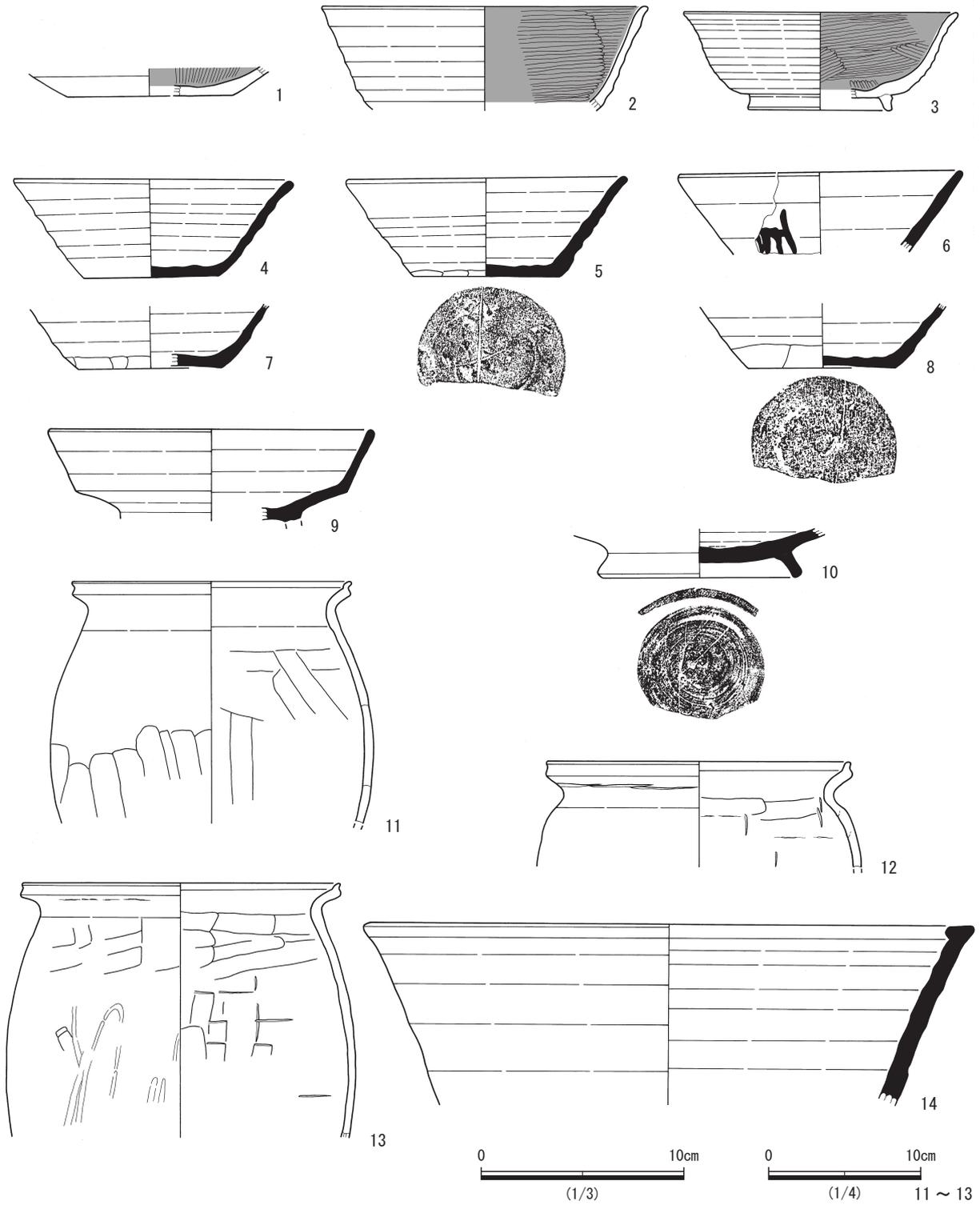
1. 10YR 3/3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量含む。縮まり・粘性有。
2. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
3. 10YR 3/3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。縮まり・粘性有。
4. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック中量、山砂少量含む。縮まり・粘性有。
5. 10YR 5/6 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、焼土ブロック・山砂少量含む。縮まり・粘性有。
6. 5YR 5/4 にぶい赤褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック多量、山砂少量含む。縮まり・粘性有。
7. 10YR 3/3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック少量含む。縮まり・粘性有。
8. 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量含む。縮まり・粘性有。
9. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
10. 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。(掘り方)

第32図 SI18

SI18 ピット計測値

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
長軸	50	58	43	60	102	45	65	62	38	60
短軸	43	49	43	47	45	45	50	45	38	46
深さ	52	36	60	13	58	49	55	70	61	68

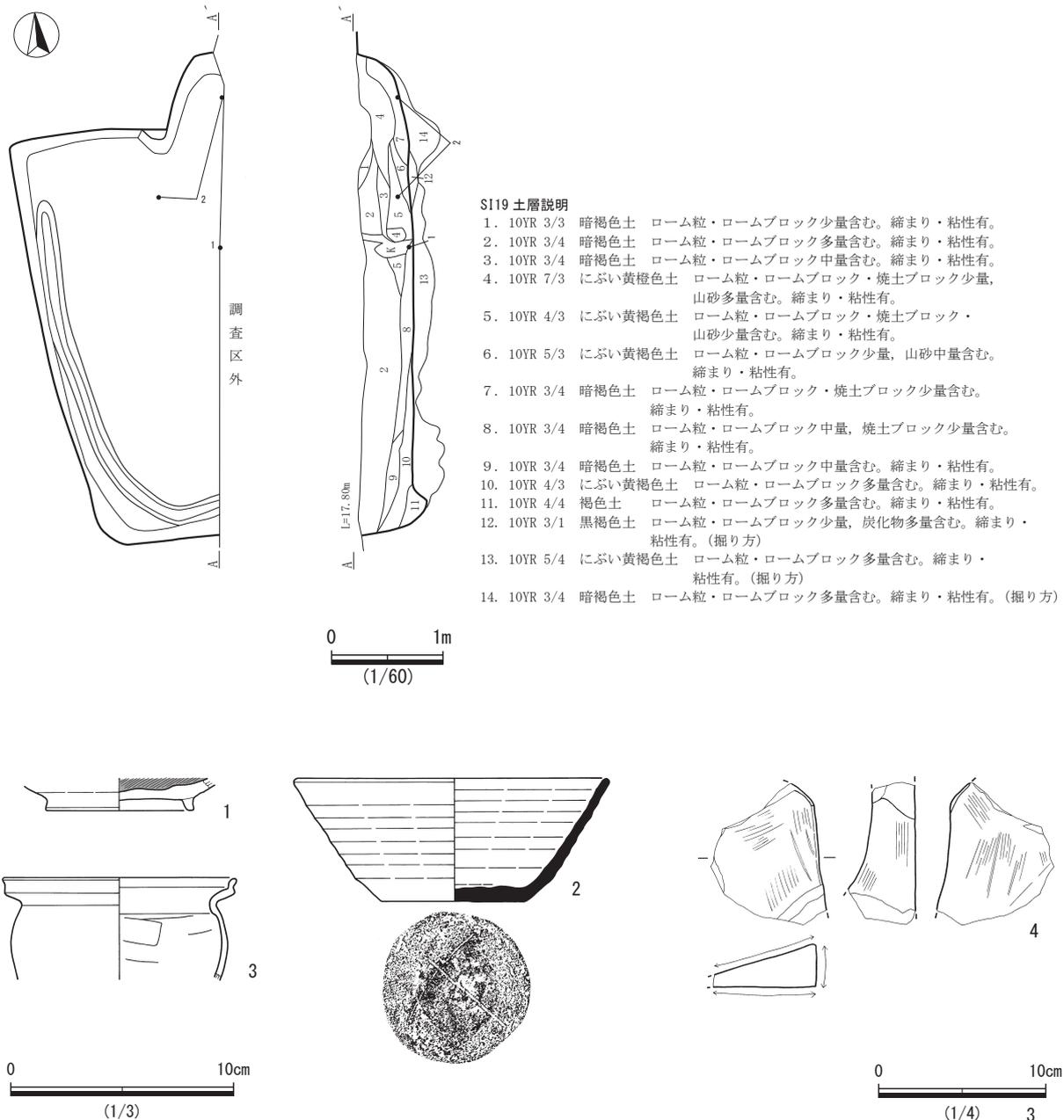
単位 = cm



第33図 SI18 出土遺物

SI19 (第34図, 第5・6表, 図版9・17)

【位置】O3グリッドに位置し, 東側の一部は調査区外となる。【平面形】一部が調査区外となり全容を確認できないが方形と考えられる。【規模】南北軸 3.95m, 東西軸 2.00m 以上, 深さは 47 cm を測る。【主軸方向】N - 5° - W を示す。【覆土】11 層からなる自然堆積である。【床面・壁】床面は平坦で全体的に硬化面を持ち, 壁は外側に弱く開きながら立ち上がる。北壁を除く壁下には幅 18cm, 深さ 14cm の壁溝が巡り, 床下には掘り方を持つ。【柱穴・ピット】検出されていない。【カマド】北壁中央に付設されるが攪乱のため遺存状況は悪い。【遺物】土師器 (坏・甕) 37 点, 須恵器 (坏・盤・甕・壺瓶類) 20 点, 平瓦 1 点, 石製品 (砥石) 1 点が出土した。【時期】出土遺物から 9 世紀前葉～中葉と考えられる。

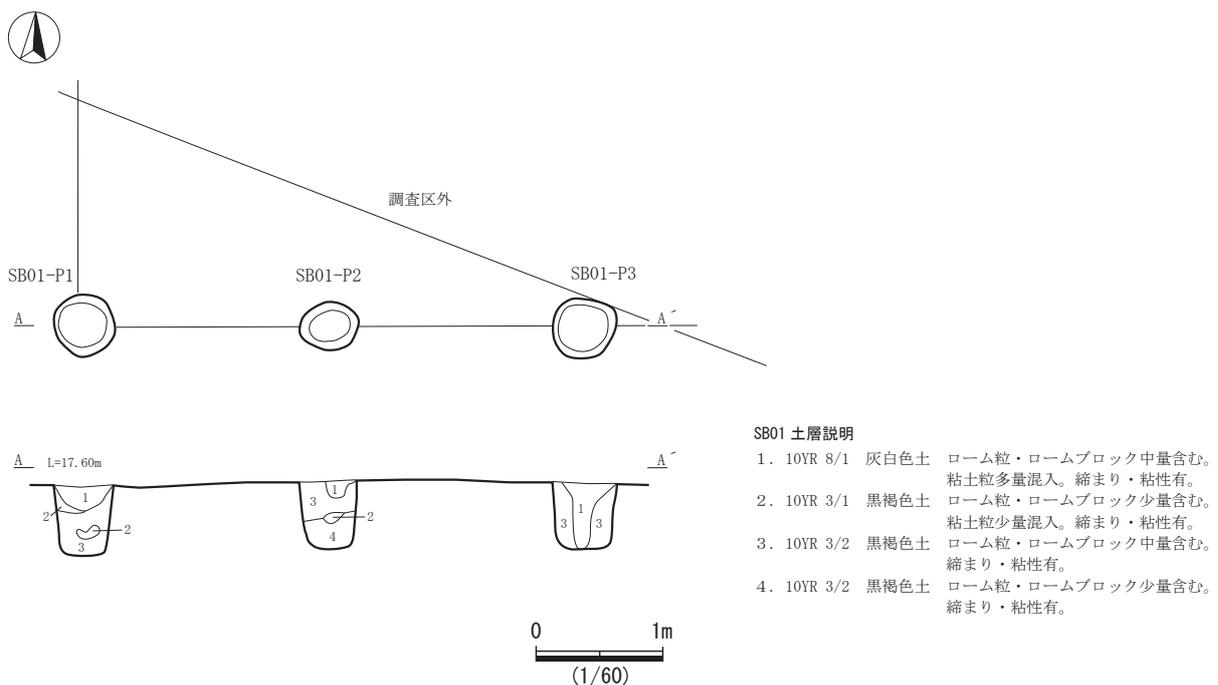


第34図 SI19 及び出土遺物

掘立柱建物跡

SB01 (第35図, 第6表, 図版10)

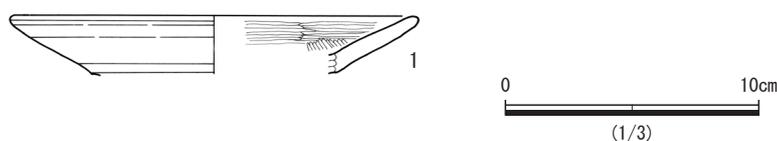
【位置】I6グリッドに位置する。【棟方向】検出したSB01-P1～P3の向きはN-87°-Eである。【平面規格】桁行もしくは梁間は約2間(全長4.0m)。【柱間寸法】約7尺(2.0m)の等間隔。【柱掘り方】P1が径55×50cm, 深さ55cm, P2が径50×42cm, 深さ55cm, P3が径50×45cm, 深さ50cmである。覆土の断面で柱痕が確認できたものはP3の1基のみで, 柱穴の底部に柱の加重による圧痕(わゆるアタリ)は認められなかった。【遺物】遺存状況が悪く図示には至らなかったが土師器の破片(甕)が1点出土している。【時期】出土遺物の特徴, 覆土の様相から奈良・平安時代と考えられる。



第35図 SB01

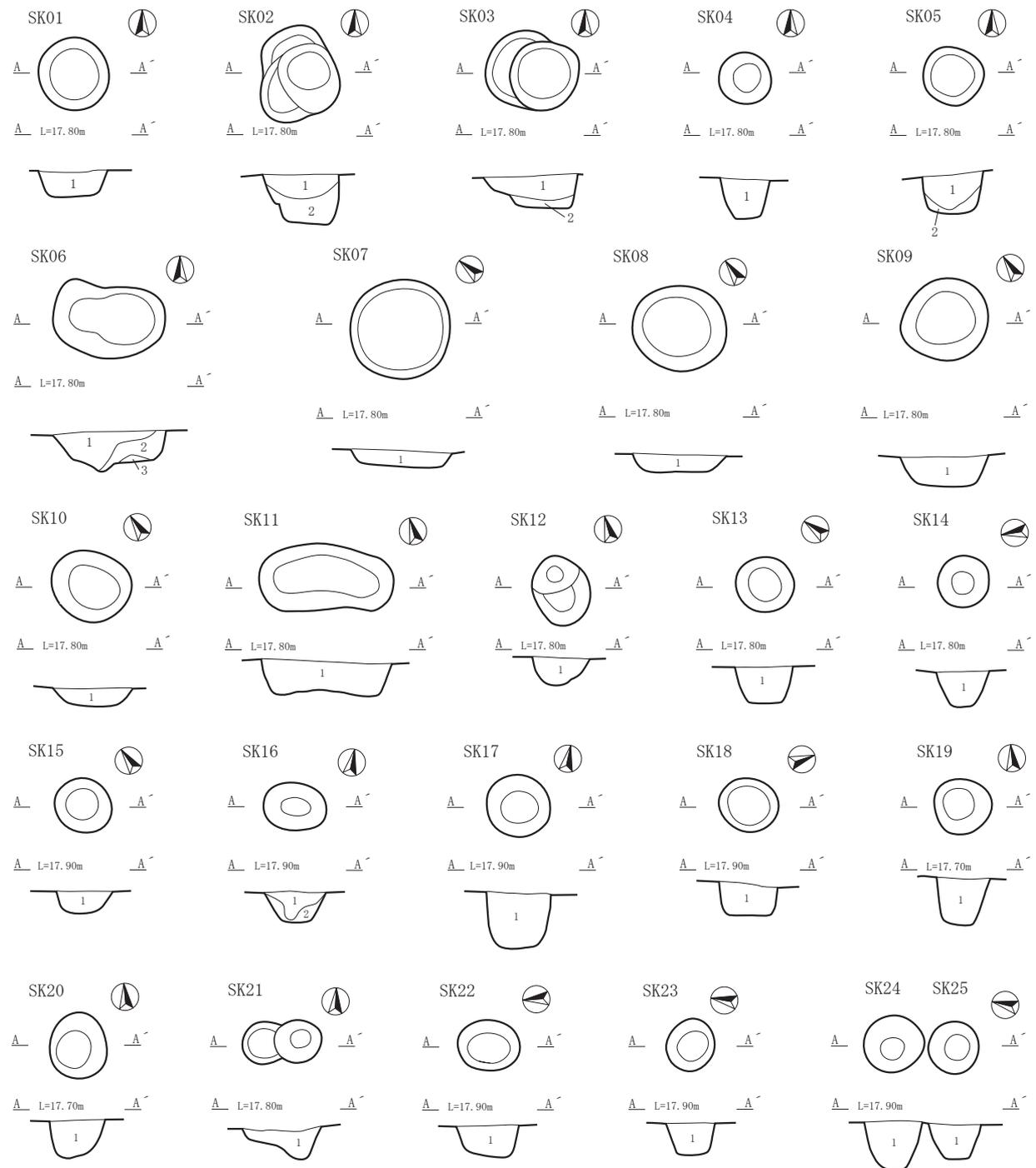
土坑, ピット (第36～38図, 第3～6表, 図版10～12・17)

今回の発掘調査によって検出された土坑は25基, ピットが7基になるが, このうち覆土中に遺物が含まれていたのはSK01・03・07・10～12・20・24の8基のみであり, C区より検出のSK10では本遺跡で唯一となる皿状の土師器が出土している。いずれの土坑, ピットも覆土は褐色土の単層～2層が主体であり, この覆土の色調, 及び締まり具合は, 今回検出した該期の竪穴建物跡のものと類似する。土坑, ピットについては規模形態および出土遺物の有無を一覧できる表形式にまとめて掲載する。



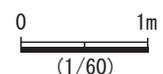
第36図 SK10 出土遺物

第3章 調査の成果

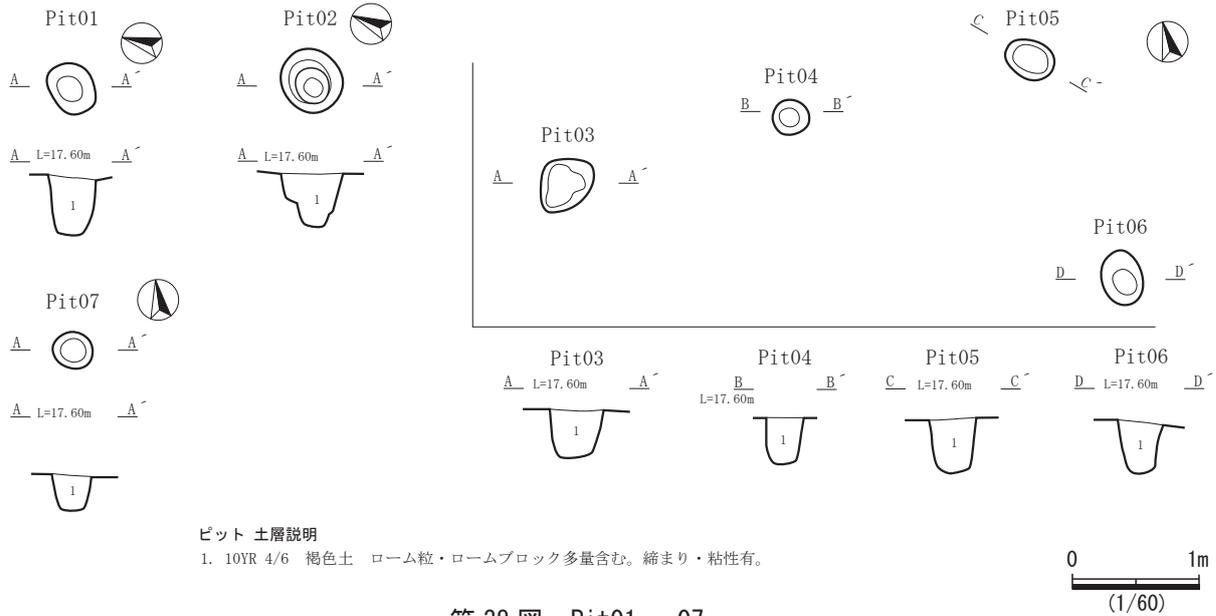


SK 土層説明

SK01	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。	SK13	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
SK02	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。	SK14	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
	2. 7.5YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。	SK15	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
SK03	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。	SK16	1. 7.5YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
	2. 10YR5/8 黄褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。		2. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
SK04	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。	SK17	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
SK05	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。	SK18	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
	2. 10YR5/8 黄褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。	SK19	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
SK06	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。	SK20	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
	2. 7.5YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。	SK21	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
	3. 10YR5/8 黄褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。	SK22	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
SK07	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり弱、粘性有。	SK23	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
SK08	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。	SK24	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
SK09	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。	SK25	1. 7.5YR5/8 明褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。
SK10	1. 10YR4/6 褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。			
SK11	1. 7.5YR3/4 暗褐色土	ローム粒・ロームブロック中量含む。縮まり弱、粘性有。			
SK12	1. 7.5YR3/4 暗褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。縮まり・粘性有。			



第37図 SK01 ~ 25



第38図 Pit01～07

第3表 土坑一覧表

遺構名	検出位置	形態		規模			出土遺物
		平面	断面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	
SK01	H2	円形	鍋底	72	70	25	土師器・甕
SK02	H2	不整形	不整形	86	78	48	—
SK03	H2	不整形	不整形	85	72	32	土師器・甕, 須恵器・甕・高台付坏
SK04	H2	円形	U字	53	52	37	—
SK05	H2	円形	鍋底	57	56	33	—
SK06	H2	不整形	不整形	104	68	36	—
SK07	I4	円形	鍋底	100	96	15	土師器・甕, 須恵器・坏・高台付坏
SK08	I6	円形	鍋底	92	85	17	—
SK09	I6	円形	鍋底	82	73	30	—
SK10	I6	楕円形	鍋底	76	67	21	土師器・甕・皿
SK11	K3	楕円形	鍋底	127	60	35	土師器・甕, 須恵器・坏
SK12	K4	楕円形	U字	68	55	29	土師器・甕, 須恵器・坏
SK13	N3	円形	U字	54	50	38	—
SK14	N3	円形	U字	48	47	33	—
SK15	L3	円形	鍋底	55	54	20	—
SK16	L3	楕円形	鍋底	62	46	27	—
SK17	L3	円形	U字	58	57	53	—
SK18	M3	円形	鍋底	58	52	29	—
SK19	I4	円形	U字	54	50	43	—
SK20	I4	楕円形	U字	63	51	36	土師器・甕, 須恵器・坏
SK21	J3	不整形	不整形	76	33	31	—
SK22	K4	楕円形	U字	58	49	33	—
SK23	K4	円形	U字	49	46	32	—
SK24	K4	円形	U字	55	54	46	土師器・甕
SK25	K4	円形	U字	50	49	32	—

第4表 ピット一覧表

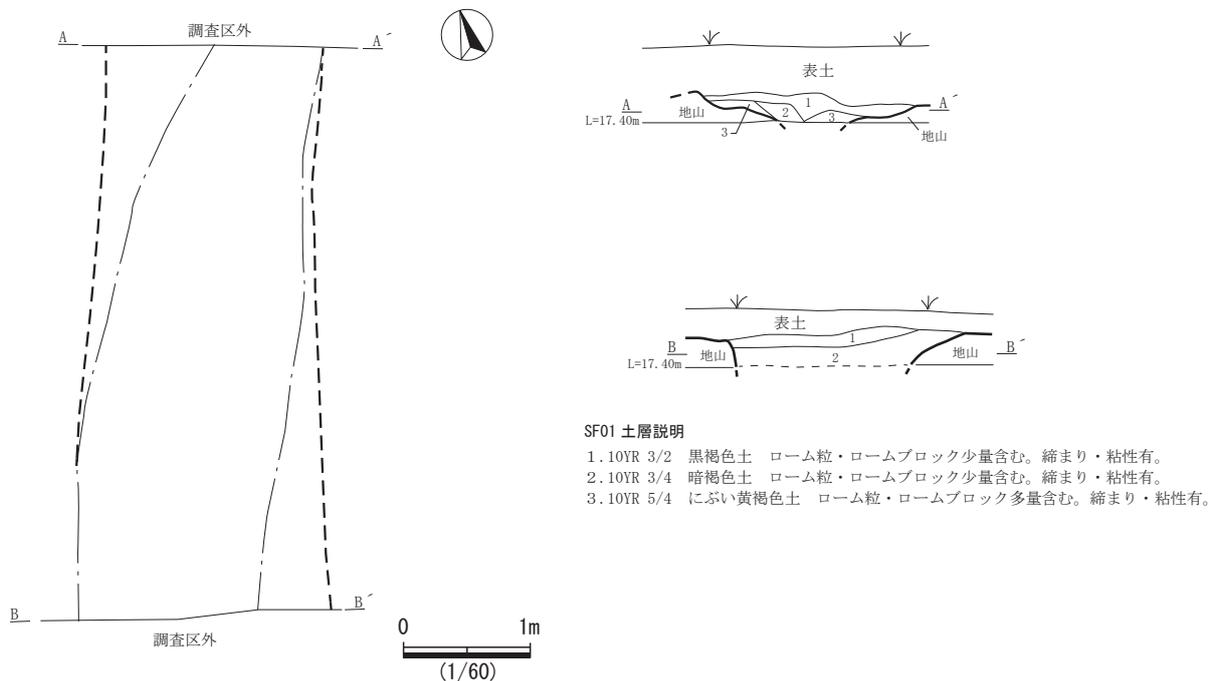
遺構名	検出位置	形態		規模			出土遺物
		平面	断面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	
Pit01	I5	楕円形	U字	46	32	53	—
Pit02	I5	楕円形	不整形	52	46	44	—
Pit03	I6	楕円形	U字	48	39	29	—
Pit04	I6	円形	U字	30	27	30	—
Pit05	I7	楕円形	U字	38	31	46	—
Pit06	I7	楕円形	U字	44	30	38	—
Pit07	I8	円形	U字	34	33	24	—

第5節 近世以降

道路状遺構

SF01 (第39図)

【位置】H 1・2グリッドに位置する。【平面規模】幅員は1.50m前後で、全長は約4.50mである。【遺物】出土していない。【時期】壁面に残る覆土の観察から本遺構は近世以降の新しい時期と考えられる。【備考】調査区内で検出されたのは版築されているようなしっかりとした構造のものではなく、人の往来により踏み固められた様相である。本遺構は壁面の土層観察では浅い皿状の窪みを呈しており、この形状から本遺構は区画や境界に構築された掘り込みを二次利用し、日常生活用の通路として機能していたとみられる。



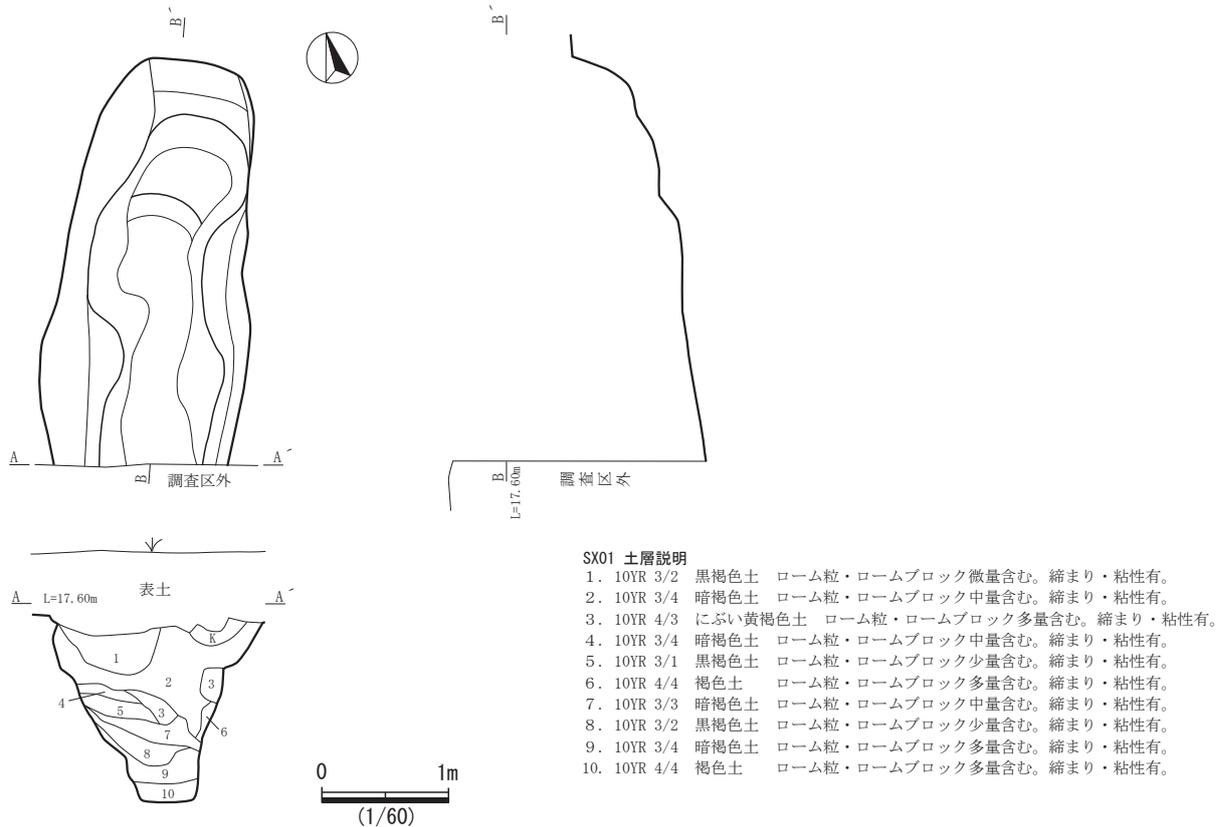
第39図 SF01

第6節 時代不明

溝状遺構

SX01 (第40図, 第6表, 図版12)

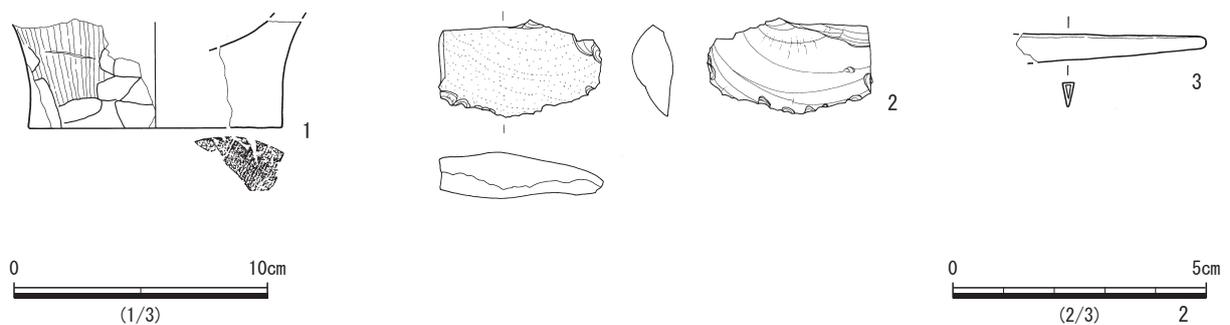
【位置】I・J 7グリッドに位置する。【平面・断面形態】南側の一部が調査区外となるが、平面は溝状をなし、断面形は逆台形を呈す。【規模】全長3.20m以上、幅1.60mで、深さは1.40mを測る。【覆土】黒褐色・暗褐色土を主体とする10層で、このうち1～3層までは人為堆積と判断される。【遺物】覆土中からは約100gの鉄滓が1点出土しているが混入物とみられ、遺存状況も悪く形状も不明のため図示しなかった。【時期・性格】全域を調査していないため断定はできないものの、覆土は表土に類似し、本遺構延長線上の東側調査区外には、同様に掘り込まれた現在も使用されている境界溝が存在する。本遺構もその境界を示す溝と同じ性格を持つ近代の溝であった可能性が高い。



第40図 SX01

第7節 遺構外出土遺物 (第41図, 第5・6表, 図版17)

遺構外出土遺物は、縄文土器3点、土師器（甕50点、坏3点、高台付坏・碗類1点）54点、須恵器（坏15点、甕3点、蓋2点、盤・鉢・壺瓶類・高台付坏がそれぞれ1点ずつ）24点、鉄製品1点（刀子）と鉄滓が1点、石器（剥片）1点が出土している。遺物は土師器の甕が主体となり、特にD区からの出土が顕著で、須恵器に関してもほとんどのものが同区から得られている。このD区は過去に行われた道路造成時（現代）の攪乱と削平が著しいことから、これらはその際に動かされてしまった遺物と推測される。今回の報告では3点の遺物を図示している。



第41図 遺構外出土遺物

第3章 調査の成果

第5表 出土遺物観察表

遺構番号	図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調 (外面：内面)	焼成	備考	
SI01	1	須恵器 蓋	15.5 (4.2) —	天井部～口端部片。ロクロ成形。口端部の歪み大きい。	白色砂礫少，黒色粒， 白色針状物微	10Y6/1灰： 10Y5/1灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産	
	2	土師器 甕	(22.0) (8.8) —	口縁部～胴上部片。口縁部から頸部は内外面ともにヨコナ デ。胴部は内外面ともにナデ・ヘラナデで外面には僅かにミ ガキが認められる。	白色砂礫(大粒)多，雲 母	7.5YR4/3褐： 10YR5/3にぶい黄褐	普通		
	3	鉄製品 釘	—	長さ：(4.5)，太さ：0.2～0.3，重さ：(1.5g) 断面角状。先端部欠損。錆付着部分は頭部とみられる。					
SI02	1	須恵器 坏	— (3.0) (9.0)	体部～底部片。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラ切り後ヘラ ナデ。	白色砂礫，チャート， 白色針状物微	2.5Y6/1黄灰： 2.5Y6/2灰黄	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産	
	2	須恵器 蓋	(15.5) (1.8) —	天井部～口端部片。ロクロ成形。	白色粒，黒色粒，白色 針状物	2.5Y6/3にぶい黄： 2.5Y6/2灰黄	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産	
	3	土師器 甕	— (2.0) (10.8)	胴部下端～底部片。胴部は外面が縦方向のミガキ，内面が横 方向のヘラナデ。底部底面は木葉痕。	白色砂礫(大粒)多，雲 母	10YR5/3にぶい黄褐： 10YR6/4にぶい黄橙	普通		
	4	鉄製品 鎌	—	長さ：(5.2)，幅：2.7～2.9，厚さ：刃側 0.1・背側 0.2，重さ：(14.6g) 基端部片。基端部は折返し。					
	5	鉄製品 刀子	—	長さ：(2.7)，幅：1.0～1.1，厚さ：刃側 0.1，背側 0.3，重さ：(2.3g) 刃身部片。切先部及び茎部欠損。					
SI03	1	土師器 鉢	— (8.0) (13.8)	20%存。体部は外面が縦方向のヘラケズリで下端は横方向の ヘラケズリ。内面は横方向のヘラナデ。	白色砂礫，砂礫，透明 砂粒	7.5YR5/4にぶい褐： 5YR5/6明赤褐	やや 良好		
	2	鉄製品 鎌	—	長さ：(16.2)，幅：先端部 2.2・基端部 3.8，厚さ：刃側 0.1cm・背側 0.3～0.4，重さ：(70.8g) ほぼ完存。先端部付近をわずかに欠損。基端部は折返し。					
SI04	1	須恵器 坏	(13.8) (4.8) —	口縁部～体部片。ロクロ成形。体部下端はヘラケズリか。	白色粒，灰色砂粒	2.5Y7/1灰白： 2.5Y7/2灰黄	還元		
	2	須恵器 坏	— (1.3) (10.0)	体部下端～底部片。ロクロ成形。体部下端はヘラケズリか。 底部底面は回転ヘラ切り後ナデ。	チャート，白色針状物	2.5Y7/1灰白： 2.5Y6/1黄灰	還元	木葉下窯跡群 産	
	3	土師器 甕	(20.0) (2.9) —	口縁部片。内外面ともにヨコナデ。	白色砂礫多，透明砂粒	7.5YR3/2黒褐： 7.5YR4/3褐	やや 良好		
	4	土師器 甕	— (6.0) (10.0)	胴部～底部片。胴部は外面が斜方向の密なミガキ，内面が横 方向のヘラナデ。底部との接合部をヨコナデ。	透明砂粒，砂礫	10YR4/2灰黄褐： 10YR5/3にぶい黄褐	普通		
	5	土師器 甕	— (4.5) (12.0)	胴部～底部片。胴部は外面が斜～縦方向の密なミガキ，内面 が斜方向のヘラナデで底部との接合部を横方向のヘラナデ。 底部底面は木葉痕。	白色砂礫多， 透明砂粒，雲母微	7.5YR4/3褐： 10YR6/4にぶい黄橙	普通		
SI05	1	土師器 坏	11.3 4.7 —	90%存。口縁部は内外面ともにヨコナデ。体部は外面がヘラ ケズリで口縁部との接合痕が残り，内面が横方向のヘラナ デ。底部底面は1方向のヘラケズリで周縁部を整える。底部 の孔は内面から穿たれる。	浅黄色粒多，砂礫，白 色針状物	10YR4/2灰黄褐： 7.5YR5/4にぶい褐	普通		
	2	土師器 坏	(15.3) (3.3) —	口縁部～体部片。外面は口縁部がヨコナデ，体部が横方向の ヘラケズリ。内面は全体にヨコナデ。	白色粒，透明粒	10YR3/2黒褐： 7.5YR5/4にぶい褐	やや 良好		
	3	土師器 坏	(11.6) (3.1) —	口縁部～体部片。外面は口縁部がヨコナデ，体部が横方向の ヘラケズリ。内面は全体にヨコナデでわずかに赤彩の痕跡が 認められる。	白色砂礫，チャート， 角閃石，白色針状物	5YR4/6赤褐： 7.5YR5/4にぶい褐	普通		
	4	須恵器 坏	13.0 4.2 5.0	60%存。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラケズリ。	白色砂粒，チャート 少，白色針状物微	5Y6/1灰： 2.5Y6/2灰黄	還元 堅緻	湖西窯跡群 産カ	
	5	須恵器 坏	— (1.6) (8.0)	体部下端～底部片。ロクロ成形。底部底面は摩滅し調整不鮮 明。	灰色砂礫，雲母	2.5Y7/1灰白： 2.5Y7/1灰白	還元	新治窯跡群産	
	6	須恵器 蓋	(19.0) (1.3) —	口端部片。ロクロ成形。内面にかえりあり。	灰色砂粒，雲母	2.5YR7/1灰白： 2.5YR7/1灰白	還元 堅緻	新治窯跡群産	
	7	須恵器 蓋	— (1.6) —	天井部片。ロクロ成形。天井部外面は回転ヘラケズリか。内 面にかえりが認められる。	白色砂礫，灰色砂礫， 雲母	5Y5/1灰： 2.5Y5/1黄灰	還元 堅緻	新治窯跡群産	
	8	土師器 甕	(19.0) (15.5) —	30%存。口縁部～胴部片。口縁部は内外面ヨコナデ。胴部は 外面が横方向，下半が斜方向のヘラケズリ。内面は縦方向の ヘラナデ。煤が僅かに付着。	白色粒，白色砂礫，角 閃石，透明砂粒	7.5YR5/6明褐： 7.5YR5/3にぶい褐	やや 良好		
	9	土師器 甕	(22.0) (5.9) —	口縁部～頸部片。口縁部は内外面ともにヨコナデ。	砂礫，角閃石・輝石類	7.5YR6/6橙： 7.5YR6/6橙	良好		
	10	土師器 甕	(18.0) (11.2) —	口縁部～胴部片。外面は口縁部がヨコナデ，胴部がヘラケズ リ後縦方向の密なヘラミガキで輪積痕の残りが目立つ。内面 は全体に横方向のヘラナデ。	透明砂粒，赤色粒，砂 礫微	10YR3/1黒褐： 10YR5/3にぶい黄褐	良好	11と同一個体	
	11	土師器 甕	— (4.0) 9.2	胴部～底部片。外面は胴部が縦方向の密なヘラミガキ。底部 底面は全体にヘラミガキ。内面はヘラナデ。	透明砂粒，赤色粒	10YR3/1黒褐： 10YR5/3にぶい黄褐	やや 良好	10と同一個体	

遺構番号	図面番号	種類器種	口径器高底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調(外面:内面)	焼成	備考	
S105	12	土師器甕	— (4.5) 9.0	50%存。胴部～底部片。外面はヘラケズリ後斜方向の密なミガキ。底部底面は木葉痕。内面はヘラナデ。胴部は輪積みが剥離した部分をヘラケズリで整えて口縁を作り、鉢型土器として二次利用したとみられる。	白色粒, 砂粒	7.5YR6/4にぶい橙: 7.5YR6/6橙	良好		
	13	土師器甕	— (7.0) 8.5	胴部～底部片。外面は胴部が斜方向のヘラケズリで一部赤彩が認められる。底面は不定方向のヘラケズリ。内面はヘラナデで黒色処理する。技法が甕製作と同様であることから破損後鉢型土器として二次利用したとみられる。	白色粒, 角閃石・輝石類, 砂粒	10YR6/4にぶい黄橙: 7.5YR1.7/1黒	やや良好		
	14	土師器甕	— (3.9) 10.0	胴部下端～底部片。外面は胴部が縦方向のヘラケズリ, 底部底面は1方向のヘラケズリ。内面は摩滅し調整は不鮮明であるが, ヘラ状工具痕が残る。	白色粒, 角閃石・輝石類, 砂粒多	5YR5/6明赤褐: 5YR5/8明赤褐	やや良好		
	15	土師器甕	— (3.0) (8.0)	胴部～底部片。体部は外面が斜方向のヘラミガキ, 内面は横方向のヘラナデで, 焼成後破損部を整え, 二次利用した痕跡が認められる。底部底面はヘラケズリ後ヘラミガキで周縁部を指頭ナデ。	透明砂粒, 黒色粒	7.5YR3/1黒褐: 10YR6/4にぶい黄橙	やや良好		
	16	須恵器甕	— (10.0) —	胴部片。外面はタタキ後横方向のカキメ。内面は同心円状の当て具痕。	白色粒, 灰色粒, 白色針状物	5Y4/1灰: 5Y7/2灰白	還元堅緻		
	17	土製品支脚	長さ: (16.0), 径: 5.4, 重さ: (594.5g) 50%存。全体に縦方向のヘラケズリで成形。下端部は指頭による成形で裾部を作る。接地面での径8.8cm。						
	18	土製品支脚	長さ: (19.8), 径: 5.8, 重さ: (763.5g) 50%存。上端面は指頭によるナデ。上半は幅の狭い縦方向のヘラケズリ, 下半は幅が広い縦方向のヘラケズリと指頭ナデ。						
	19	鉄製品刀子	全長: 12.3 (刀身部長 8.2, 茎部長 4.1), 幅: 刀身部 1.2, 身元 1.4, 茎 0.5~0.9, 厚さ: 刀身部・刃側 0.1, 背側 0.4, 茎部 0.2, 重さ: 17.5g。 ほぼ完存。刀身部中央で破損。切先は先細りか。鬩部は両開か。刀身部はわずかに湾曲。						
	S107	1	土師器高台付坏	(14.6) 5.3 8.0	50%存。体部の大部分を欠損。ロクロ成形。内面黒色処理・密なミガキ(体部横方向, 底部1方向)。高台は貼り付け後ナデ。	砂粒, 赤色粒, 雲母粒, 白色針状物	7.5YR8/4浅黄橙: 7.5YR1.7/1黒	良好	
2		須恵器坏	12.7 4.3 7.4	80%存。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラ切り後1方向のヘラナデで切り離し痕が残る。	白色砂礫(大粒)多, チャート, 白色針状物	10Y5/1灰: 10Y5/1灰	還元堅緻	木葉下窠跡群産	
3		須恵器坏	(13.8) 5.0 6.6	60%存。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラ切り後丁寧なヘラナデ。	白色砂礫(大粒), チャート(大粒), 黒色粒, 白色針状物	5Y5/2灰オリーブ: 5Y5/2灰オリーブ	還元堅緻	木葉下窠跡群産	
4		須恵器坏	13.5 5.2 6.2	60%存。一部未還元。ロクロ成形。体部下端は手持ちヘラケズリ。底部底面は手持ちヘラケズリで切り離し痕を中心に「X」の線刻あり。	白色砂礫(大粒), チャート, 白色針状物	7.5Y5/1灰: 7.5Y5/1灰	還元堅緻	木葉下窠跡群産	
5		須恵器坏	13.0 4.5 6.2	80%存。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラ切り後丁寧なヘラナデ。	白色砂礫(大粒)多, チャート, 白色針状物	10Y6/1灰: 7.5Y6/1灰	還元堅緻	木葉下窠跡群産	
6		須恵器坏	(13.8) 5.1 (7.0)	30%存。ロクロ成形。体部外面から内面上半にかけて漆状の物質を塗布した痕跡あり。	白色砂礫(大粒)多, チャート, 白色針状物	2.5Y4/1黄灰: 5Y5/1灰	還元堅緻	木葉下窠跡群産	
7		須恵器高台付坏	— (2.4) 7.4	底部片。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラケズリで線刻あり。高台部は貼り付け後ナデ。	白色砂礫(大粒), チャート(大粒), 白色針状物, 黒色粒	2.5Y7/2灰黄: 2.5Y7/3浅黄	還元	木葉下窠跡群産	
8		須恵器盤	(18.8) (2.0) —	口縁部～体部片。ロクロ成形。外面口縁部から内面にかけて自然釉がかかる。	白色粒微, 黒色粒多, 白色針状物微	5Y5/1灰: 5Y5/2灰オリーブ	還元堅緻	木葉下窠跡群産	
9		須恵器甕	— (11.5) —	胴部片。未還元焼成。外面上半は縦方向の平行タタキ, 下半は斜～横方向のヘラケズリ。内面はヘラナデで輪積痕が残る。	透明粒, 砂粒, 砂礫, 金雲母	7.5YR3/3暗褐: 7.5YR4/3褐	未還元	新治窠跡群産カ	
S108	1	土師器坏	(13.7) (4.1) —	口縁部～体部片。ロクロ成形。外面は口縁部がヨコナデ, 体部が横方向のヘラケズリ。内面はヨコナデ後縦方向の密なミガキ。	白色粒, 透明粒, 角閃石・輝石類, 白色針状物	10YR6/4にぶい黄橙: 10YR5/2灰黄褐	普通		
	2	土師器坏	(14.6) (3.2) —	口縁部～体部片。外面は口縁部がヨコナデ, 体部が横方向のヘラケズリ。内面はヨコナデ後縦方向のまばらなミガキ。	透明粒, 角閃石・輝石類, 白色針状物	10YR6/3にぶい黄橙: 10YR5/3にぶい黄褐	やや良好		
	3	土師器甕	(12.8) 11.2 7.4	50%存。口縁部～胴部の約2/3を欠損。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面が横方向のヘラケズリ。内面は縦方向のヘラナデ。底部底面は1方向のヘラケズリ。胴部下端から底部にかけて歪みあり。	白色粒, 白色砂礫, 透明粒, 角閃石, 白色針状物	10YR4/2灰黄褐: 7.5YR5/3にぶい褐	やや良好		
	4	土師器鉢	(18.6) 7.0 (8.0)	40%存。外面上半～内面口縁部にかけて摩滅顕著で調整不鮮明。外面は体部下半が横方向のヘラケズリ。底部底面は1方向のヘラケズリ後ナデ。内面はヘラナデで底部に煤状の付着が認められる。	白色砂礫, チャート, 砂粒多, 白色針状物微	7.5YR5/4にぶい褐: 2.5YR5/6明赤褐	普通		
S109	1	土師器坏	12.6 4.4 5.4	ほぼ完存。口縁部の一部欠損。ロクロ成形。体部下端から底部は回転ヘラケズリ後体部下端を手持ちヘラケズリ。内面黒色処理・密なミガキ(体部横方向・底部1方向)。体部に墨書「土・ロ・咲」(横書き)あり。	白色粒, 灰色粒, 白色針状物	10YR6/6明黄褐: 10YR1.7/1黒	良好		
	2	土師器坏	(13.8) 4.5 6.4	60%存。口縁部～体部の約2/3を欠損。ロクロ成形。体部下端から底部は回転ヘラケズリ。内面黒色処理・密なミガキ(体部斜～横方向, 底部不定方向)。	白色砂礫少, 透明粒, 白色針状物	7.5YR6/6橙色: 10YR1.7/1黒	良好		
	3	須恵器蓋	14.2 3.3 —	90%存。ロクロ成形。直径3.8cm, 高さ0.5cmで中央が大きく窪む環状のツマミ。天井部は回転ヘラケズリ。口端部はわずかに屈曲。	白色砂礫, チャート(大粒), 黒色粒, 白色針状物	5Y6/1灰: 5Y6/1灰	還元堅緻	木葉下窠跡群産	

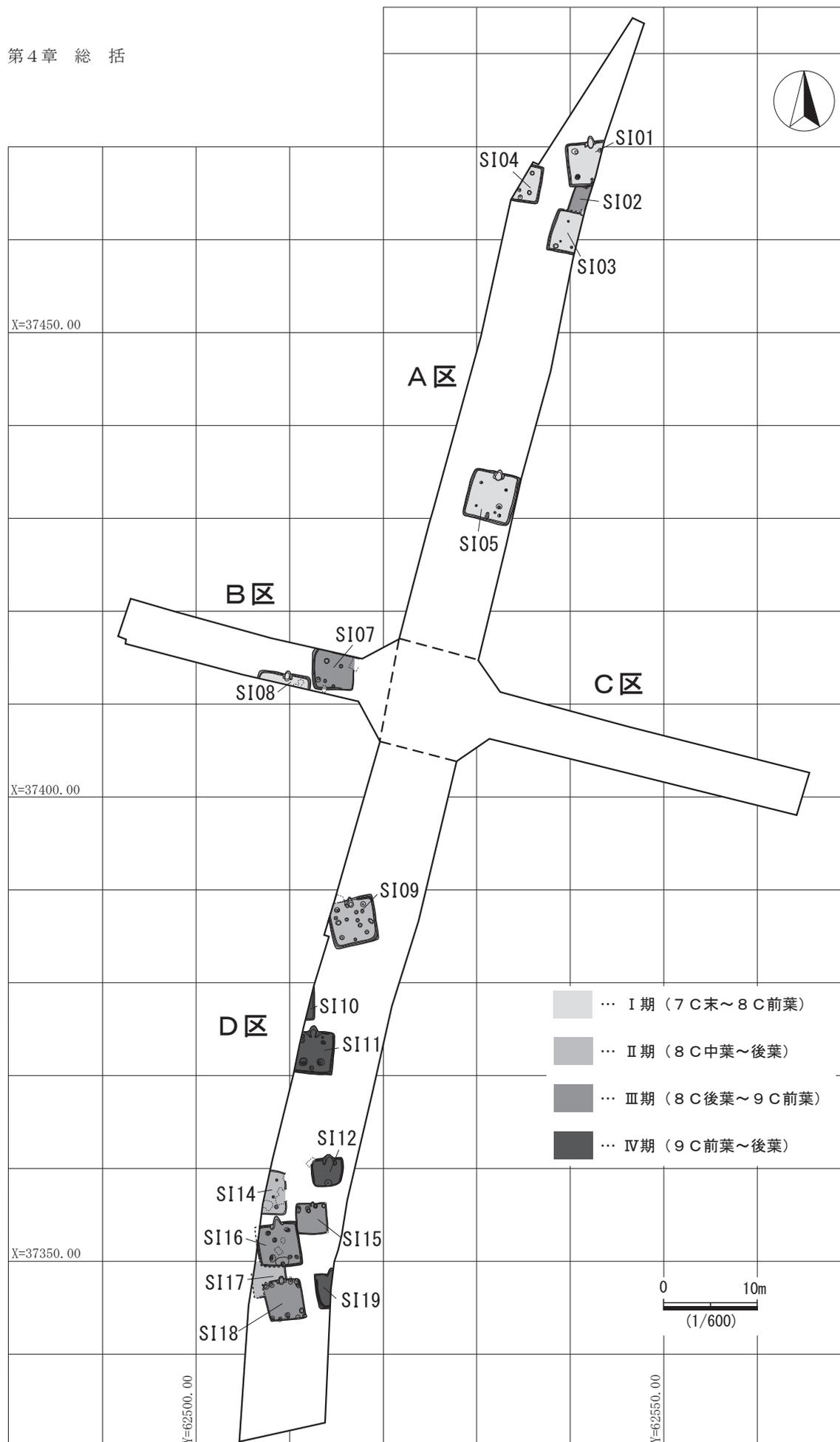
第3章 調査の成果

遺構番号	図面番号	種類器種	口径器高底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調(外面:内面)	焼成	備考	
SI09	4	須恵器蓋	(15.8) (2.7) —	天井部〜口端部片。ロクロ成形。天井部は回転ヘラケズリ。口端部はわずかに屈曲し、外面に面を形成する。	白色砂礫(大粒), チャート, 黒色粒, 白色針状物	5Y5/1灰: 5Y5/1灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産	
	5	須恵器蓋	— (2.2) —	天井部片。直径3.8cm, 高さ0.6cmで中央が大きく窪む環状のツمامミ。天井部外面は回転ヘラケズリで未還元焼成, 内面は滑らかで転用硯として利用された可能性あり。	白色砂礫, 白色粒, 白色針状物	7.5YR5/3にぶい褐: 2.5Y5/1黄灰	未還元	木葉下窯跡群 産	
	6	土師器甕	(21.6) (5.1) —	口縁部〜胴上部片。口縁部は内外面ともにヨコナデで口唇部はわずかに摘み上げを意識した形状が認められる。胴部は外面がヘラナデ, 内面がナデ。	白色砂礫多, 砂粒, 雲母	7.5YR5/4にぶい褐: 7.5YR6/6橙褐色	良好		
	7	土師器甕	(17.8) (5.4) —	口縁部〜胴上部片。口縁部は内外面ともにヨコナデで外面には工具痕が残る。胴部は外面がナデ, 内面が指頭によるナデ。	白色砂礫多, 砂粒, 雲母	10YR7/4にぶい黄橙: : 10YR4/2灰黄褐	やや 良好		
	8	須恵器甕	— (5.8) —	口縁部〜胴上部片。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面が斜方向の平行タタキ, 内面がヘラナデ。	砂礫, 白色粒, 雲母	N4/ 灰: 2.5Y5/2暗灰黄	還元	新治窯跡群 カ	
	9	土製品支脚	長さ: <10.3>, 径: 7.4, 重さ: <471.8g> 下半部残存。全体に縦方向のヘラケズリで成形。円筒状で下部部に向け広がる形状。下端での最大径8.0cm。一部被熱顕著。						
	10	土製品支脚	長さ: <6.7>, 径: 5.3, 重さ: <135.0g> 上部残存。全体にヘラケズリで成形。上部部平坦面はナデ。						
	11	土製品土玉	径: 3.0~3.2, 厚さ: 2.5, 孔径: 0.6, 重さ: 23.2g 完存。指頭によるナデ調整。穿孔は焼成前。			白色粒, 砂粒	7.5YR6/4にぶい橙: —	良好	
	12	鉄製品鎌	長さ: <16.3>, 幅: 2.2~3.2, 厚さ: 刃側 0.1, 背側 0.3, 重さ: <52.3g> 90%存。先端部欠損。中央部に最大幅。基部部は折返し。						
	SI10	1	須恵器環	(13.4) 4.7 6.8	40%存。口縁部〜体部のほとんどを欠損。ロクロ成形。体部下端を手持ちヘラケズリ。底部底面は回転ヘラ切り後ヘラケズリで全体に漆状のシミと線刻あり。	白色砂礫, チャート多, 白色針状物	5Y6/1灰: 5Y6/2灰オリーブ	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
		2	須恵器環	(14.5) 4.9 (7.3)	口縁部〜底部片。ロクロ成形。底部底面はナデ。	チャート(大粒)多, 白色針状物微	2.5Y7/2灰黄: 2.5Y7/2灰黄	還元	木葉下窯跡群 産
		3	須恵器壺	— (11.7) 10.4	30%存。ロクロ成形。胴部は外面が縦方向のまばらな平行タタキ, 下端は回転ヘラケズリ, 内面は指頭によるナデ。高台部は貼り付け後ナデ。	白色砂礫, チャート, 白色針状物	7.5YR4/2灰褐: 7.5YR5/2灰褐	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
SI11	1	須恵器環	(13.6) 5.0 8.0	40%存。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラ切り後ヘラケズリで周縁部をナデ。線刻あり。	白色砂礫(大粒)多, チャート, 白色針状物	2.5Y4/1黄灰: 2.5Y5/2暗灰黄	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産	
	2	須恵器環	(11.8) 4.5 (5.6)	口縁部〜底部片。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラ切り後ナデ。体部外面に自然釉がかかる。	白色砂礫, 黒色粒, 白色針状物	5Y4/1灰: 5Y5/2灰オリーブ	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産	
	3	須恵器環	(13.8) 4.5 (8.4)	口縁部〜底部片。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラ切り後ナデ。	白色砂礫, チャート(大粒), 白色針状物	10YR5/3にぶい黄褐: : 7.5YR5/3にぶい褐	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産	
	4	須恵器環	(13.8) 4.3 (8.0)	口縁部〜底部片。ロクロ成形。体部下端から底部底面にかけて回転ヘラケズリ。	白色砂礫(大粒), チャート, 白色針状物	5Y5/1灰: 7.5Y5/1灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産	
	5	須恵器環	— (2.3) (8.0)	体部〜底部片。ロクロ成形。底部底面は丁寧なナデ。線刻あり。	白色粒, 透明粒, 角閃石, チャート, 白色針状物	5Y7/1灰白: 5Y7/2灰白	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産	
	6	須恵器盤	(15.0) 4.2 8.8	60%存。口縁部の大部分を欠損。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラケズリ。高台部は貼り付け後ナデ。内外面の一部に自然釉がかかる。	白色砂礫, チャート, 白色針状物	5Y5/1灰: 2.5Y5/1黄灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産	
	7	須恵器盤	16.2 3.9 8.8	60%存。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラケズリ。高台部は貼り付け後ナデ。	白色砂礫(大粒)多, チャート(大粒)多, 白色針状物	2.5GY5/1オリーブ灰: : 2.5GY6/1オリーブ灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産	
	8	須恵器蓋	(15.6) (2.4) —	30%存。ツمامミ部欠損。ロクロ成形。天井部は回転ヘラケズリ。	白色砂礫, 白色粒, チャート, 白色針状物微	10YR5/2灰黄褐: 5Y5/1灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産	
	9	土師器甕	(19.6) (11.0) —	20%存。口縁部〜胴部片。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面上半がナデ, 下半が斜方向のヘラケズリでヘラ状工具痕が残る。内面はヘラナデでヘラ状工具痕が残る。	白色砂礫多, 白色粒, 雲母	2.5YR5/8明赤褐: 5YR5/8明赤褐	普通		
	10	土師器甕	(23.6) (5.0) —	口縁部〜胴上部片。口縁部は内外面ともにヨコナデで外面には接合痕が残る。胴部は外面がナデ, 内面がヘラナデで工具痕が残る。	砂礫多, 白色砂礫, 赤色粒, 雲母少	7.5YR7/6橙: 7.5YR6/3にぶい褐	普通		
	11	土師器甕	— (8.5) 6.4	30%存。胴部〜底部片。外面は器面が荒れ調整は不鮮明。内面はヘラナデ。弥生土器・壺の可能性あり。	砂礫多, 透明粒	7.5YR5/4にぶい褐: 10YR3/2黒褐	不良		
SI12	12	石製品砥石	長さ: <4.9>, 幅: 4.1, 厚さ: 2.0~2.2, 重さ: <80.4g> 砂岩製。両端部欠損。4面が使用され, 内1面で筋状の傷が認められる。						
	13	鉄製品刀子	長さ: <2.9> (刀身部長 1.1, 茎部長 1.8), 幅: 刀身部 1.3, 茎部 0.7~1.0, 厚さ: 刀身部刃側 0.1・背側 0.3, 茎部 0.3, 重さ: <3.2g> 刀身部の大部分及び茎尻を欠損。鬺は背側のみ。						
SI12	1	瓦平瓦	長さ: <9.8>, 厚さ: 1.6~2.0, 重さ: <298.0g> 左側部片。凹面は布目圧痕成形, 糸切痕あり, 側縁ヘラケズリ。凸面は糸切痕あり, 摩滅顕著で調整不鮮明。一枚作りで左側部残存。凸面側縁に粘土のはみ出しあり。側部面取り2回。			白色砂礫少, チャート, 角閃石, 白色針状物微	凹面 7.5YR6/4にぶい橙 凸面 10YR7/6明黄褐	良好	

遺構番号	図面番号	種類器種	口径器高底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調(外面:内面)	焼成	備考
SI15	1	須恵器 坏	— (2.1) (7.8)	体部～底部片。ロクロ成形。底部底面はヘラケズリで漆状のシミあり。	白色砂礫, チャート, 黒色粒, 白色針状物	5Y4/1灰: 5PB5/1青灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	2	土師器 甕	(24.0) (15.4) —	口縁部～胴部片。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面上半が縦方向のヘラナデで工具痕が残り, 外面下半が縦方向のミガキ。内面が縦方向のヘラナデと指頭によるナデ。	白色砂礫, 砂粒, 雲母	10YR6/3にぶい黄橙: 10YR5/4にぶい黄褐	やや 良好	
	3	土師器 甕	(22.6) (12.4) —	口縁部～胴部片。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面が縦方向, 内面が横方向のヘラナデで, 外面下半はヘラケズリ。	砂礫, 雲母, 白色針状物	10YR5/3にぶい黄褐: 10YR5/3にぶい黄褐	普通	
SI16	1	須恵器 坏	— (4.4) 7.6	50%存。体部～底部片。ロクロ成形。底部底面はヘラナデで中央部は特に丁寧なナデ。体部下端に底部との接合痕が残る。	白色砂礫(大粒)多, チャート, 白色針状物	2.5Y5/2暗灰黄: 2.5Y5/2暗灰黄	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	2	須恵器 坏	(14.0) (2.5) —	口縁部片。ロクロ成形。	白色砂礫(大粒)多, 白 色針状物	N3/ 暗灰: N4/ 灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	3	須恵器 坏	— (8.0) (2.8)	体部～底部片。ロクロ成形。底部底面は丁寧なナデでヘラ切り離し部がわずかに残存。	白色砂礫, チャート, 白色針状物	10Y5/1灰: 10Y6/1灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	4	須恵器 坏	— (1.7) (7.4)	体部～底部片。ロクロ成形。底部底面はナデ。	白色砂礫, 白色針状物	5YR5/2灰褐: 5YR5/2灰褐	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	5	須恵器 盤	(18.6) (2.8) —	20%存。高台部から底部を欠損。ロクロ成形。	白色砂礫, チャート 少, 白色針状物	2.5YR5/3にぶい赤褐: 5YR5/2灰褐	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	6	須恵器 盤	(18.6) (2.3) —	口縁部～体部片。ロクロ成形。内面に自然釉がかかる。	白色砂礫(大粒), 黒色 粒, 白色針状物	7.5Y4/1灰: 5Y4/1灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	7	土師器 甕	(23.6) (10.0) —	口縁部～胴部片。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面が斜～縦方向のヘラナデ, 内面は横～斜方向のヘラナデ。	白色砂礫多, 白色粒 多, 雲母	5YR4/4にぶい赤褐: 5YR4/4にぶい赤褐	普通	
	8	土師器 甕	(23.5) (12.4) —	口縁部～胴部片。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面が縦方向のヘラナデ, 内面が横方向のヘラナデ。	白色砂礫, 白色粒, 雲 母	5YR5/6明赤褐: 7.5YR5/3にぶい褐	普通	
	9	土師器 甕	(18.6) (6.8) —	口縁部～胴部片。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面上半がナデ, 下半が縦方向のヘラケズリ, 内面が横方向のヘラナデ。	白色砂礫, 砂粒多, 雲 母	2.5YR4/8赤褐: 2.5YR5/6明赤褐	普通	
	10	須恵器 甕	— (4.9) —	口縁部～胴部片。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面が縦方向の平行タタキ。内面がヘラナデ。	白色粒, 砂粒, 雲母多	10YR4/2灰黄褐: 10YR5/3にぶい黄褐	普通	
	11	須恵器 甕	— (4.5) (14.6)	胴部～底部片。外面は横方向のヘラケズリ, 内面は横方向のヘラナデで孔周辺はヘラケズリ。	白色砂礫, 白色粒多, 白色針状物	7.5Y5/1灰: N5/ 灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
SI18	1	土師器 坏	— (1.3) (8.0)	体部下端～底部片。ロクロ成形。外面は回転ヘラケズリで底部底面は一部ナデ。内面黒色処理・密な1方向のミガキ。	白色砂礫, チャート, 白色針状物	7.5YR7/4にぶい橙: 10YR1.7/1黒	良好	
	2	土師器 坏又は椀	(16.0) (5.2) —	口縁部～体部片。ロクロ成形。内面黒色処理・密な横方向のミガキ。	白色砂礫, チャート, 白色針状物	10YR6/4にぶい黄橙: 10YR1.7/1黒	良好	
	3	土師器 高台付椀	(13.5) 4.8 (7.0)	20%存。ロクロ成形。底部は回転ヘラケズリ。高台部は貼り付け後ナデ。内面黒色処理・密なミガキ(体部横方向, 底部1方向)	透明粒, 砂粒, 白色針 状物	7.5YR6/6橙: 10YR1.7/1黒	良好	
	4	須恵器 坏	13.5 4.7 6.5	80%存。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラ切り後周縁部をナデ。切り離し痕が残存。体部から底部の一部に漆状のシミあり。	白色砂礫, チャート, 白色針状物	2.5Y5/2暗灰黄: 2.5Y5/2暗灰黄	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	5	須恵器 坏	13.5 4.9 7.3	60%存。ロクロ成形。体部下端は手持ちヘラケズリ。底部底面は回転ヘラ切り後ナデで線刻あり。	白色砂礫(大粒), チャート, 黒色粒, 白 色針状物	5Y5/1灰: 7.5Y6/1灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	6	須恵器 坏	(13.8) (4.0) —	口縁部～体部片。ロクロ成形。内外面の一部に漆状のシミあり。体部外面に墨書「口」あり。	白色砂礫, チャート, 黒色粒, 白色針状物	2.5Y6/2灰黄: 2.5Y6/2灰黄	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	7	須恵器 坏	— (3.1) (7.0)	20%存。口縁部は欠損。ロクロ成形。体部下端は手持ちヘラケズリ。底部底面は回転ヘラ切り後一部ナデ。	白色砂礫多, 白色針状 物	N5/ 灰: 10Y5/1灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	8	須恵器 坏	— (3.2) (7.2)	20%存。口縁部欠損。体部下端は手持ちヘラケズリ。底部底面は回転ヘラ切り後ナデ。線刻あり。	白色砂礫多, 白色針状 物	5Y4/1灰: 5Y4/1灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	9	須恵器 高台付坏	(16.0) (4.5) —	20%存。高台部欠損。ロクロ成形。高台部は貼り付け後ナデ。	白色砂礫(大粒)多, 白 色針状物	2.5YR4/3にぶい赤褐: 10YR4/1褐灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	10	須恵器 高台付坏	— (2.4) (10.0)	底部片。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラケズリで朱墨痕のシミと線刻あり。高台部は貼り付け後ナデ。	白色砂礫(大粒), チャート, 黒色粒, 白 色針状物	N6/ 灰: 7.5Y6/1灰	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	11	土師器 甕	(18.2) (16.0) —	40%存。胴下部から底部欠損。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面上半がナデ, 下半が縦方向のヘラケズリ, 内面が上部を横～斜方向, 下部を縦方向のヘラナデ。	白色砂礫, 砂粒多, 雲 母	2.5YR5/8明赤褐: 5YR5/8明赤褐	やや 良好	
	12	土師器 甕	(20.0) (7.0) —	口縁部～胴上部片。口縁部は内外面ともにヨコナデで外面にヘラ状工具痕が残る。胴部は外面がナデ, 内面が横方向のヘラナデ。	角閃石, 砂粒多, 雲母	5YR5/6明赤褐: 5YR5/4にぶい赤褐	やや 良好	

第3章 調査の成果

遺構番号	図面番号	種類器種	口径器高底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調(外面：内面)	焼成	備考
SI18	13	土師器甕	(20.7) (16.8) —	口縁部～胴部片。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面上部が横方向のヘラナデ、中程から下部で縦方向のまばらなミガキ、内面は上部が横方向、中程から下部が縦方向のヘラナデ。	黒色粒，砂粒，雲母， 白色針状物	7.5YR5/6明褐： 7.5YR5/8明褐	良好	
	14	須恵器甌	(29.6) (9.0) —	口縁部～胴部片。ロクロ成形。口唇部は面取り。	白色粒，チャート，白 色針状物	2.5Y6/2灰黄： 2.5Y6/2灰黄	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
SI19	1	土師器高台付椀	— (1.4) 6.5	底部片。ロクロ成形。高台部は貼り付け後ナデ。内面黒色処理で1方向の密なミガキ。	白色砂礫少，黒色粒， 白色針状物多	7.5YR6/6橙： 10YR1.7/1黒	良好	
	2	須恵器坏	14.0 5.5 6.5	50%存。口縁部～体部の約2/3を欠損。ロクロ成形。底部底面は回転ヘラ切り後ナデで切り離し部がわずかに残存。「×」の線刻あり。	白色砂礫(大粒)， チャート(大粒)，白色 針状物	5Y6/2灰オリーブ： 5Y6/2灰オリーブ	還元 堅緻	木葉下窯跡群 産
	3	土師器甕	(13.8) (6.1) —	口縁部～胴部片。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面がナデ，内面がヘラナデ。	白色砂礫，角閃石，透 明粒	7.5YR7/6橙： 5YR4/3にぶい赤褐	やや 良好	
	4	石製品砥石		長さ：〈6.4〉，幅：〈4.6〉，厚さ：0.6～3.0，重さ：〈68.5g〉 砂岩製。両端部及び片側欠損。3面使用で内1面は使用頻度が高く大きく抉れる。各面ともに不定方向の擦痕。				
SK10	1	土師器皿	(16.0) (2.2) —	口縁部～体部片。ロクロ成形。外面は口縁部がヨコナデ，下部が回転ヘラケズリ。内面は横方向の密なミガキ。	白色粒，角閃石，白色 針状物	7.5YR6/6橙： 7.5YR4/2灰褐	良好	
遺構外	1	縄文土器深鉢	— (4.2) (10.0)	胴部下端～底部片。外面は縦方向の丁寧なミガキ，下端部はケズリか。底部底面は網代痕か。	白色砂礫少，白色粒	7.5YR5/4にぶい褐： 7.5YR5/4にぶい褐	普通	SI05内出土
	2	石器剥片		長さ：1.9，幅：3.2，厚さ：0.9，重さ：〈5.9g〉 メノウ製。加工痕が認められる。				SI05内出土
	3	鉄製品刀子		長さ：〈7.5〉(刀身部長1.1，茎部長0.5)，厚さ：刀身部刃側0.1・背側0.4，茎部0.4，重さ：〈5.4g〉 切先部欠損。無関か。茎部側の錆化顕著で刀身部との境界が不鮮明。				D調査区 出土



第 42 図 古代の時期別遺構変遷図

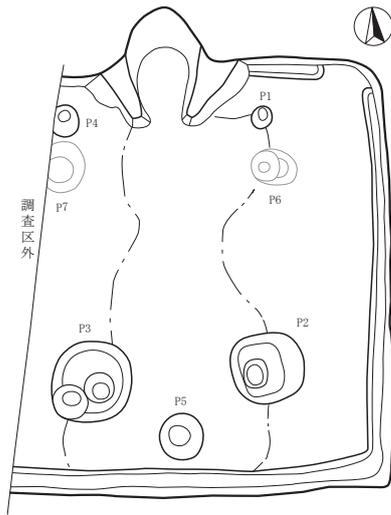
第4章 総括

第1節 土地利用の変遷

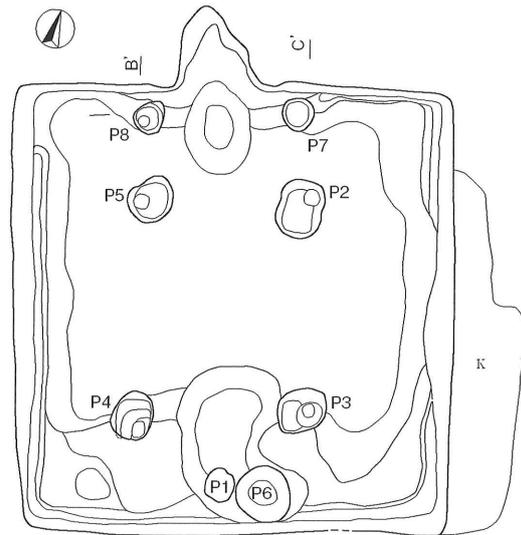
今次調査により検出された遺構は、遺物の出土は認められなかったものの、形態と覆土の状態から縄文時代の「陥し穴」として機能していた可能性の高い土坑3基と、古代の竪穴建物跡が17軒、掘立柱建物跡が1棟、そしてその時期と併行したと思われる土坑、ピットが32基、近世以降の所産と考えられる道路状遺構1条と、時期不明とした溝状遺構1条である。ここでは土地利用の変遷を概観しまとめたい。

まずは覆土の状況から縄文時代の帰属と考えたSX02～04だが、これは本文でも述べているように狩猟用の陥し穴として掘削されたものようで、各遺構の形状は平面では長楕円形を呈し、断面形状は底部を湧水の影響を受けずに完掘できたSX02とSX04をみると、長軸の両端がオーバーハングしながら水平方向に掘り込まれていた。今回の発掘調査で検出された遺構は、区画整理事業に伴う道路造成部分のみとなる狭い範囲のため、この遺構の台地上における配置状況や特性などについて言及することは難しいが、本遺跡付近の台地上にはこの狩猟用の「罾」を設置した人々が営んだ生活拠点が所在している可能性は高いものと考えられる。

続いて確認できたのは古代の竪穴建物跡で、7世紀末～8世紀初頭を最古としつつ、9世紀中葉もしくは後葉まで営まれた集落の一部であることが明らかになった。これらについて、出土した遺物の型式学的編年に基づいて、大きく4期に分けたのが第42図である。Ⅰ期は7世紀末～8世紀前葉で、SI01, SI03, SI04, SI05, SI08の5軒の竪穴建物跡が挙げられる。これらはいずれもカマドを付設する竪穴建物跡で、調査区の制約から全貌は確認できていないものの、現況から推定される規模・形状については極めて類似するものと考えられる。各遺構から出土した遺物をみると、概ね8世紀第1四半期～第2四半期の中間に位置づけられるものであるが、このうちSI08は7世紀末にまで遡っても違和感のない遺物の出土もみられたため、7世紀末～8世紀初頭と時期幅をもたせた。また、SI05の4（坏）については、胎土や器形などの特徴から湖西窯跡群産の搬入品である可能性がある。次にⅡ期は8世紀中葉～後葉である。これにはSI09, SI14, SI17の3軒が該当し、墨書土器と鉄製品（鎌）が出土しているが、墨書土器はⅣ期のものが混入した可能性が高い。Ⅲ期は8世紀後葉～9世紀前葉の範疇に収まるもので、SI02, SI07, SI15, SI16, SI18の5軒が該当し、遺構形状においても8世紀代の後半には成立する一般的な特徴を有す。Ⅳ期は出土遺物から9世紀前葉～後葉の帰属と判断した遺構だが、ここにはSI10, SI11, SI12, SI19の4軒が該当し、さらに細分すると、この中でもSI10, SI19がやや古相を呈しており、時期としては9世紀第1四半期～第2四半期の中間的な位置に帰属する土器群の出土がみられる一方、SI11とSI12は新相で9世紀中葉、SI12に至っては9世紀後葉まで下る可能性も考えられる。遺構の構造については9世紀中葉の帰属としたSI11が特徴的で、竪穴建物跡の構築当初に使用されていたであろう一般的な位置と規模を持つ支柱穴から、カマドの両脇壁下に小径の支柱穴へと規模を縮小して柱の据え換えが行われている。残るは1棟のみの検出となったSB01だが、こちらについては全容も確認できておらず、覆土から出土した小破片の遺物からも型式学的な編年に照らしてその帰属先を求めることは困難なため、大きく奈良・平安時代の所産として取り扱うこととした。以上、今回の調査成果により明らかとなった該期全般でみる集落の成り立ちとしては、7世紀末～8世紀前葉段階の帰属とした古い時期の竪穴建物跡群では調査区の北側（A区）



第19地点 SI11 平面図



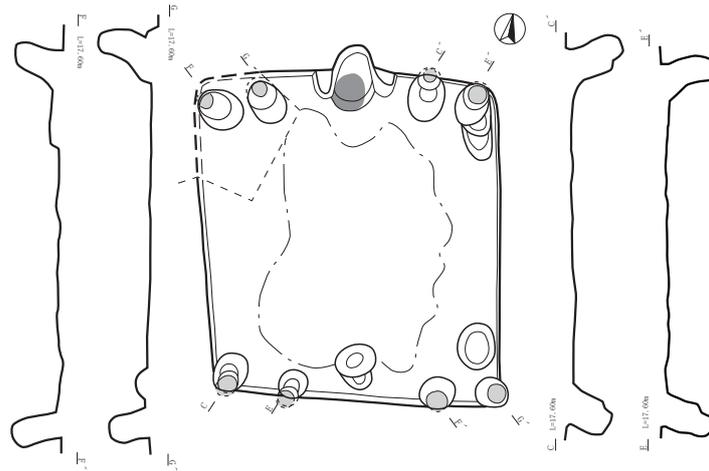
第3地点 1号竪穴建物跡 平面図

第43図 小原遺跡における竪穴建物

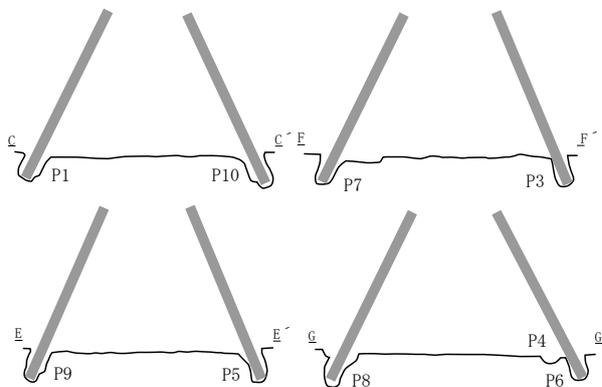
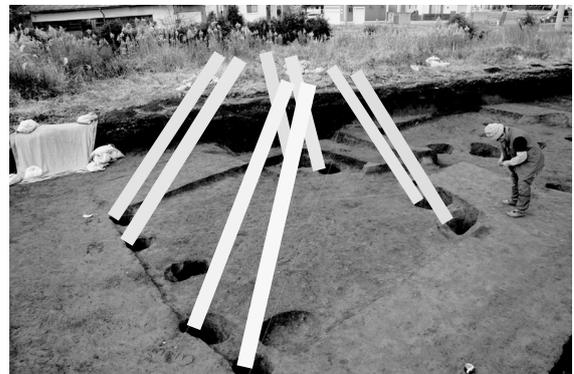
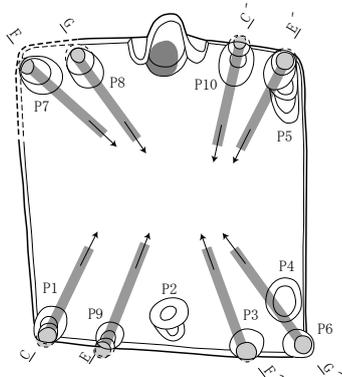
に集中する傾向がみられたが、その後、8世紀中葉段階から徐々に拠点となる竪穴建物跡群の南下（D区）が顕著となり、集落の展開が途絶える9世紀中葉ないしは後葉までほぼその地点付近に密集して竪穴建物跡が構築されていた様子を看取することができた。このことは、ほぼ隣接する小原遺跡（第3地点）や（第16地点）での調査成果も併せて考えると、現段階での小原遺跡全体として捉えた集落の土地利用における変遷は、遅くとも8世紀初頭の初現時には台地上の南北に分かれて点在するように構築されていた竪穴建物跡が、その後、8世紀中葉から集落の最盛期を迎える8世紀後葉から9世紀前葉にかけて本遺跡のD区付近に集約され、そのまま大きく拠点の移動をすることなく、9世紀中葉ないしは後葉に終焉を迎えたものだと理解できよう。

第2節 SI18の構造について

ここで、今回検出した遺構のうち、特異な柱穴配置の構造をもった竪穴建物跡について触れておきたい。この構造を有するのはD区から検出されたSI18（8世紀末～9世紀前葉）の1軒で、注目されるのはその支柱穴だと考えられるピットが穿たれた位置と基数である。県内でも8世紀末前後の帰属となる竪穴建物跡では、カマドの両脇やその対面など、どちらか片側一方に壁柱穴が配置される事例の報告はままあるものの、この遺構ではしっかりと掘り込まれたピットが北側と南側の壁下に合計8基構築されており、その底部では重量物を支えた際にできる硬く締った圧痕も認められている。通常では、同時期の帰属としたSI09やSI16のように、屋根構造が寄棟造や入母屋造等を連想させる位置に支柱穴が掘り込まれるものが一般的であるが、今回報告するSI18に限ってはこの定義には当てはまらず、北壁側ではカマドを中心として両側に2基ずつ計4基、南壁側でもやはりその対面と揃うよう2基ずつ計4基で、合計8基のピットが検出されたのである。さらにこの8基のピットは、いずれも竪穴建物跡の中央部に向かうかのように斜め方向へと掘り込まれたものである。なお、調査時には建物の建て替え、もしくは拡張の可能性も視野に入れながら慎重に遺構覆土の土層観察、掘り方の土層観察等にも留意して掘削調査を進めたが、そういった二次的な構造変更を裏付けるような痕跡を確認することはできなかった。これに従い、この8基のピットは同時期に機能していたものだと判断し



SI18 実測図



SI18 柱想像図

第44図 SI18柱構造復元図

た。このピットの掘削状況から鑑みて素直に思い浮かぶ堅穴建物跡の上屋形状としては、直立した壁面を持たない上屋のように地表から一体式の屋根構造となる、もしくは四角錐に近い形が推測される。水戸市内では東組遺跡（第1地点）SI09（9世紀中葉）や小原遺跡第13地点第3次SI03などでいくつか類例はあるものの、検出例はまだ少ないことから、現段階ではその特定は避け、可能性についてのみ示唆するに留めておく。しかしながら、建物の上屋構造を検討する上でも非常に興味深い資料となり得るものであろう。なお、本遺跡では当該堅穴建物跡以外にも同様の構造を持つ未発見の遺構が

第4章 総括

存在している可能性も考えられることから、以後の発掘調査においても、通常位でのピット検出作業はもとより、壁下の様子にも注視しながら、この特殊な柱穴配置の構造を見逃さないよう細心の注意を払った調査の履行が必要不可欠だと考える。

本稿では古代の竪穴建物跡と遺物、そして集落全体としての土地利用における時代変遷について概観してきた。小原遺跡では現在までに19地点での発掘調査が実施されており、徐々にではあるがその拡がりや集落の性格が明らかとなりつつある。そして今回の試掘調査と本調査の成果により、本遺跡で展開する集落の南端がおおむね本地点であろう事が明確となり、さらには、隣接する第3地点での集落の営みは8世紀の第4四半期から9世紀第3四半期が盛期であるとされている事から、土地利用の変遷についても、おぼろげながらではあるが時代を下るごとに台地の南側へと移動していった様子もうかがい知ることができた。いずれにせよ、今回の発掘調査は1,491 m²であったため、小原遺跡全体としては捉えられないが、本遺跡の性格を考えるうえでの新たな知見を得られた事は多大な成果といえよう。今後、近隣でのさらなる発掘調査の充実により集落の全貌がより鮮明になることを期待したいと思う。

引用・参考文献

- 浅井哲也 1992・1993 「茨城県内における奈良・平安時代土器（Ⅰ・Ⅱ）」『研究ノート』創刊号・第2号 財団法人茨城県教育財団
- 秋元吉郎校注 1958 「常陸国風土記」『風土記』日本古典文学大系2 岩波書店
- 太田有里乃・染井千佳・土生朗治 2015 『小原遺跡（第3地点 都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 伊東重敏 1976 『大六天古墳（森戸古墳群第12号墳）』茨城県東茨城郡常澄村教育委員会
- 井上義安 1985 『水戸市下畑遺跡 市道酒門8号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 1994 『水戸市大串遺跡 市道常澄8-1495号線埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 1998 『伊豆屋敷跡確認調査報告書 墓地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財研究会
- 井上義安・金子浩正 1996 『水戸市大串遺跡 常澄中学校増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市北屋敷古墳 市道常澄7-0057号線埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 小川和博・大淵淳志・川口武彦・木本孝周・渥美賢吾・関口慶久・株式会社京都科学
- 1995 『一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 梶内遺跡』財団法人茨城県教育財団
- 川口武彦 2005 「水戸市下入野町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会
- 2008 「水戸市百合が丘町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第30号 婆良岐考古同人会
- 川口武彦・小川和博・大淵淳志 2002 『水戸市元石川町所在 小仲根遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 川崎純徳・吹野富美夫 1986 『大串貝塚』常澄村教育委員会
- 常澄村史編纂委員会 1989 『常澄村史』
- 中山信名 1979 『新編常陸国誌』宮崎報恩会
- 問宮正光・米川暢敬 2015 『堀遺跡（第4地点） 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（平成10年度版） 1999
- 南田法正・山本千春・土井道昭・川口武彦・渥美賢吾 2009 『東組遺跡（第1地点） 物販店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 米川暢敬・齋藤 洋 2016 『小原遺跡（第16地点） 都市計画道路7・6・1号線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 米川暢敬・高野浩之 2016 『散野遺跡（第1地点） 新ごみ処理施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 米川暢敬・高野浩之・丸山優香里・昆 志穂 2016 『東前原遺跡（第7地点第2次） 区画道路10-2号線道路改良（その3）及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 米川暢敬・丸山優香里・高野浩之 2016 『東前原遺跡（第8地点第3次） 区画道路10-2号線道路改良（その1）及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会

写真図版



A区全景 (1) 南から



A区全景 (2) 北から



B区全景 (1) 東から



B区全景 (2) 西から



C区全景 (1) 西から



C区全景 (2) 東から



D区全景 (1) 南から



D区全景 (2) 北から



SX02 全景 南東から



SX03 全景 北から



SX04 全景 南から



SX04 土層断面 南東から



SI01 全景 南から



SI01 カマド近景 南から



SI02 全景 南から



SI03 全景 南から



SI03 鉄製品出土状況 北東から



SI04 全景 南から



SI04 土層断面 南東から



SI05 全景 南から



SI05 カマド近景 南から



SI05 土層断面 西から



SI05 土製品出土状況 東から



SI07 全景 西から



SI07 土層断面 南東から



SI08 全景 北から



SI08 カマド土層断面 東から



SI09 全景 南東から



SI09 土師器（墨書）出土状況 東から



SI09 鉄製品出土状況 南から



SI10 全景・土層断面 南東から



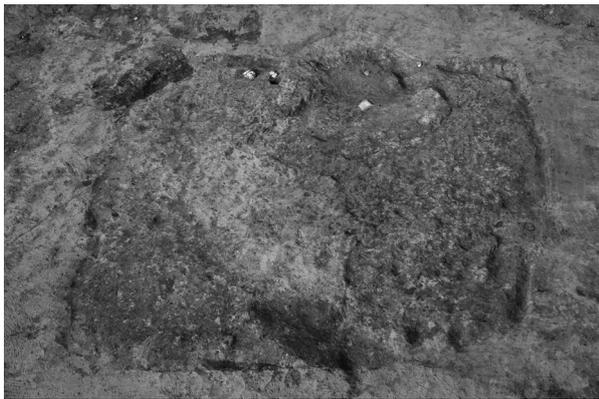
SI10 須恵器出土状況 南東から



SI11 全景 南から



SI11-P3 全景 南東から



SI12 全景 南から



SI14 全景 南から



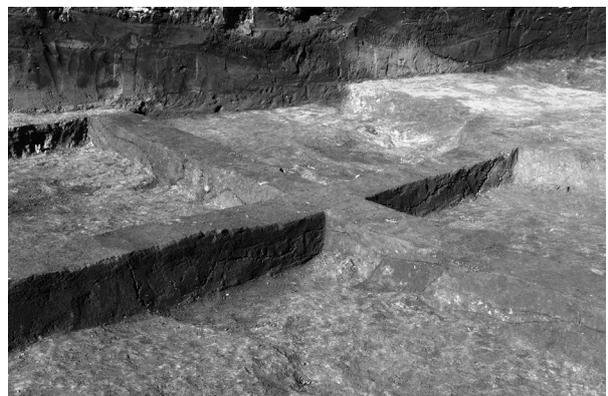
SI15 全景 南から



SI15 土層断面 東から



SI16 全景 南から



SI16 土層断面 南東から



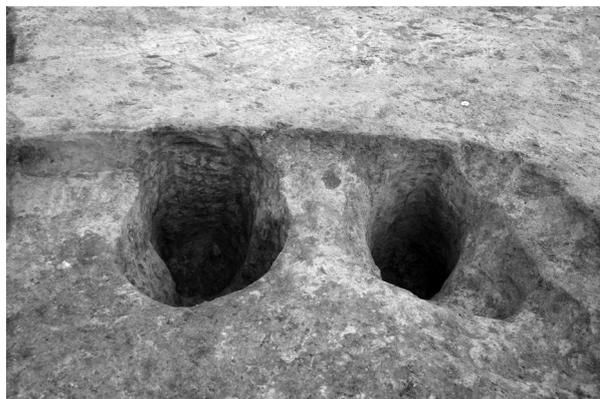
SI17 全景 南から



SI18 全景 南から



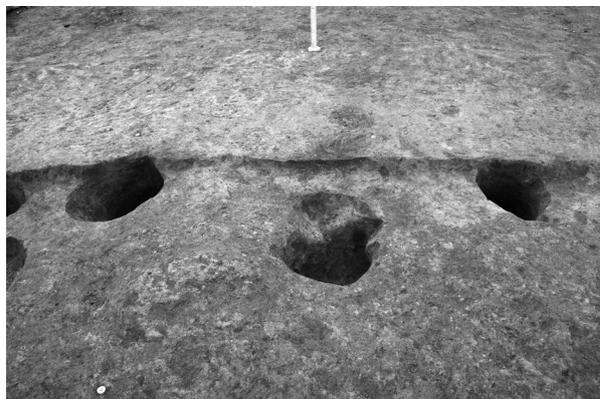
SI18 柱穴近景 (1) 南東から



SI18 柱穴近景 (2) 南から



SI18 柱穴近景 (3) 北から



SI18 柱穴近景 (4) 北から



SI18 カマド遺物出土状況・土層断面 東から



SI19 全景 南から



SB01 全景 南西から



SB01-P1 土層断面 南から



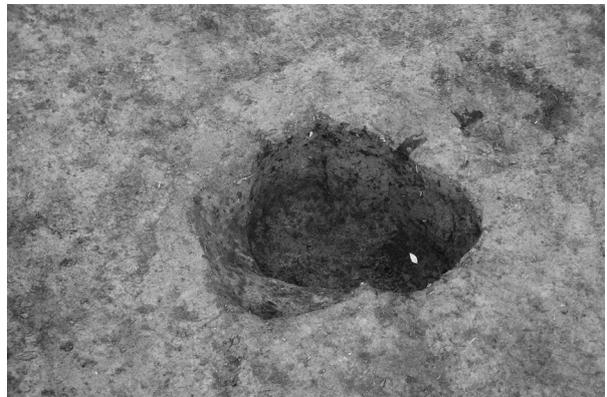
SB01-P2 土層断面 南から



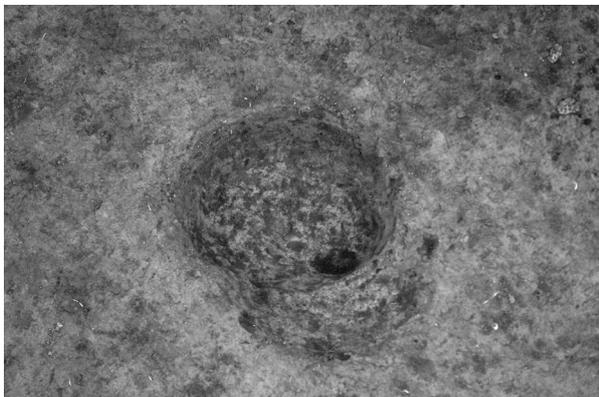
SB01-P3 土層断面 南から



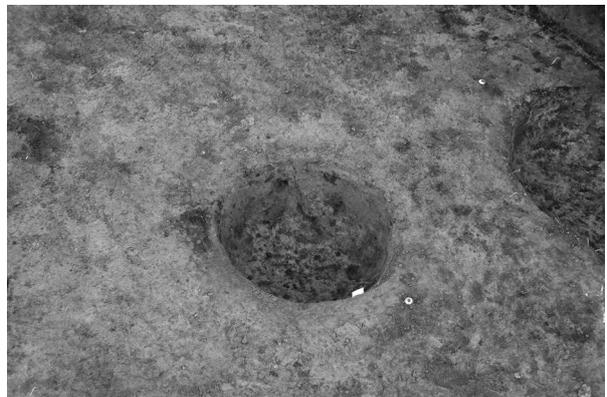
SK01・04 全景 西から



SK02 全景 西から



SK03 全景 西から



SK05 全景 北西から



SK06 全景 北西から



SK07 全景 南西から



SK08 全景 南東から



SK09 全景 南東から



SK11 全景 南西から



SK12 全景 南西から



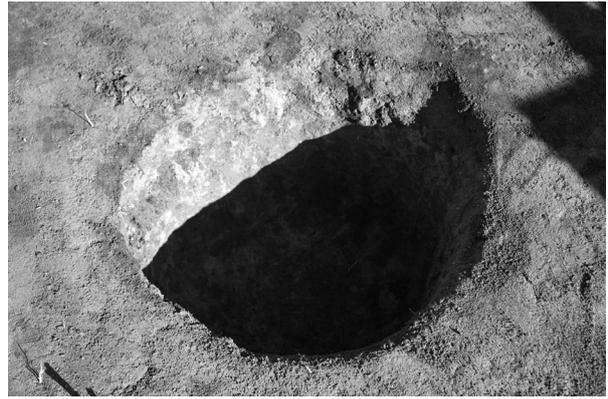
SK13 全景 南西から



SK14 全景 南西から



SK15 全景 西から



SK17 全景 南西から



SK18 全景 南西から



SK19 全景 南西から



SK20 全景 南から



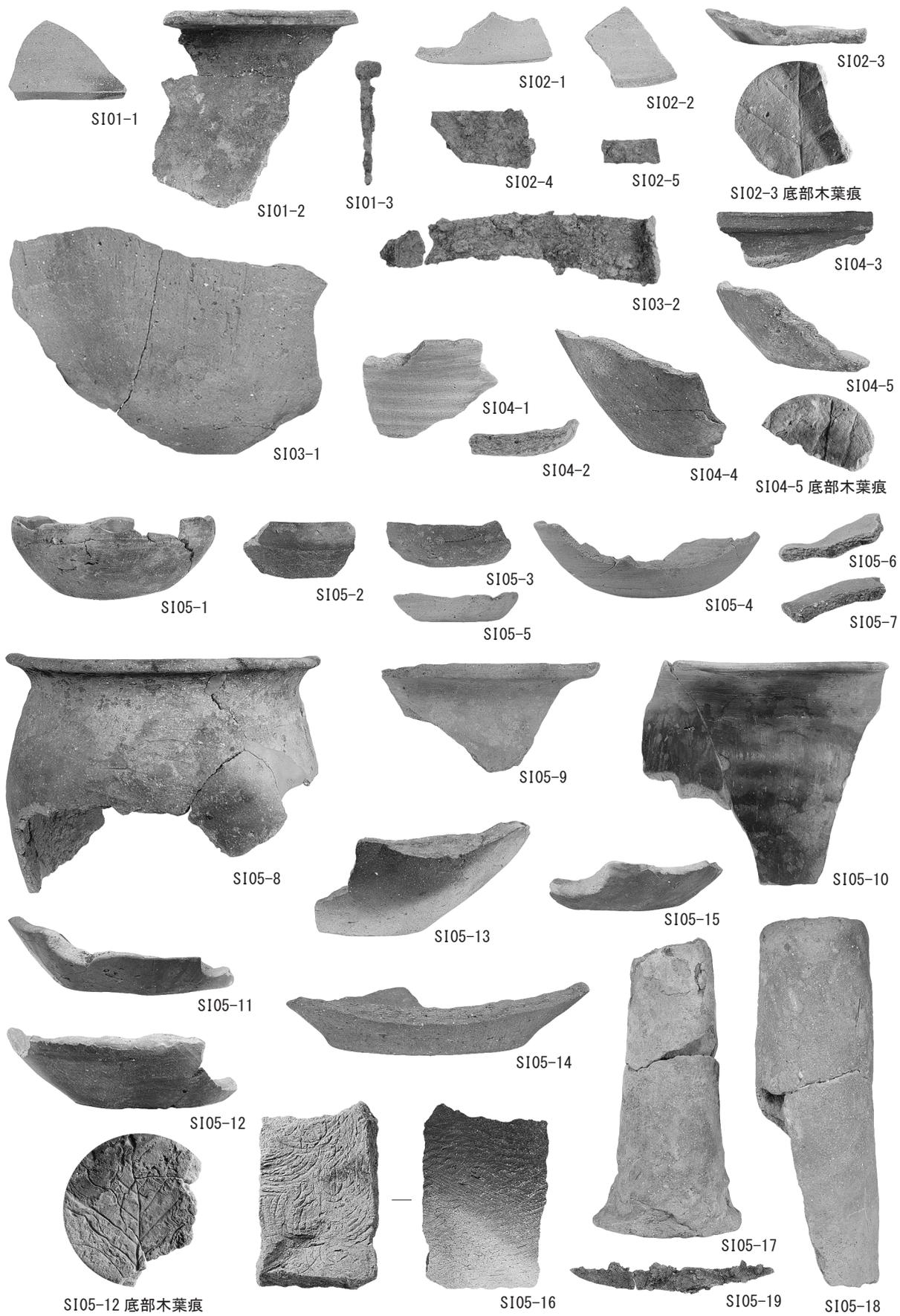
SK23・24・25 全景 東から



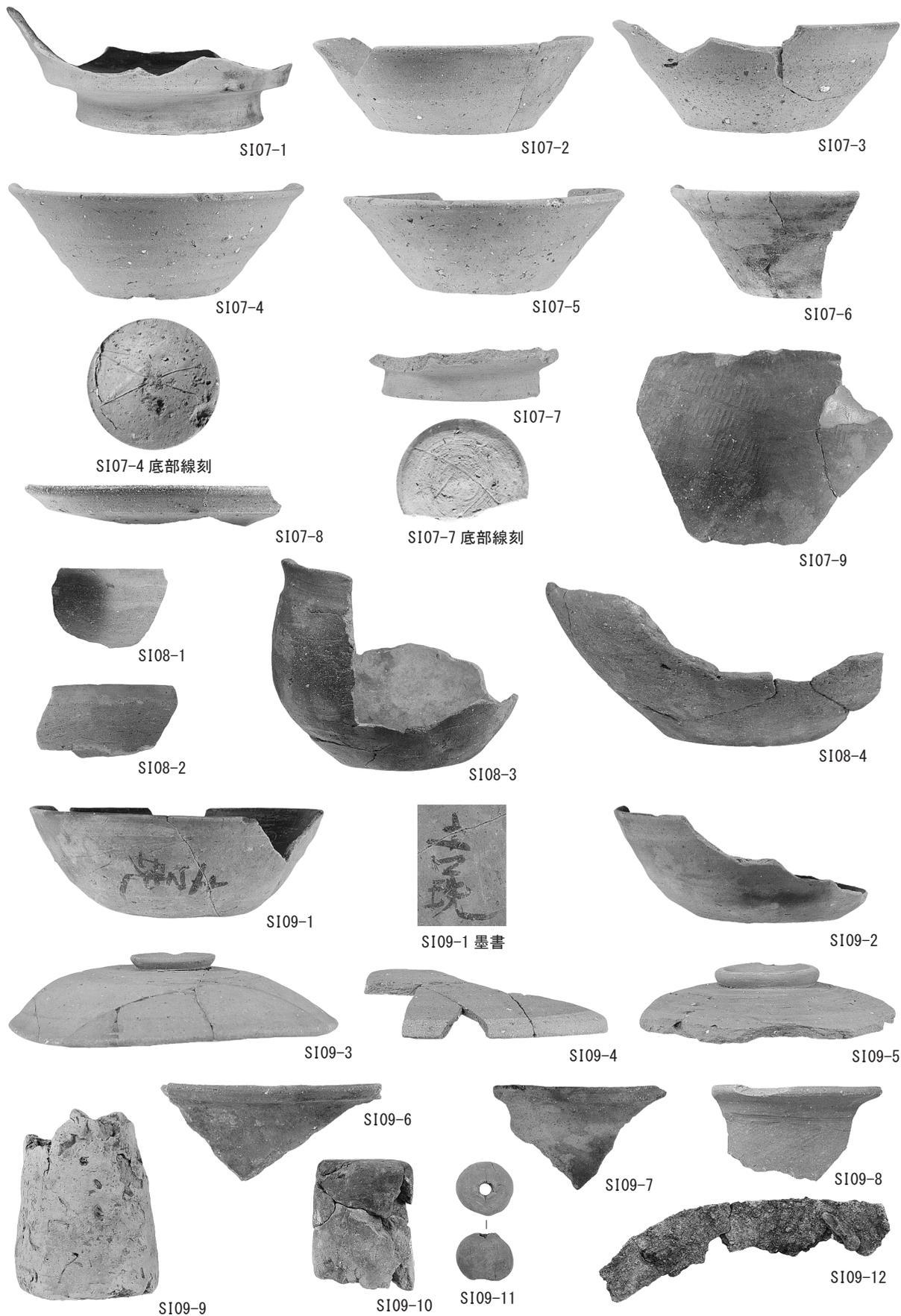
SX01 全景 西から



SX01 土層断面 北から



S101 · 02 · 03 · 04 · 05 出土遺物



SI07・08・09 出土遺物



SI10-1



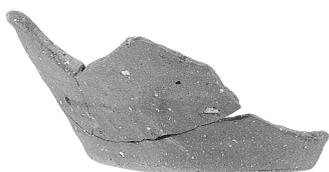
SI10-3



SI10-1 底部線刻



SI10-2



SI11-1



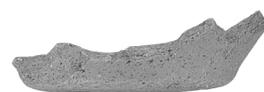
SI11-2



SI11-3



SI11-4



SI11-5



SI11-5 底部線刻



SI11-1 底部線刻



SI11-6



SI11-7



SI11-8



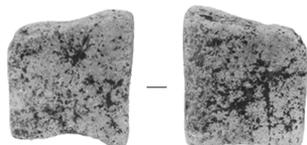
SI11-9



SI11-11



SI11-10



SI11-12



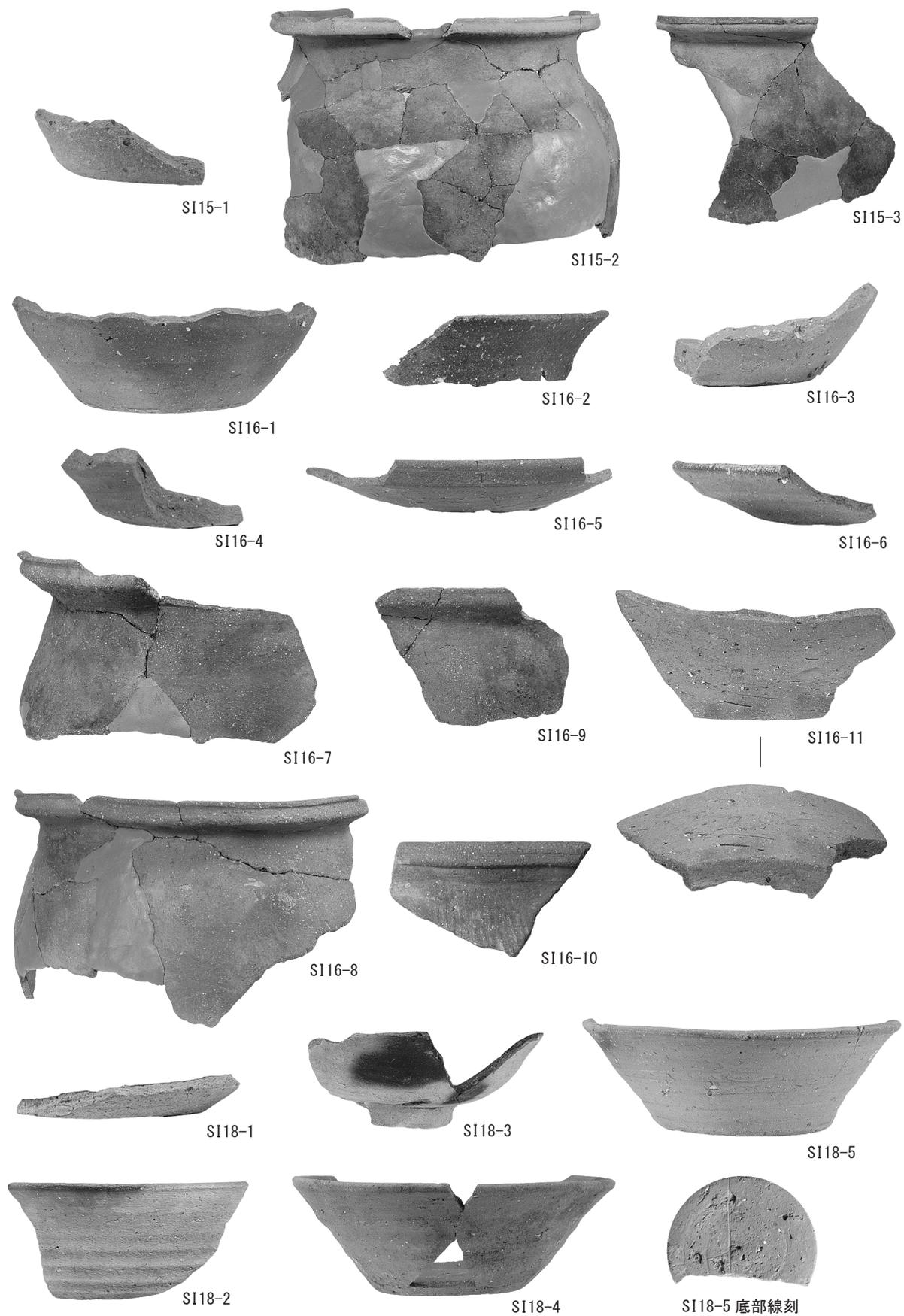
SI11-13



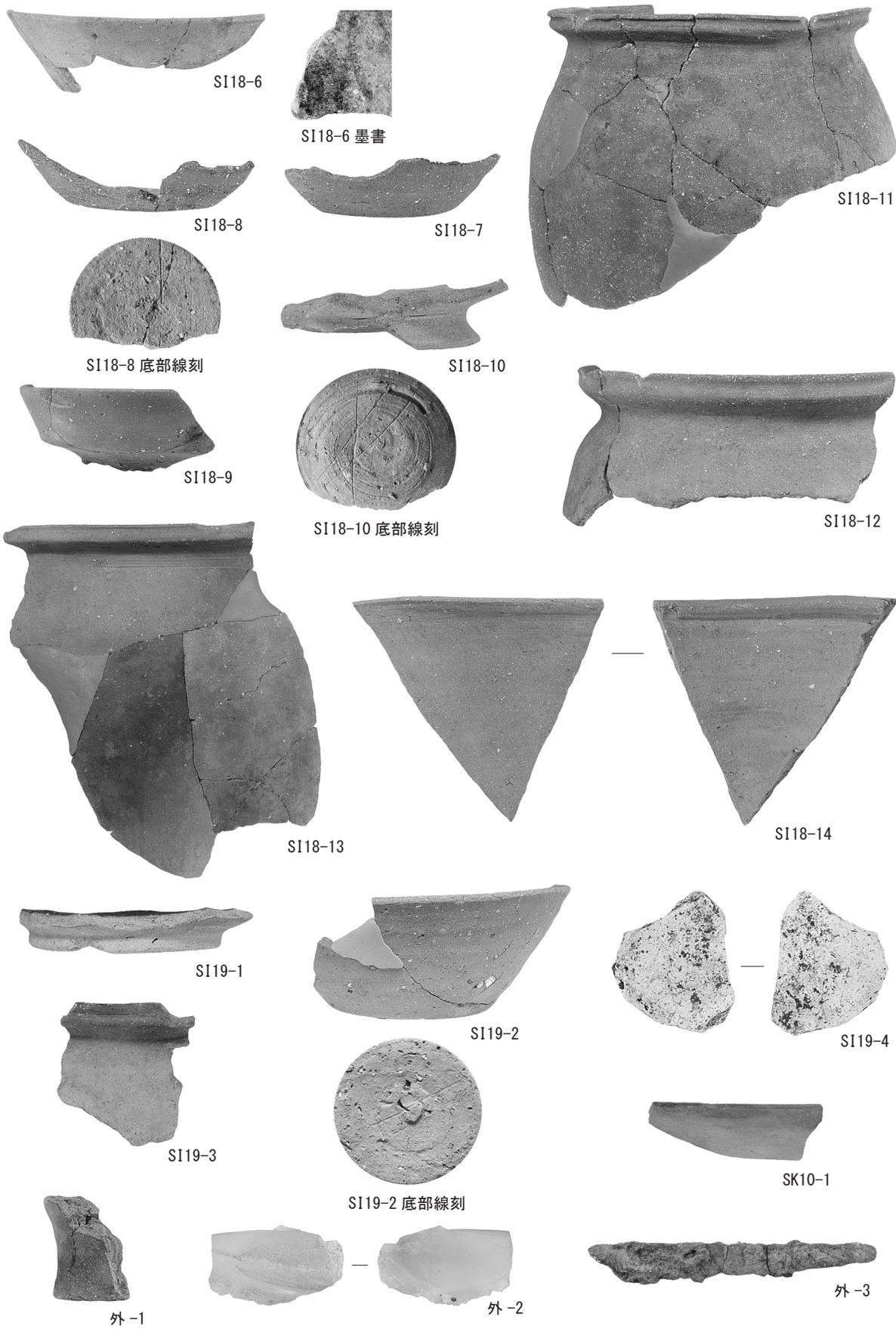
SI10・11・12 出土遺物



SI12-1



SI15 · 16 · 18 (1) 出土遺物



S118 (2) · 19, SK10, 遺構外出土遺物

水戸市埋蔵文化財調査報告第 90 集

小 原 遺 跡

(第 19 地点第 2 次)

都市計画道路 7・6・1 号東前原線外 2 路線道路改良及び流域
関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 29 年 3 月 10 日 印刷

平成 29 年 3 月 17 日 発行

編 集 株式会社 地域文化財研究所

発 行 水戸市教育委員会

印 刷 株式会社 ライフ TEL 0476-24-1564

抄 録

ふりがな	こはらいせき だいじゅうきゅうちてんだいにじ							
書名	小原遺跡 (第19地点第2次)							
副書名	都市計画道路7・6・1号東前原線外2路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第90集							
編集者名	小川将之・野村浩史・斎藤 洋							
著者名	米川暢敬・斎藤 洋							
編集機関	株式会社地域文化財研究所 〒270-1327 千葉県印西市大森2596-9 TEL 0476-42-7820							
発行機関	水戸市教育委員会 〒310-0852 茨城県水戸市笠原町978-5 TEL 029-306-8132 (担当) 教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター 〒311-1114 茨城県水戸市塩崎町1064-1 大串貝塚ふれあい公園内 TEL 029-269-5090							
発行年月日	2017年3月17日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
こはらいせき 小原遺跡	いばらきけん 水戸市東前町 茨城県水戸市東前町 1073ほか	08201	183	36° 20' 18"	140° 31' 35"	2016.11.10 ～ 2017.01.10	1,491 m ²	道路改良及び流域関連下水道工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小原遺跡	集落跡	縄文時代	陥し穴状遺構 3基	縄文土器：深鉢 剥片：メノウ		縄文時代ではA～C区より狩猟目的の陥し穴と考えられる遺構を3基検出。 奈良・平安時代では8世紀末～9世紀前葉のSI18が特殊な構造を有しており、遺構の壁直下から支柱穴と考えられるピットを8基検出している。これら各ピットの掘り方は、いずれも遺構中心部に向かう様相を呈し、斜方向へしっかり穿たれる。併せて、本遺構には拡張、建て替えの痕跡は認められない。		
		奈良・平安時代	竪穴建物跡 17軒 掘立柱建物跡 1棟 土坑 25基 ピット 7基	土師器：坏・高台付坏・甕・甌・鉢・高台付椀・皿 須恵器：坏・高台付坏・盤・蓋・甕・甌・鉢・壺・瓶類・高坏 土製品：支脚・土玉・粘土塊 石製品：砥石(破片) 鉄製品：刀子・鎌・釘 瓦：平瓦				
		近世以降	道路状遺構 1条					
		時代不明	溝状遺構 1条	鉄滓				
要約	小原遺跡(第19地点第2次)は、縄文時代から近世以降までの遺構と遺物が認められる複合遺跡であるが、特に奈良・平安時代の集落展開に伴う痕跡が顕著で、8世紀前葉を初現として、その後8世紀中葉～後葉にかけてピークを迎え、9世紀中葉～後葉には終焉を迎えている。							